県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

道　下　遺　跡

平成３年11月

香　川　県　教　育　委　員　会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

序　　文

香川県では，昭和63年４月の瀬戸大橋開通をはじめとして，四国横断自動車道（善通寺～豊浜，高松～善通寺），高松東道路，県道など県内の道路網の整備が進められております。これに伴い埋蔵文化財の発掘調査による記録保存の件数も増加し，香川県の歴史を明らかにするうえでさまざまな新知見をもたらしております。

今回報告いたします道下遺跡は，県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴い発掘調査を実施し，縄文時代晩期から近世に至るまでの遺構・遺物を検出しております。

本書はこれらの成果をまとめたものであり，香川県の歴史研究の資料として広く活用され，埋蔵文化財に対する理解と関心が深められる一助となれば幸いであります。

最後になりましたが，発掘調査から遺物の整理・報告に至るまでの間，県土木部道路課，関係諸機関及び地元関係各位に多大な御援助・御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。

平成３年11月

香川県教育委員会

教育長　松繁　壽義

例　　言

1．本報告書は，県道多度津丸亀緊急地方道路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり，香川県丸亀市金倉町に所在する道下遺跡（みちしたいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は，香川県教育委員会が香川県（土木部道路課）から委託され，香川県教育委員会が調査主体，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査は，試掘調査を平成元年12月18日から12月22日まで実施し，本調査を平成２年10月１日から平成３年３月31日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

試掘調査	香川県教育委員会事務局文化行政課	主任技師	岩橋　孝
本調査	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター	係　長	廣瀬常雄
	同	技　師	宮崎哲治
	同	嘱　託	間瀬　香

4．調査にあたって，下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

香川県土木部道路課・地元自治会

5．本報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の編集執筆は宮崎が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は，国土座標第Ⅳ系の北であり，標高はＴ．Ｐ．を基準としている。

また，遺構は下記の略号により表示している。

ＳＤ	溝状遺構	ＳＫ	土坑
ＳＰ	柱穴	ＳＲ	自然河川
ＳＸ	素掘り溝・不明遺構		

7．挿図の一部に国土地理院発行の25,000分の１地形図「丸亀」・「善通寺」を使用した。

表　目　次

1　整理作業工程表
2　周辺の遺跡一覧表①
3　周辺の遺跡一覧表②
4　遺物観察表①
5　遺物観察表②
6　遺物観察表③
7　遺物観察表④
8　遺物観察表⑤
9　遺物観察表⑥（石製品）
10　溝状遺構一覧表
11　土坑一覧表

図　版　目　次

図版 1　(1)道下遺跡調査区遠景①
(2)道下遺跡調査区遠景②
2　(1)道下遺跡調査区遠景③
(2)A1全景（東より）
3　(1)SD01全景（北東より）
(2)SD02・SK01・02全景（北より）
4　(1)A2全景（西より）
(2)SD03全景（南東より）
5　(1)SD03土層断面図（北西より）
(2)SD06・08全景（南より）
6　(1)SD07全景（西より）
(2)SD07土層断面（西より）
7　(1)SD09土層断面（東より）
(2)SD09遺物出土状況
8　(1)SD10・11・14全景（北より）
(2)SK09全景（北より）
9　(1)B1全景（東より）
(2)SD15全景（南東より）
10　(1)SD16・17全景（南より）
(2)SD19全景（西より）
図版11　(1)SD20全景（北西より）
(2)SD20土層断面（北より）
12　(1)SD21土層断面（北より）
(2)B2全景（東より）
13　(1)B2全景（西より）
(2)SD22・ピット群（北西より）
14　(1)SK14全景（南より）
(2)SK15全景（北より）
15　(1)ピット群（南西より）
(2)B3南半部全景（東より）
16　(1)B3南半部全景（北東より）
(2)B3北半部全景（東より）
17　(1)SD 23全景（南より）
(2)SK16全景（東より）
18　(1)SK21全景（北より）
(2)C区SX02全景（北西より）
19　(1)SD26全景（西より）
(2)SK23全景（南より）
20　(1)SD01・SR01出土遺物
21　(2)SD03出土遺物

22 (1)SD07出土遺物

(2)SD04出土遺物

(3)SD08出土遺物

23 SD09出土遺物①

24 SD09出土遺物②

25 (1)SD19出土遺物

(2)SD12出土遺物

26 SD24出土遺物①

27 SD24出土遺物②

28 (1)SD24出土遺物③

(2)SD26出土遺物

(3)SK16出土遺物

29 包含層出土遺物①

30 包含層出土遺物②

31 包含層出土遺物③

挿　図　目　次

1　道下遺跡位置図
2　周辺の遺跡分布図
3　調査区設定図
4　土層序模式図
5　遺構平面図①（A1）
6　遺構平面図②（A2）
7　遺構平面図③（B1）
8　遺構平面図④（B2）
9　遺構平面図⑤（B3）
10　遺構平面図⑥（C）
11　SD01断面図
12　SD01・SR01出土遺物実測図①
13　SD01・SR01出土遺物実測図②（石製品）
14　SD03断面図
15　SD03出土遺物実測図
16　SD04断面図
17　SD04出土遺物実測図
18　SD05・08断面図
19　SD07断面図
20　SD07出土遺物実測図①
21　SD07出土遺物実測図②（石製品）
22　SD08出土遺物実測図
23　SD09断面図
24　SD09遺物出土状況平面図
25　SD09出土遺物実測図
26　SD10・11・14断面図
27　SD09・12断面図
28　SD12出土遺物実測図（石製品）
29　SD15断面図
30　SD18断面図
31　SD19断面図
32　SD19出土遺物実測図①
33　SD19出土遺物実測図②（石製品）
34　SD20出土遺物実測図（石製品）
35　SD23断面図
36　SD20・21断面図
37　SD20断面図
38　SK02断面図
39　SD26出土遺物実測図
40　SD24・SD25・SK17断面図
41　SD24出土遺物実測図
42　SK12断面図
43　SK16断面図
44　SK16出土遺物実測図
45　SK23断面図
46　SD03・06断面図
47　SD16・17断面図
48　SK01・03・04・05・06・07断面図
49　SK08・09・10・11・14断面図
50　SK15・18・19・20・21断面図
51　包含層出土遺物実測図①
52　包含層出土遺物実測図②（石製品）
53　発掘調査風景
54　道下遺跡遺構変遷図
55　発掘調査に従事した人々

目　　次

第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経過と調査の方法 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 2
第２章　立地と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の成果 …… 13
　第１節　土層序 …… 13
　第２節　遺構・遺物 …… 27
　　１．遺構・遺物の概要 …… 27
　　２．弥生時代の遺構・遺物 …… 27
　　３．中世・近世の遺構・遺物 …… 50
　　４．時期不明の遺構 …… 56
　　５．包含層出土の遺物 …… 62
第４章　総括 …… 65

第１章　　調査の経緯

第１節　調査に至る経過と調査の方法

香川県教育委員会では，丸亀善通寺平野において，これまでの発掘調査や土木工事等に伴って多くの埋蔵文化財包蔵地が分布していることを確認してきた。近年，四国横断自動車道（善通寺～豊浜・高松～善通寺）建設に伴って，丸亀平野を横断する形で埋蔵文化財の発掘調査を実施した結果，同平野では，埋蔵文化財包蔵地はより広域にわたって分布していることが確認された。

今回，丸亀市金倉町に県道多度津丸亀線の整備が計画され，その路線が周知の埋蔵文化財包蔵地である道下遺跡にかかることとなった。このため香川県教育委員会では，当該地の埋蔵文化財の包蔵状況を正確に把握することを目的として，試掘調査を実施した。

試掘調査は，平成元年12月18日から12月22日の期間で，県道整備予定地に13箇所のトレンチを設定して実施した。その結果，県道整備予定地の西半部において，弥生時代後期を中心とする埋蔵文化財の包蔵地を確認することができた。この試掘結果をふまえて，香川県教育委員会では，県土木部道路課と協議し，発掘調査を実施することを決め，発掘調査の実施を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託した。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは，平成２年10月１日から平成３年３月31日までの期間で，発掘調査を実施した。

調査区は概ね東西方向に細長く延び，複数の市道・私道と農業用の水路が調査対象地を横断していることを考慮して，中央を横断する市道を境として大きく２地区に分け，西からＡ・Ｂ地区とした。さらに，私道と水路を境としてＡ地区を２地区に，Ｂ地区を３地区に分け，調査を実施した。また，Ｂ地区東端から約 100m東で設定した飛び地部分（推定条里坪界線）はＣ地区として調査を実施した。（第３図）

調査の基準となる杭は，県道整備予定地のセンターライン上に20m間隔で，県土木部道路課が打設した杭を使用した。さらに，航空測量の際に同時に基準点測量を行ない，国土座標との対応をはかった。

第2節　調査の経過

1　発掘作業の経過

平成2年度期間中の調査体制は、以下の組織表のとおりである。

香川県教育委員会　　文化行政課

総括	課長	太田彰一
	課長補佐	菅原良弘
	副主幹	野網朝二郎
総務	係長	宮内憲生
	主任主事	横田秀幸
	主事	水本久美子（～5.31）
	主事	石川恵三子（6．1～）
文化財担当	係長	大山真充
	主任技師	岩橋　孝
	技師	北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	十川　泉
	次長	安藤道雄
総務	係長	加藤正司
	主任主事	黒田晃郎
県事業担当	係長	廣瀬常雄
	技師	宮崎哲治
	嘱託	間瀬　香

発掘作業は，平成2年10月1日から平成3年3月31日まで実施した。発掘作業の経過については，以下に調査日誌抄を掲げる。

調査日誌抄

10月

8日　調査地を視察。
27日　調査用具搬入。
29日　普通作業員雇用開始。
　　C区の調査にかかる。

11月

5日　C区調査完了。
21日　プレハブ設置。調査用具搬入。
26日　A2の調査開始。
　　普通・軽作業員雇用再開。
29日　B3（北半）の調査開始。

12月

3日　調査区内の安全総点検のため，作業中止。
4日　調査再開。
18日　A2・B3（北半）完掘。
19日　A2・B3（北半）を航空測量。
　　A2の断ち割り開始。
25日　A2・B3（北半）調査終了。
28日　調査用具・調査区内の整理整頓。
　　本年の調査終了。

1月

8日　本年の調査開始。A1の調査開始。
23日　B1の調査開始。
24日　B3（南半）の調査開始。
29日　B2の調査開始。

2月

13日　B1調査終了。
14日　B2・B3（南半）調査終了。
19日　強風波浪注意報発令。ヘリコプターが離陸できずに航空測量順延。
20日　A1・B1・B2・B3（南半）の航空測量。
22日　B2・B3の断ち割り開始。
23日　B1の断ち割り開始。

3月

6日　B2・B3の調査終了。
7日　A1の調査終了。
8日　B1の調査終了。
13日　埋め戻し開始。
15日　埋め戻し終了。調査用具搬出。
28日　プレハブ撤去。
　　道下遺跡の発掘調査を終了する。

－発掘調査に従事した人々－

饗庭　澄男	浅尾　静代	池田　敬子	池田やよい
浦野　房子	岡崎　愛子	小野　春代	香川　桂子
香川　貞美	唐住　和子	木戸　国市	塩田　浩一
正　嘉代子	杉崎　春子	杉原　喬	関　宏
高木　一枝	竹内　文雄	林　佐智子	堀家千代子
松原　忠俊	真室　静枝	山崎美智子	山口ハルミ
横田八重子			

2　整理作業の経過

平成３年度期間中の整理体制は，以下の組織表のとおりである。

香川県教育委員会　文化行政課

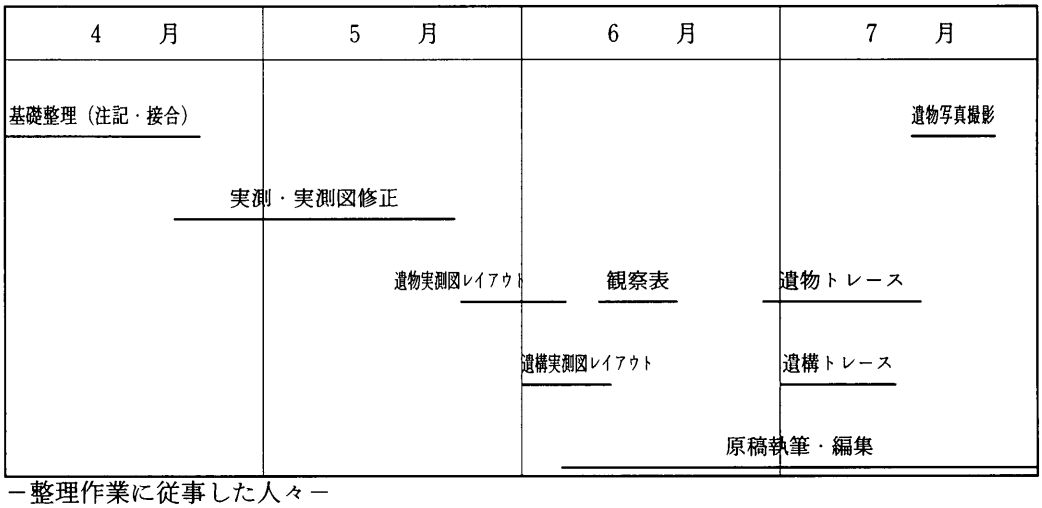
総括	課長	中村　仁
	主幹	菅原良弘
	課長補佐	小原克巳（6．1～）
総務	係長	宮内憲生
	主任主事	横田秀幸（～5.31）
	主事	桜木新士（6．1～）
	主事	石川恵三子
文化財担当	係長	藤好史郎
	主任技師	岩橋　孝
	主任技師	北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	松本豊胤
	次長	安藤道雄
総務	係長	加藤正司（～5.31）
		土井茂樹（6．1～）
	主任主事	黒田晃郎
県事業担当	係長	廣瀬常雄
	技師	宮崎哲治

整理作業は，平成３年４月１日から平成３年７月31日まで実施した。整理作業の経過については，第１表にまとめて掲げる。

第１表　整理作業工程表



－整理作業に従事した人々－

大沢多鶴子	大田　和子	小畑三千代	藤堂　収子
西山佳代子	村山　文子	若山　淳子	

第2章　立地と環境

第1節　地理的環境

丸亀市は香川県のほぼ中央部に位置する。東は綾歌郡宇多津町・坂出市・綾歌郡飯山町，南は綾歌郡綾歌町・仲多度郡満濃町・同郡琴平町，西は善通寺市・仲多度郡多度津町，北は瀬戸内海に面し，対岸には岡山県倉敷市・笠岡市がある。

第1図　道下遺跡位置図

丸亀市の所在する丸亀平野は，東から順に大束川・土器川・金倉川・弘田川によって形成された緩扇状地・氾濫原と沖積平野から成る県下最大規模の平野である。現在は，土器川河口付近の西側に丸亀市の市街地が広がり，金倉川中流の西側の山麓に善通寺市の市街地が広がっている。丸亀平野は南から北に向かって緩やかに傾斜しながら瀬戸内海に至るが，凹凸が少ない平坦な地形をしているため，条里地割による方形土地区画をよく残した水田が広がっている。

道下遺跡は丸亀平野の中央を蛇行しながら流れる金倉川下流の東岸に位置する。標高は7m前後を測る。当該地の東西両側には天満池・瓢池の二つの溜池が存在する。これらの溜池の南側にはそれぞれ旧河道が存在していたことが，航空写真や現地形等から読み取ることができる。したがって当該地は二本の旧河道に挟まれた微高地であったことがわかる。

第2節　歴史的環境　（第2図・第2・3表）

丸亀平野では，南西部（現在の善通寺市域）に遺跡が集中していることが古くから知られており，平野中央部から北の海岸線にかけては遺跡の分布はほとんど知られていなかった。しかし，近年の発掘調査によって，平野中央部にも多くの遺跡が存在することが確認されている。特に四国横断自動車道建設に伴う発掘調査は，丸亀平野の中央部を東西に横断するもので，幾つもの新知見をもたらしている。

道下遺跡の周辺に目を向けてみると，周知の遺跡は中の池遺跡一つを数えるにすぎない。このことは周辺での調査がほとんど行われていないことに起因するものであろう。丸亀平野に立地する遺跡は，既に多くの文献に記述されていることから，本書では遺跡分布図と遺跡一覧表を作製し，これに替えることとする。

後述するように，道下遺跡は弥生時代終末期の遺構・遺物を中心とした遺跡であるが，弥生時

代前期の遺構・遺物も検出している。そこで本節では，丸亀平野の弥生時代の遺跡について，紙数をさいて概観してみる。

弥生時代前期

弥生時代前期の遺跡としては，中の池遺跡（第2図　9）・五条遺跡（12）・龍川五条遺跡（45）・三井遺跡（36）・乾遺跡（38）・稲木遺跡A地区（41）・石川遺跡（17）・甲山北遺跡（21）の8遺跡があげられる。このうち甲山北遺跡を除く7遺跡が，金倉川・土器川の形成した緩扇状地上に立地し，さらに稲木遺跡A地区・石川遺跡を除く5遺跡が，扇端部に立地している。扇端部前面には沖積平野の低地形が広がり，また，扇端部は扇状地地下を流れる伏流水が地表に出現しやすい地形である。扇状地においては河川の河床が低いため揚水は困難であり，河川の流水を利用することよりも扇端部の湧水を利用したであろうことは想像に難くない。つまり，当時の人々は比較的安定した扇端部の高所に居住し，湧水を利用しながら沖積平野の低地を耕作地としていたことが考えられるのである。なお，これらの扇端部に立地する遺跡は，より安定した居住地として自然堤防等の微高地を選択したものと考えられる。前期の遺跡の中で実態の明らかなものは，環濠集落である中の池遺跡・龍川五条遺跡の2遺跡にすぎないが，いずれも継続的に営まれたものではなく，一部中期に入るようであるが，比較的短期間で廃絶してしまう。

弥生時代中期

弥生時代中期の遺跡は，扇状地に立地する彼ノ宗遺跡（23－A）・九頭神遺跡[註1]（19）を除くと，山頂及び山裾に立地する。山裾の遺跡としては矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡，山頂の遺跡としては散布地ではあるが，青ノ山山頂遺跡（2）・飯野山山頂遺跡があげられる。この2遺跡は弥生時代中期の土器片が少量採集されているだけで，集落跡であるかは，現在のところ確認されてはいない。とくに讃岐富士の名称をもつ飯野山の山頂からは，長頸壺が1点出土しており，山頂の祭祀遺跡の可能性もある。いずれも中期に入ってから出現した遺跡であるが，扇状地の彼ノ宗遺跡が古墳時代まで存続するのに対して，山裾の矢ノ塚遺跡・西碑殿遺跡は古墳時代まで存続せず弥生時代のうちに廃絶している。この両者の違いについては様々な原因が考えられるが，その一つとして立地条件があげられる。扇状地・山裾という立地条件の違いは，生産基盤である耕作地の規模の差として，更には収穫量の差として現れる。つまり，立地条件の違いによる生産力の差が，集落の存続に反映した結果と看取できよう。なぜ条件の悪い山頂に集落を形成したのか，その理由は不明である。ただ，この時期は汎西日本的に高地性集落が急増する傾向が認められ，それと軌を一にする現象と理解できよう。

一方，扇状地・沖積平野部においては彼ノ宗遺跡・九頭神遺跡以外に中期の遺跡は知られ

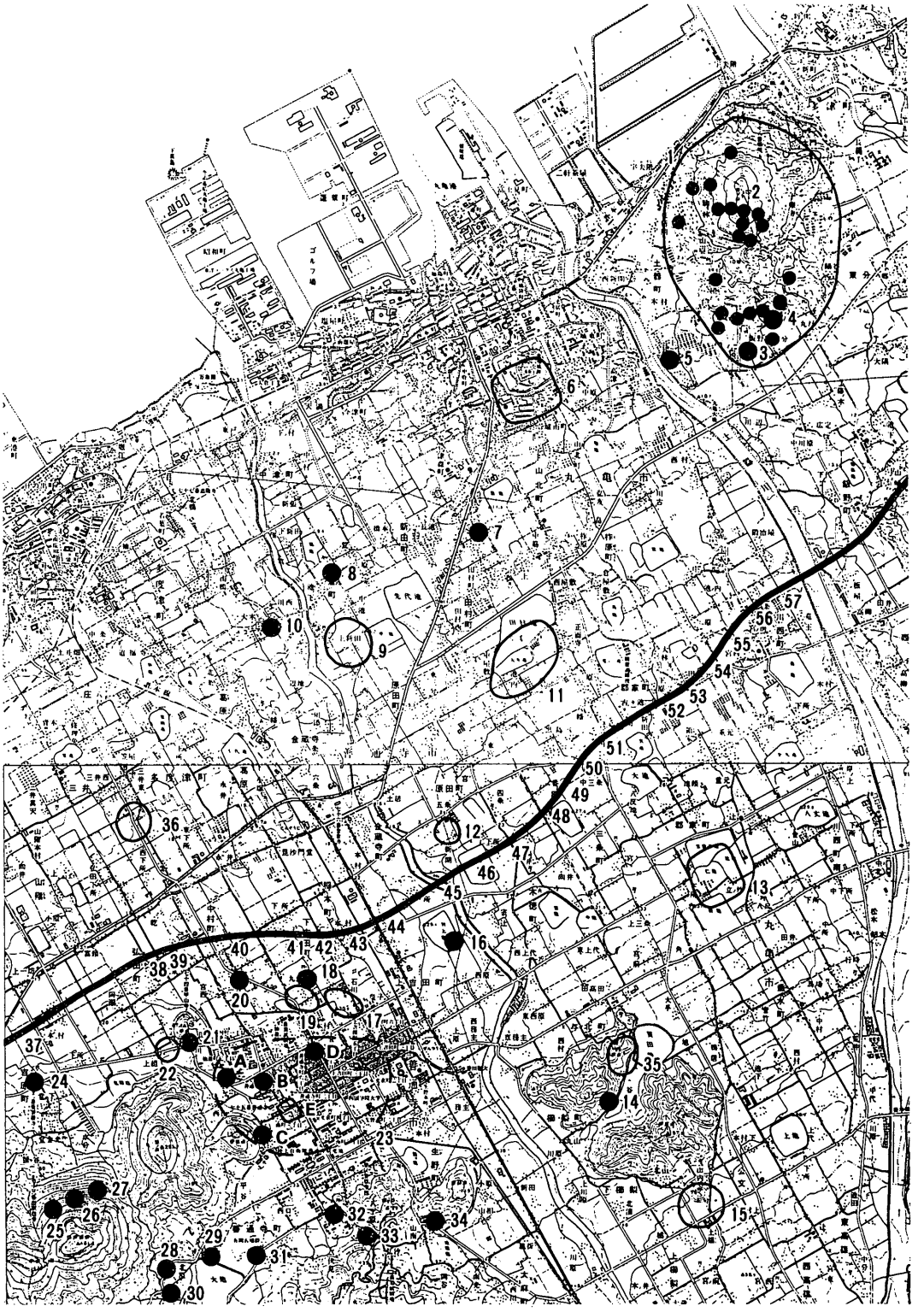
第２表　道下遺跡周辺の遺跡一覧表(1)

番号	遺　跡　名	所　在　地	時代	主な遺構	主な遺物	備　考
1	青ノ山古墳群	丸亀市土器町・宇多津町青ノ山	古墳	横穴式石室墳		23基　1976・1979・1982・1984年調査
2	青ノ山山頂遺跡	丸亀市土器町・宇多津町青ノ山	弥生			
3	吉岡神社古墳	丸亀市土器町	古墳	前方後円墳 全長50ｍ	筒形銅器・銅鏃	1990年範囲確認調査
4	青ノ山１号窯	丸亀市飯野町	古墳	全地下式無段登窯	須恵器	須恵器専業窯
5	青ノ山城跡	丸亀市土器町	室町～江戸			生駒家家臣 尾池玄蕃の居城
6	丸亀城	丸亀市一番丁	安土桃山	螺旋式平山城	軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・釘・漆喰・壁土・土師質土器	1990年整備に伴う調査
7	田村廃寺	丸亀市田村町	奈良・平安	塔心礎	山形文縁八葉複弁軒丸瓦・十二葉素弁軒丸瓦	
8	**道下遺跡**	丸亀市金倉町	弥生・中近世	溝状遺構・土坑	弥生土器・陶磁器	
9	中の池遺跡	丸亀市金倉町	弥生	大溝（環濠）	弥生前期土器・石器（石庖丁・石斧・石鏃）	1976・1981年調査
10	金倉城跡	丸亀市金倉町	室町・安土桃山	濠・土塁		金倉顕忠の居城
11	田村池遺跡	丸亀市田村町			弥生土器・須恵器・土師器	散布地
12	五条遺跡	善通寺市原田町	弥生		弥生前期土器・石庖丁・石鏃・紡錘車	1983年調査
13	宝憧寺	丸亀市郡家町	白鳳・奈良平安	塔心礎・礎石	四重弧文軒平瓦・八葉複弁蓮華文軒丸瓦・水煙	1979年調査
14	陣山遺跡	善通寺市与北町	弥生	（青銅器埋納地）	平形銅剣３口	
15	公文山古墳群	善通寺市与北町	古墳		翳形埴輪（双脚輪状文）	
16	京免遺跡	善通寺市与北町	弥生・鎌倉・近世	溝状遺構・土坑	弥生土器・陶磁器・土師質土器・石臼	1988年調査
17	石川遺跡	善通寺市稲木町	弥生		弥生土器	
18	下吉田八幡古墳	善通寺市下吉田町	古墳	前方後円墳？		
19	九頭神遺跡	善通寺市中村町・下吉田町	弥生・古墳・近世	竪穴住居・壺棺・箱式石棺・土坑	弥生土器・土師器・鉄鏃	1987年調査
20	仲村城跡	善通寺市中村町	室町	堀跡		
21	甲山北遺跡	善通寺市弘田町	弥生	箱式石棺(時期不明)	弥生前期土器・石鏃	
22	甲山城跡	善通寺市弘田町	室町	郭状平坦地	巴文軒丸瓦	
23	旧練兵場遺跡群	善通寺市善通寺町・仙遊町一円	弥生・古墳			
A	彼ノ宗遺跡	善通寺市仙遊町	弥生・古墳	竪穴住居・壺棺・土坑・掘立柱建物	弥生土器・須恵器・土師器・鏡片・銅鏃	1984年調査
B	仙遊遺跡	善通寺市仙遊町	弥生	箱式石棺（線刻あり）・壺棺	弥生後期土器	1985年調査
C	善通寺西遺跡	善通寺市善通寺町	弥生・古墳	溝状遺構	弥生後期土器・土師器・木器（櫂）	1977年調査
D	仲村廃寺（伝導寺）	善通寺市善通寺町	白鳳	礎石（下層に弥生・古墳時代の遺構）	八葉複弁軒丸瓦・忍冬唐草文軒平瓦・鴟尾・須恵器・土師器・（弥生土器・須恵器）	1983・1988年調査
E	善通寺	善通寺市善通寺町	白鳳	礎石	八葉複弁蓮華文軒平瓦・忍冬唐草文軒平瓦	
24	青龍古墳	善通寺市吉原町	古墳	竪穴式石槨・二重濠		前方後円墳か？
25	我拝師山Ｂ遺跡	善通寺市吉原町	弥生	（青銅器埋納地）	平形銅剣４口	
26	我拝師山Ｃ遺跡	善通寺市吉原町	弥生	（青銅器埋納地）	外縁付鈕式横帯流水門銅鐸１口	
27	我拝師山Ａ遺跡	善通寺市吉原町	弥生	（青銅器埋納地）	平形銅剣１口	
28	北原シンネバエ遺跡	善通寺市善通寺町	弥生	（青銅器埋納地）	扁平鈕式袈裟襷文銅鐸1口・銅鐸1口	現在　多和文庫所蔵
29	菊塚古墳	善通寺市善通寺町	古墳	前方後円墳　全長25ｍ 竪穴式石槨	須恵器・鉄製品・玉類	
30	北原古墳	善通寺市善通寺町	古墳	前方後円墳 横穴式石室		開墾により破壊
31	王墓山古墳	善通寺市善通寺町	古墳	前方後円墳　全長46ｍ 横穴式石室　石屋形	須恵器・土師器・金銅製冠帽・馬具・武具・金環・銀環	1982・1983年調査 周辺に弥生時代の箱式石棺墓群
32	鶴ガ峰３号墳	善通寺市善通寺町	古墳	前方後円墳 全長54ｍ		主体部は破壊
33	鶴ガ峰１号墳	善通寺市生野町	古墳	前方後円墳 全長26ｍ	（玉類が出土したという）	主体部は破壊

第３表　道下遺跡周辺の遺跡一覧表(2)

番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	主な遺構	主な遺物	備　考
34	磨臼山古墳（遠藤塚）	善通寺市生野町	古墳	前方後円墳　全長40ｍ 刳抜式舟形石棺　葺石	埴輪	石棺に造り付けの石枕
35	鉢伏山古墳群	善通寺市与北町	古墳	竪穴式石槨	小型銅鏡（重圏文）・鉄斧・ガラス玉・鉄剣	消滅
36	三井遺跡	多度津町三井	弥生		弥生土器	
37	上一坊遺跡	善通寺市吉原町	中近世	掘立柱建物・溝状遺構・土坑・井戸	近世陶磁器	1985年調査
38	乾遺跡	善通寺市中村町	弥生・近世	湧水地状遺構・自然河川・土坑	弥生前期土器	1985年調査
39	中村遺跡	善通寺市中村町	縄文・弥生・平安・中近世	掘立柱建物・土坑・溝状遺構・自然河川	銅印「貞」	1984年調査
40	永井遺跡	善通寺市中村町・下吉田町	縄文・弥生・中近世	掘立柱建物・土坑・溝状遺構・自然河川	縄文後期～晩期土器・石斧土偶・耳飾り・鳥形木製品	1985・1986年調査
41	稲木Ａ遺跡	善通寺市稲木町	弥生・古墳	溝状遺構	縄文晩期土器・弥生前期土器・磨製石庖丁	1983年調査
42	稲木Ｂ遺跡	善通寺市稲木町	弥生・飛鳥白鳳～平安	掘立柱建物・土坑・溝状遺構	弥生土器・須恵器・土師器・鉄製鋤先	1984・1985年調査
43	稲木Ｃ遺跡	善通寺市稲木町	弥生・古墳～平安	竪穴住居・掘立柱建物・埋甕・土壙墓・集石墓・壺棺墓	弥生土器・須恵器・土師器・鏡片	1984年調査
44	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町	弥生・奈良平安・中世	掘立柱建物・溝状遺構・自然河川	須恵器・土師器・瓦器・木製品（斎串・人形・馬形・舟形・曲物・わらじ）	1983年調査
45	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	弥生・古墳・中近世	弥生時代墓・竪穴住居・溝状遺構・自然河川	弥生土器・須恵器・土師器・管玉・ガラス玉・石庖丁・石鏃・木製品（未製品）	1989年調査
46	龍川四条Ａ遺跡	善通寺市原田町・木徳町	縄文・弥生平安・鎌倉	溝状遺構・土坑・自然河川	縄文晩期土器・弥生後期土器・須恵器・土師器・瓦質土器	1989年・1990年調査
47	龍川四条Ｂ遺跡	善通寺市木徳町	鎌倉	掘立柱建物・火葬墓・土坑・溝状遺構	縄文土器・灰釉陶器	1988・89・91年調査
48	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	弥生・奈良・平安	竪穴住居・土坑・井戸・溝状遺構	弥生土器・須恵器・土師器	1988・1989年調査
49	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	旧石器・弥生・近世	旧石器ユニット・溝状遺構・屋敷跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	1988年調査
50	郡家原遺跡	丸亀市郡家町	弥生・奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物・溝状遺構	弥生土器・緑釉陶器・斎串	1988・1989年調査
51	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	古墳・平安・近世	掘立柱建物・土坑・井戸・溝状遺構	有舌尖頭器・緑釉・灰釉陶器・土師器・須恵器	1988・1989年調査
52	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	平安・中近世	掘立柱建物・溝状遺構・自然河川	須恵器・土師器・陶磁器	1988年調査
53	郡家田代遺跡	丸亀市川西町	旧石器・弥生・平安・近世	掘立柱建物・火葬墓・溝状遺構	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・土師器	1988年調査
54	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	中近世	掘立柱建物・溝状遺構	北宋銭	1988年調査
55	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町	弥生・平安・中近世	溝状遺構・自然河川	石器・弥生土器・須恵器	1988年調査
56	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	中近世	掘立柱建物・溝状遺構	土師器	1988年調査
57	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	古代・中近世	掘立柱建物・井戸・溝状遺構・自然河川	弥生土器・須恵器・土師器	1989年調査

※番号は分布図の番号と対応する。



第２図　周辺の遺跡分布図

ていない。この時期の遺跡が未発見であることも充分に考えられるが，現状では，基本的に中期の集落は山裾・山頂に営まれ，扇状地・平野には営まれなかったと理解したい。

弥生時代後期

弥生時代後期に入ると，再び扇状地・平野に遺跡が出現する。扇状地上の遺跡として，旧練兵場遺跡群[註2]（23）〔彼ノ宗遺跡・仲村廃寺下層遺跡（23－D）・仙遊遺跡（23－B）〕・九頭神遺跡・稲木遺跡B地区（42）・同C地区（43）・三条番ノ原遺跡（48）・郡家原遺跡（50）等がある。なかでも旧練兵場遺跡群は，全容はわからないものの，遺物包蔵量は他の同時期の遺跡と比べて突出しており，拠点的な遺跡であるといえる。

これに対し，沖積平野部の遺跡として郡家田代遺跡（53）・川西北七条Ⅰ遺跡（55）・川西北七条Ⅱ遺跡（56）などがある。

これらの遺跡は，ほとんどが後期後半頃から出現しており，前期・中期の遺跡と比べて遺跡数も多くなり，分布範囲も拡がる。この現象の要因としては，灌漑技術の向上と鉄器（特に鉄製農耕具）の普及の二つが考えられる。灌漑技術の向上は，湧水に頼っていた水利を河川の豊富な流水へと転換させ，鉄器の普及は木器では困難であった堅緻な土壌をも掘り抜くことを可能にした。高度な灌漑技術を，鉄製農耕具によって具体化させるという両者の結合は，耕作地を次々と拡大させたのである。

道下遺跡は，河川の自然堤防の微高地上に立地しているが，巨視的にみれば扇端部と沖積平野が接する部分に立地しているといえる。削平によって建物跡が検出できていないため，集落遺跡ではない可能性もあるが，弥生時代前期頃からこの地で，人々が生活を始めたことがわかる。そして，弥生時代後期になると，先に述べた灌漑技術の向上と鉄器の普及によって，丸亀平野の開拓は次々とすすめられ耕作地が拡大していったものと考えられる。

註1．　九頭神遺跡第5調査区では，弥生時代中期前葉の土器のみを含む土坑や柱穴が多数検出されているが住居跡は確認されていない。ただし，後世の削平によって消滅している可能性は大きい。

註2．　善通寺市街地の北一帯に存在する弥生時代の中枢的な集落遺跡は，この地が練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼称されてきた。最近の発掘調査から，この旧練兵場遺跡はいくつかの河道によって分けられた微高地上に立地する遺跡の集合体であることが解明されている。したがって本報告書では彼ノ宗遺跡・仲村廃寺下層遺跡などの総称の意味で旧練兵場遺跡群の呼称を使用している。

第3図 調 査 区 設 定 図

第3章　調査の成果

第1節　土層序（第4図）

調査区の現地表面は標高7.1mから6.5m付近に位置し，調査区西端（A－1）と東端（C）では300mの距離を隔てている。地表面から地山までの基本的な土層は6層に大別することができる。

第Ⅰ層　耕作土

第Ⅱ層　床土

第Ⅲ層　古墳時代以降の包含層

第Ⅳ層　弥生時代の包含層

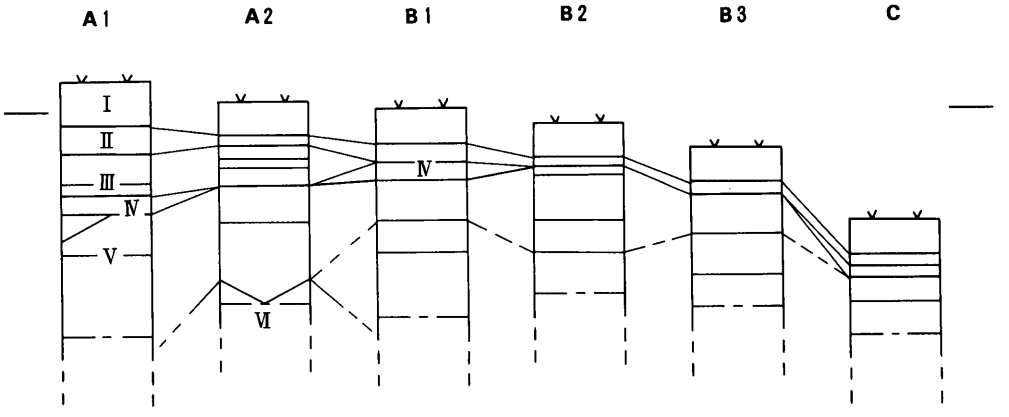
第Ⅴ層　地山

第Ⅵ層　砂礫層

第Ⅰ層（暗灰色粘質土）・第Ⅱ層（黄褐色粘質土）は，現在の水田耕作に伴う土層である。第Ⅱ層はいわゆる床土（田床）であるが，少量ながら中世以降の遺物が出土している。調査区によって淡黄灰色や赤褐色を呈する部分も存在する。

第Ⅲ層の遺物包含層からは，古墳時代の須恵器や中近世の土器が出土している。第Ⅲ層は上から淡灰黄色粘質土と黄白色細砂の二つの土層から成るが，上層の淡灰黄色粘質土はさらに二分できる部分がある。第Ⅲ層は調査区西端と（A－1・A－2）と東端（C）に認められる。

第Ⅳ層（灰褐色粘質土）の遺物包含層は，調査区西端（A－1）と中央（B－1）で認められる。この層からは弥生時代の土器・石器が出土している。とくに調査区西端（A－1）ではサヌ



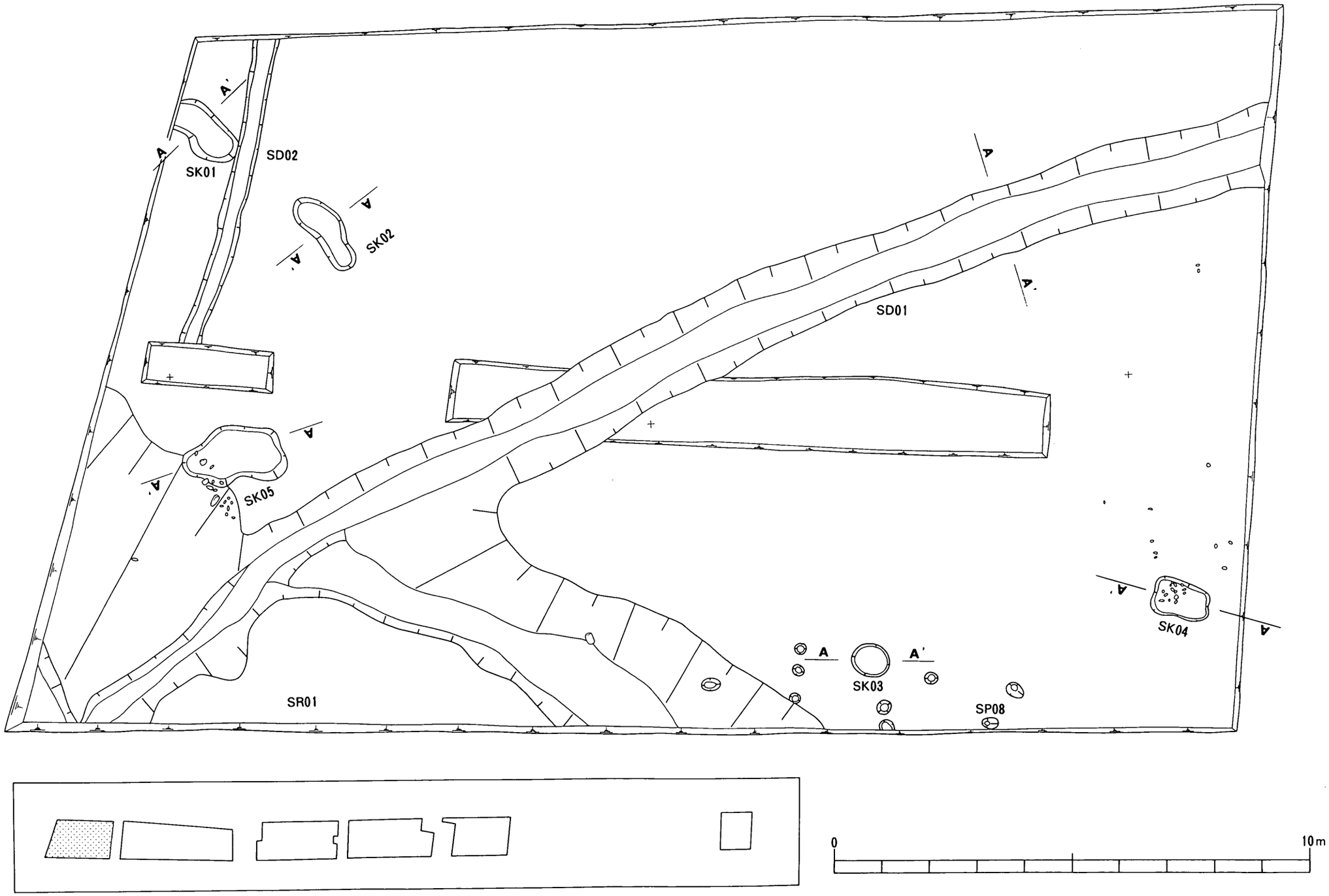
第4図　土層序模式図

カイト片が多量に出土している。

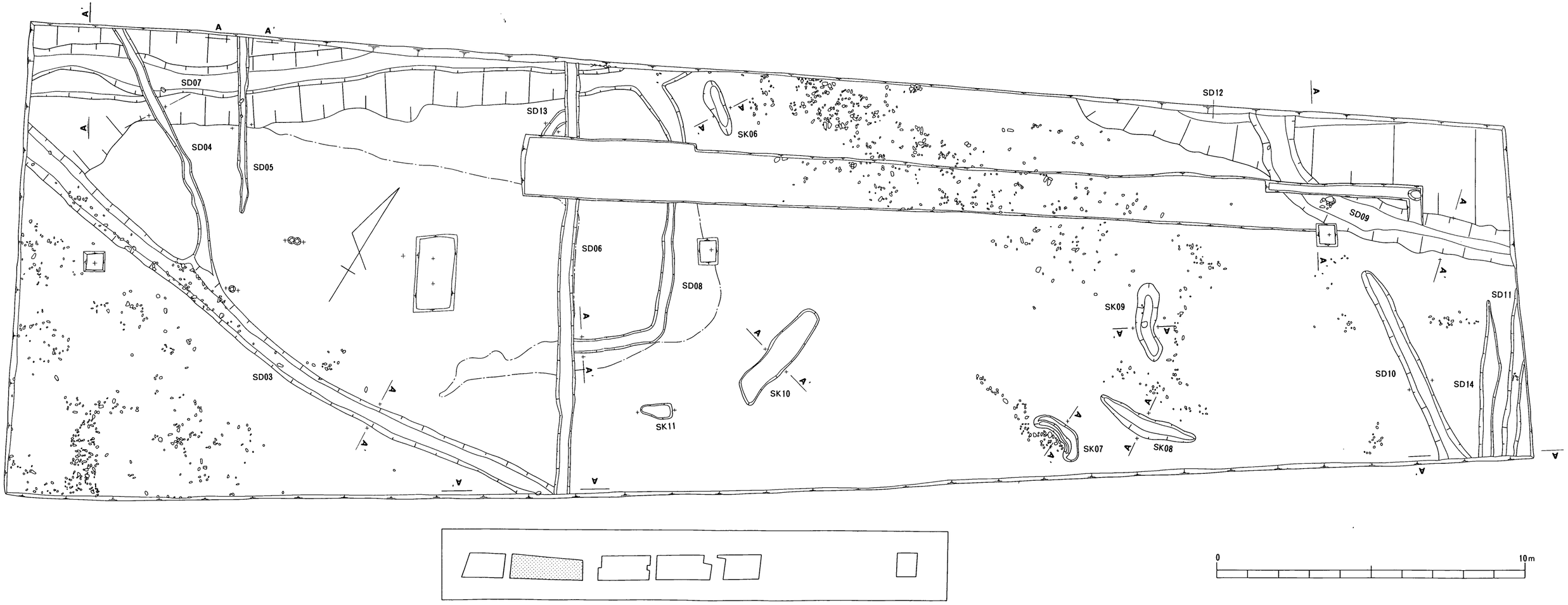
第Ⅴ層は遺物を全く包含していない地山である。地山を形成している土層は各調査区によって微妙に変化しており，さらに漸移的に変化しているために層境が不明瞭となっている。調査区中央（B－1）から東にかけては堅緻な地盤となっているが，調査区西半に向かうにつれて，わずかづつではあるが軟弱になっていく。

第Ⅵ層は灰色砂礫層である。この層は調査区西半（A－1・A－2）で認められるが，調査区東半（B－1～C）では確認していない。この砂礫層は，調査区西半（A－1・A－2）において，部分的に第Ⅴ層上面まで上がってきている。

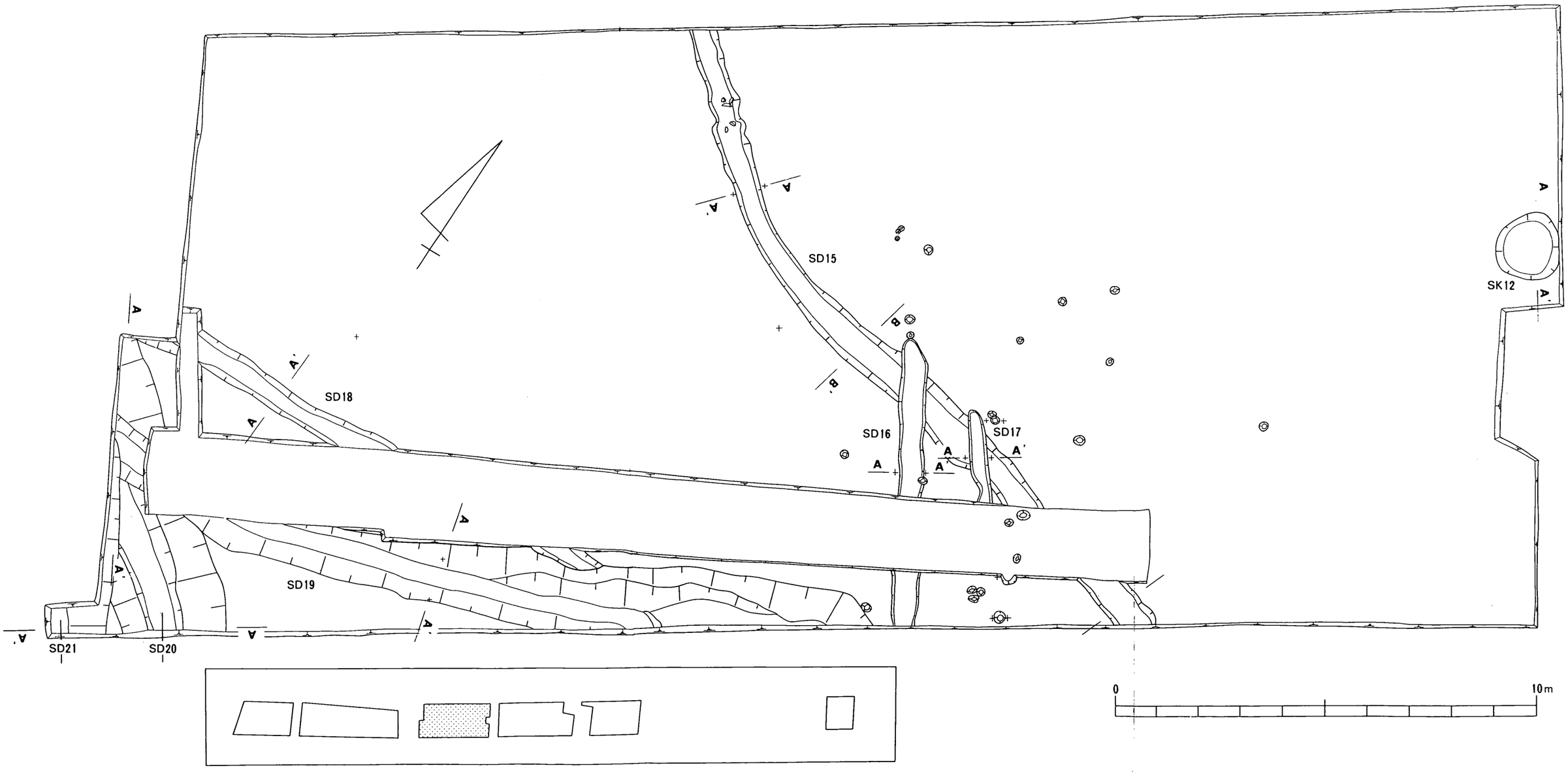
遺構は第Ⅳ層上面と第Ⅴ層上面で検出している。基本的に第Ⅳ層上面で検出した遺構は中世以降，第Ⅴ層上面で検出した遺構は弥生時代のものである。第Ⅴ層は調査区全体にわたって存在しているが，第Ⅳ層は調査区西端（A－1）と中央（B－1）でしか認められない。他の調査区では第Ⅴ層上面で弥生時代・中世以降の遺構を同時に検出している。



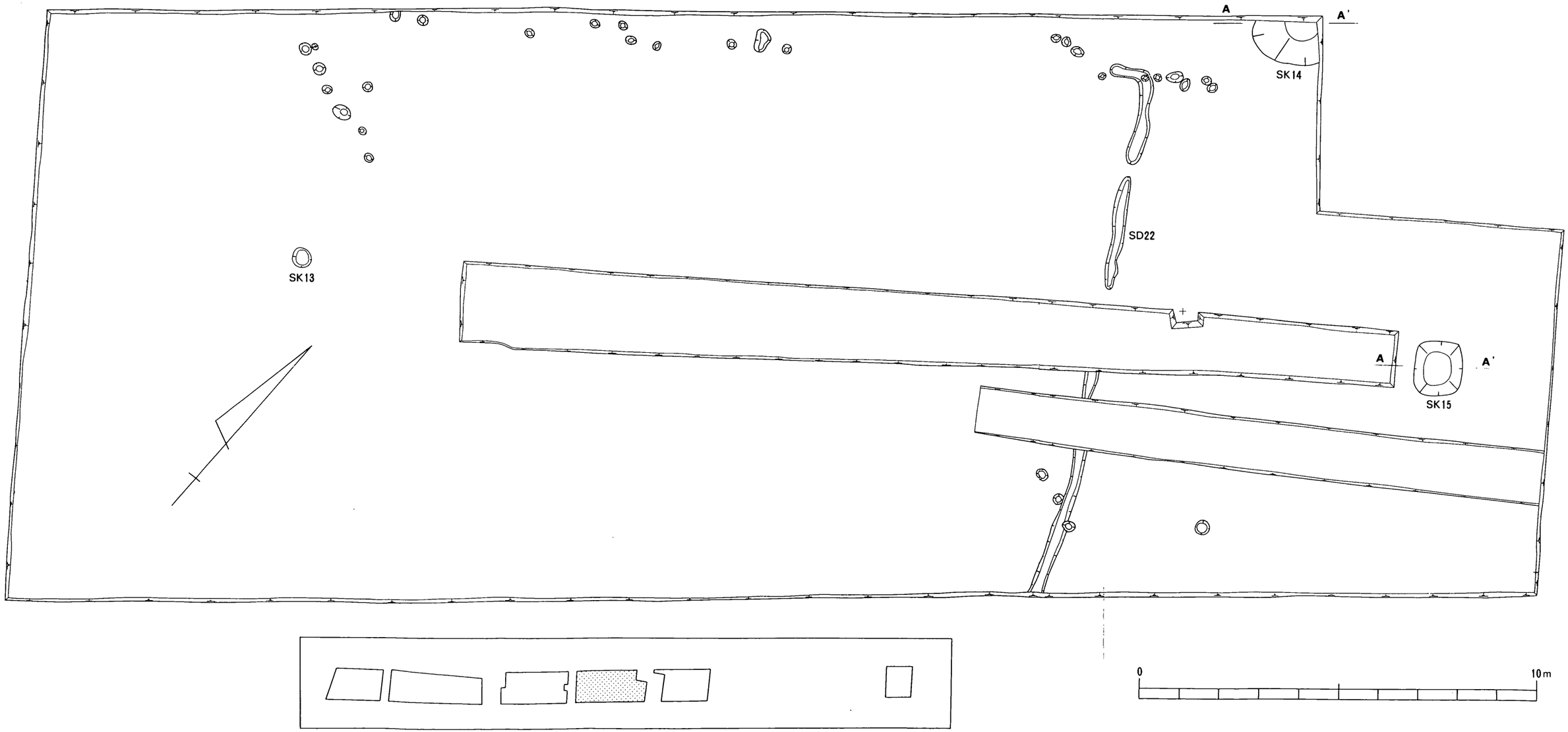
第５図　道下遺跡遺構平面図①（Ａ１）



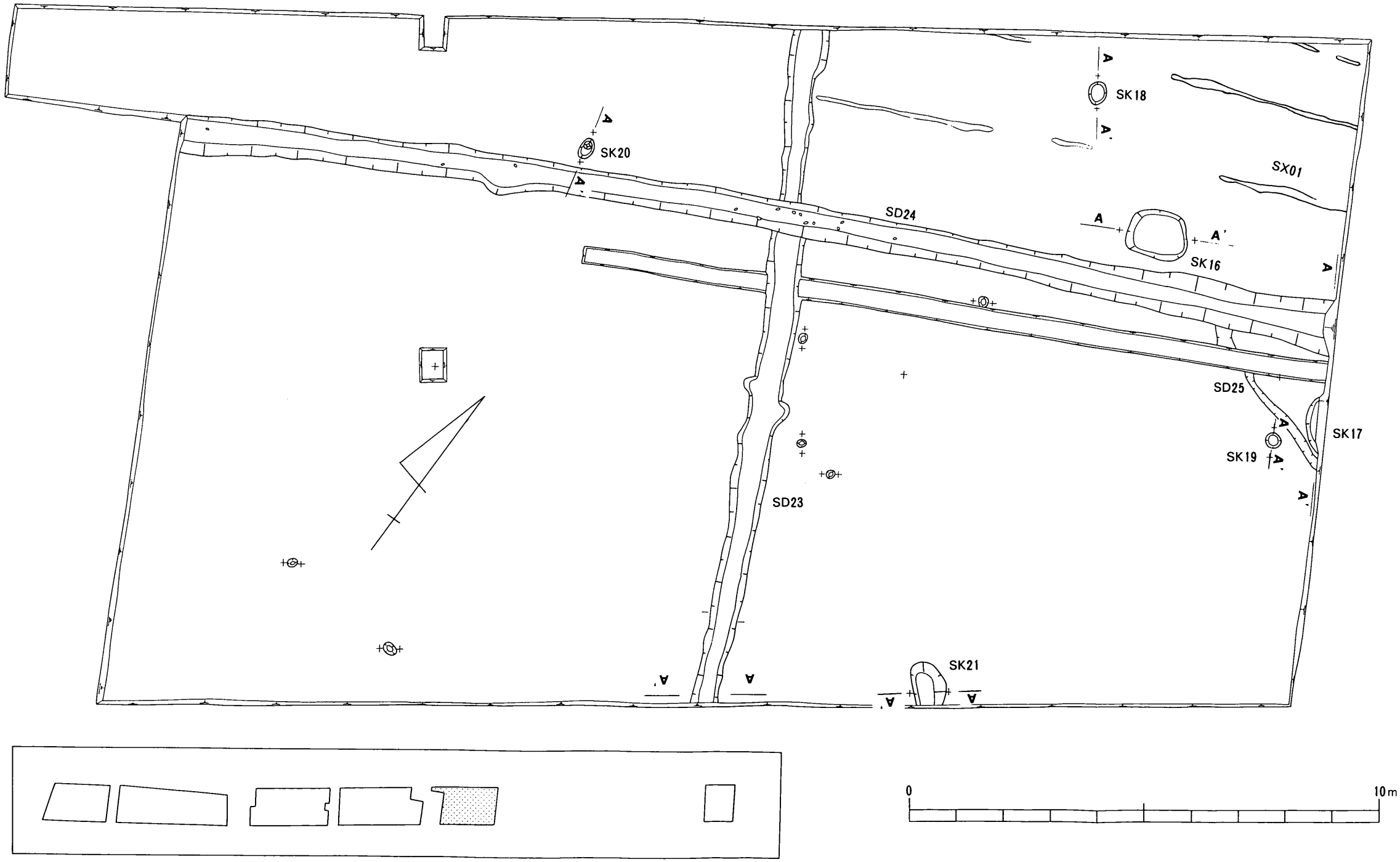
第６図　道下遺跡遺構平面図②（Ａ２）



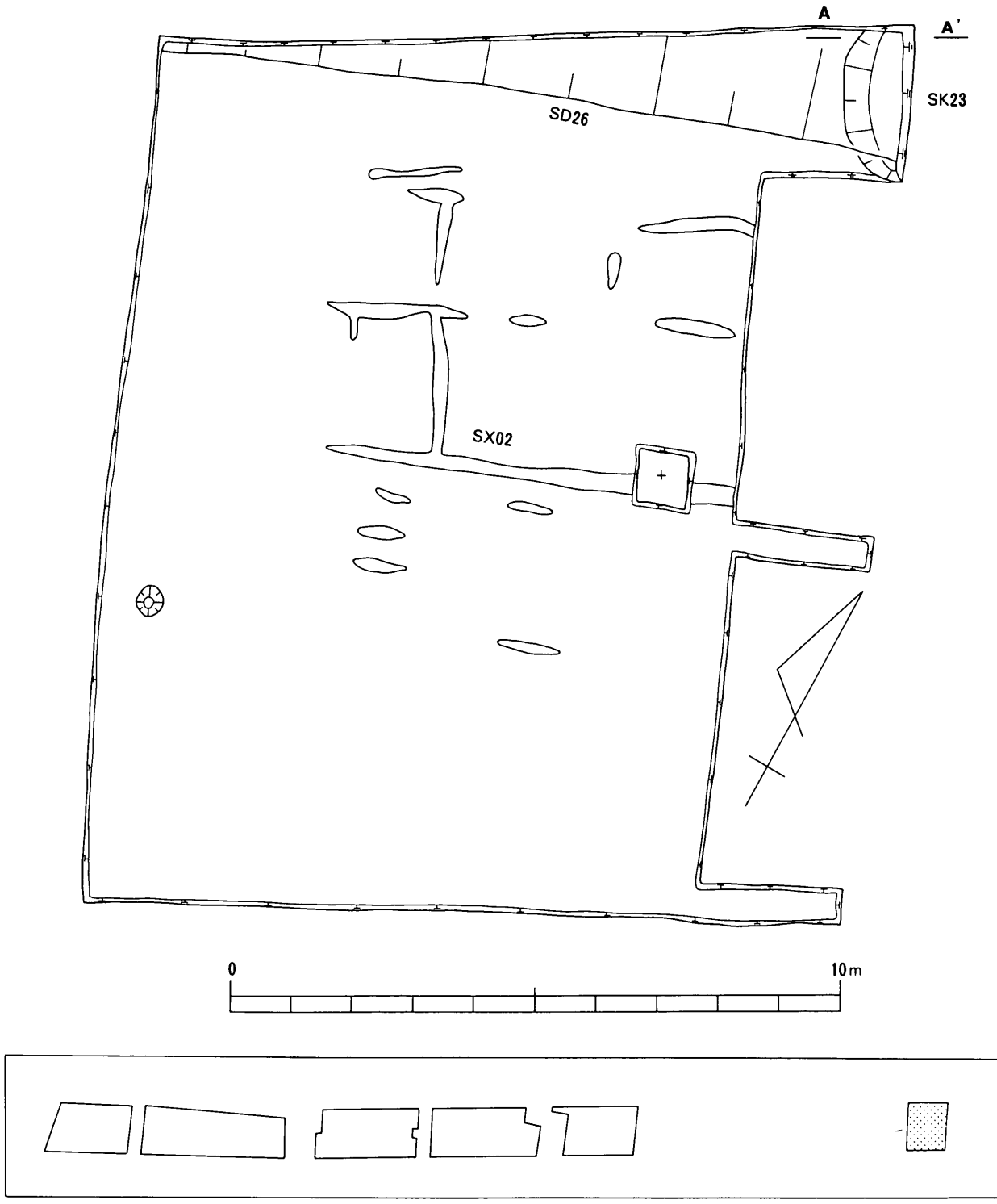
第７図　道下遺跡遺構平面図③（Ｂ１）



第８図　道下遺跡遺構平面図④（Ｂ２）



第９図　道下遺跡遺構平面図⑤（Ｂ３）



第10図　道下遺跡遺構平面図⑥（C）

第2節　遺構・遺物

1　遺構・遺物の概要　（第5～10図）

道下遺跡で検出した遺構は，溝状遺構26条を中心として土坑21基，柱穴72個，旧河道1条，素掘り溝数条がある。このうち遺物を伴っていた遺構は，溝状遺構20条，土坑4基，柱穴4個，素掘り溝1条を数える。いずれも水田耕作に伴う地下げによって上面を削平されており，遺存状況はよくない。調査地区ごとにみると，A－1からB－1にかけては，溝状遺構が集中して分布する。B－1からB－2にかけては柱穴が集中するが，明確に建物の跡を示すような並びはみられない。B－3とCでは素掘り溝が遺存していた。

道下遺跡から出土した遺物は，縄文時代晩期から近・現代に至るまでのものがある。出土量はきわめて少ないうえに，遺存状況も悪い。

検出した遺構は，出土している遺物から弥生時代，中世・近世の2時期に大別することができる。

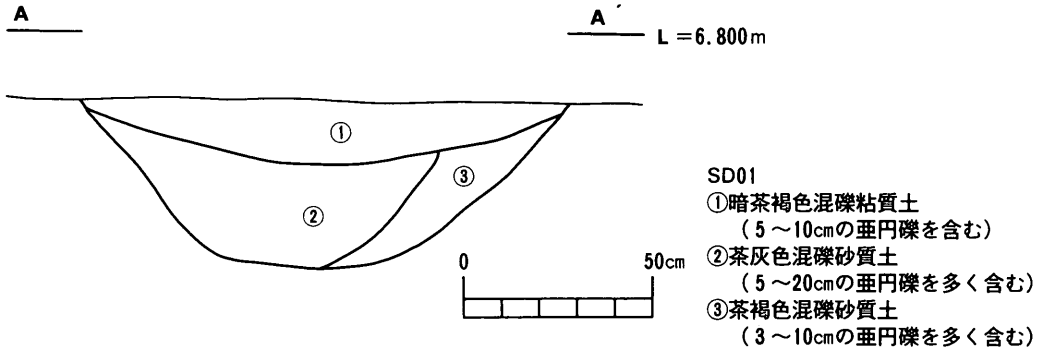
以下，各時期の遺構について概説する。

2　弥生時代の遺構・遺物

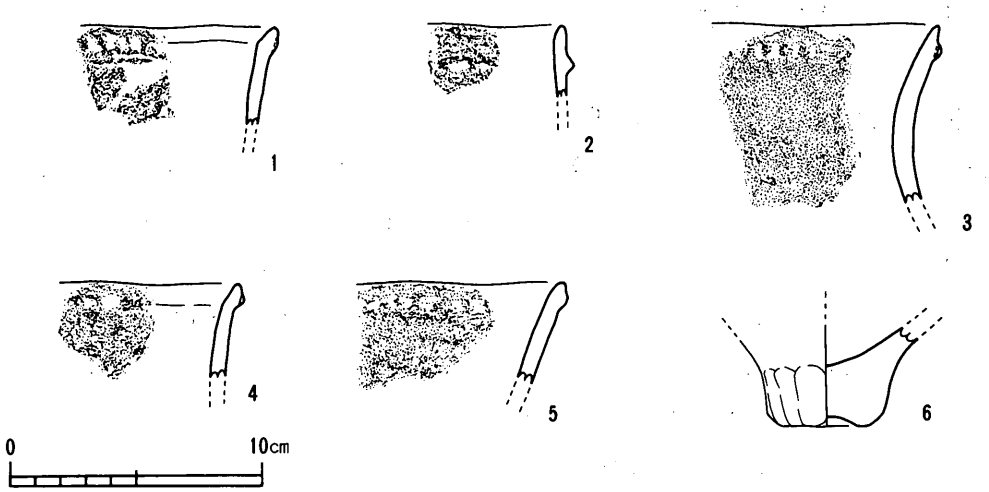
(1)　溝状遺構

SD01（第11図）

A－1で検出した。幅1.3m，深さ約0.4mをはかる。方向は北東－南西方向を示す。断面は逆台形を呈する。同じ調査区の南西隅で検出した旧河道SR01とつながる。埋土は3層からなるが，大きく上層と下層の2層に分けることができる。旧河道SR01とつながる部分付近の下層からは縄文時代晩期・弥生時代前期の土器片が，上層からは弥生時代後期の土器片が出土している。また，サヌカイト片とともに石器も出土している。



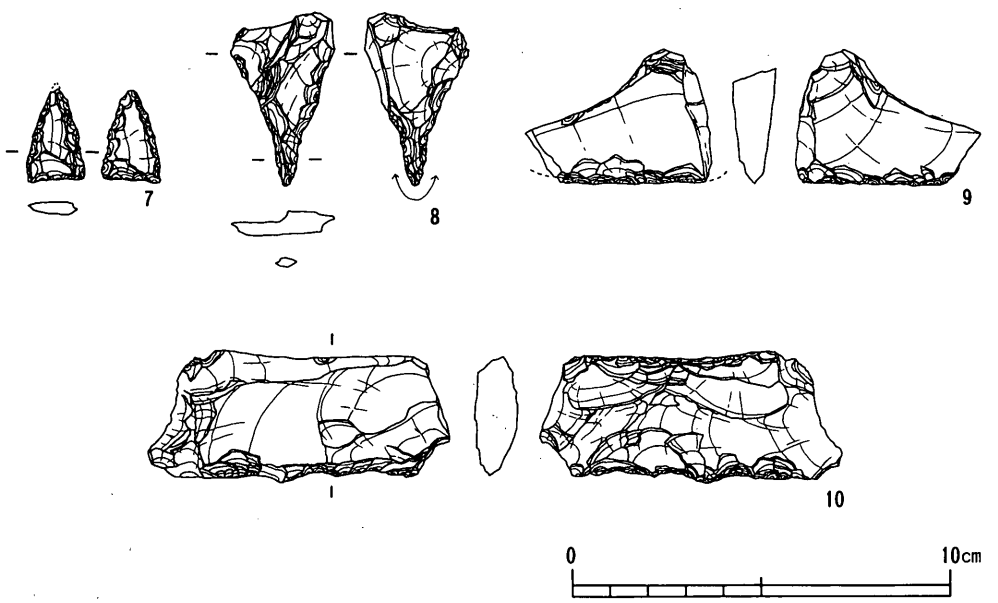
第11図　SD01断面図



第12図　SD01・SR01出土遺物実測図①

土器（第12図　1～6）

1～5はいずれも刻目突帯文を有する縄文時代晩期の深鉢である。突帯を口縁端部に貼り付けるもの（1・4・5）と，口縁端部から少し下がった位置に貼りつけるもの（2・3）がある。3は胴部に屈曲をもつタイプの深鉢である。6は弥生土器の甕の底部である。胎土中に粒の粗い石英・長石を多量に含んでおり前期土器の胎土と酷似する。他に壷の底部の破片も出土しているが，胎土は6と同じである。

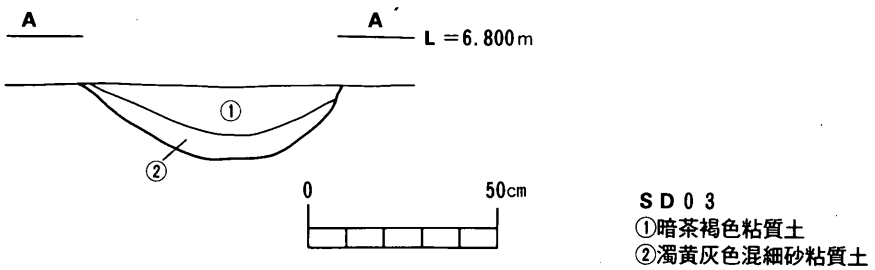


第13図　SD01・SR01出土遺物実測図②（石製品）

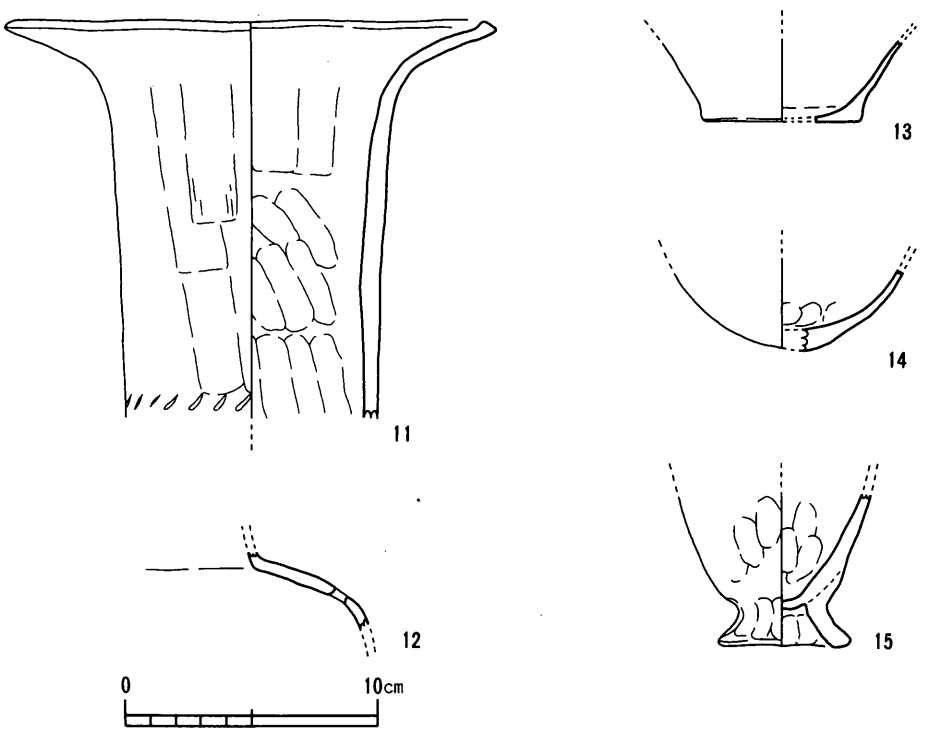
石器（第13図　7～10）

7・8は縁辺部に細かい調整を施したサヌカイト製のスクレイパーである。9は頭部から錐部にかけて徐々に尖る形態の石錐である。錐部は断面菱形を呈する。10は平基式の石鏃である。先端部をわずかに欠損している。

SD03（第14・46図）



第14図　SD03断面図



第15図　SD03出土遺物実測図

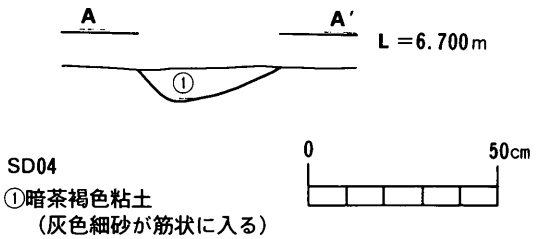
A－２で検出した。幅68cm，深さ約20cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。埋土は２層で堅くしまっている。途中でＳＤ０４と分岐するがＳＤ０１本体は分岐後も規模に変化はない。弥生土器・サヌカイト片が出土している。

土器（第15図　11～15）

１は長頸壷の口縁部で，直線的に立ち上がる頸部から短く外方にひらく口縁部をもつ。頸部と胴部の境付近に篦状工具による刺突文がめぐる。12は壷の肩部と思われる破片である。穿孔を受ける。13・14は底部である。15は台付鉢である。体部及び脚台部の内外面に指頭圧痕が残る。

SD04（第16図）

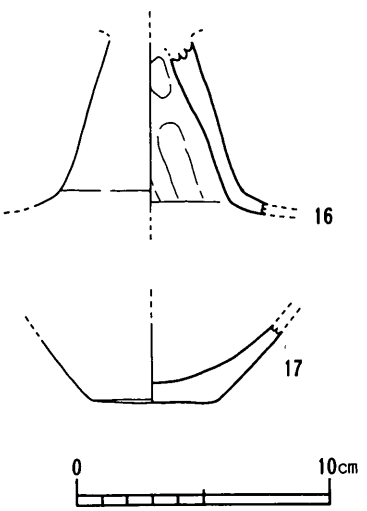
A－２で検出した。幅38cm，深さ約12cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。SD03から分岐し，SD07を切って流れる。ほとんど痕跡をとどめるにすぎない。弥生土器が出土している。



第16図　SD04断面図

土器（第17図　16・17）

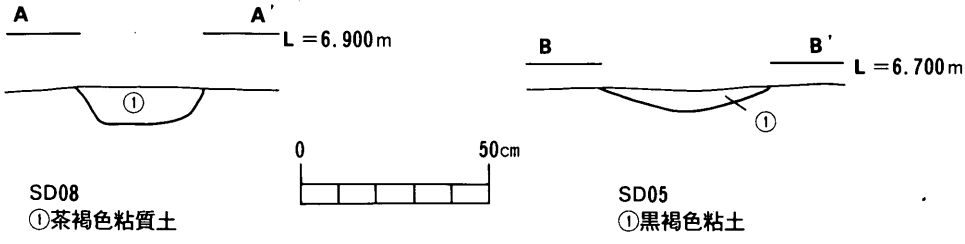
16は高杯の脚部である。脚柱部は中空となっている。17は甕か鉢の底部である。



第17図　SD04出土遺物実測図

SD05（第18図）

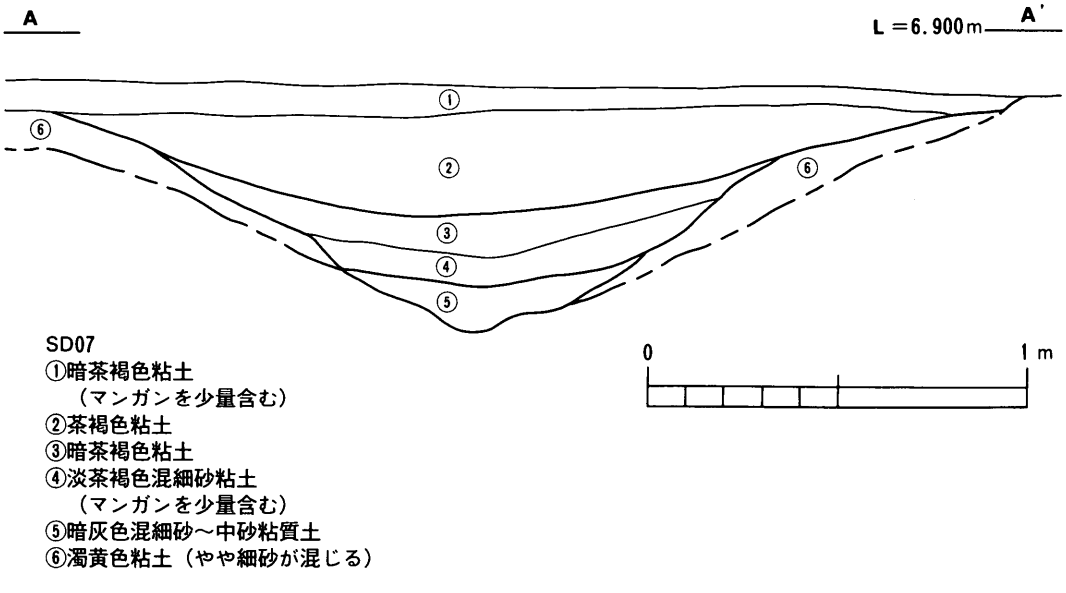
A－2で検出した。幅32cm，深さ約10cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。調査区北端でSD07を切って流れる。埋土は黒褐色粘土の単一埋土である。



第18図　SD05・08断面図

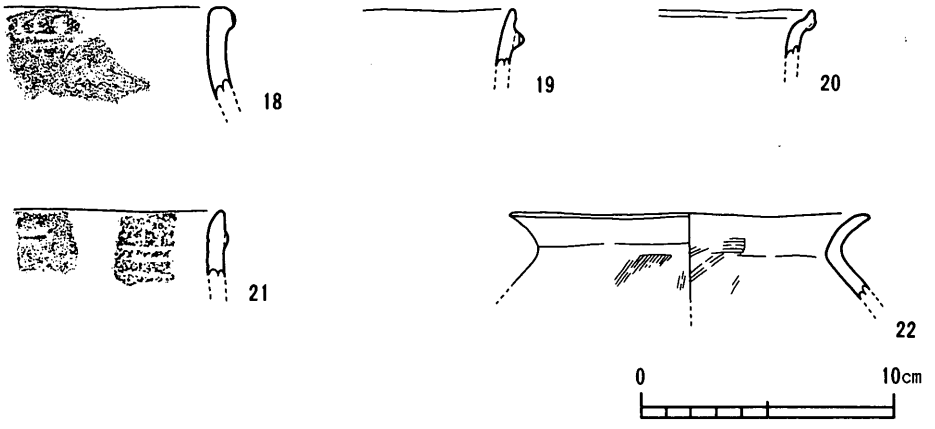
SD07（第19図）

A－2の北西部で検出した。幅2.4m，深さ約0.6mをはかる。方向は北東－南西方向を示す。埋土は4層に分かれるが，遺物は最上層の茶褐色粘土と最下層の暗灰色混細砂粘質土から出土している。SD07の東側は調査区外へ延びているが蛇行してSD12とつながり，同一の溝状遺構であ



第19図　SD07断面図

る可能性が大きい。最下層からは縄文土器が，最上層からは弥生土器が出土している。また，サヌカイト片とともに石器も出土している。

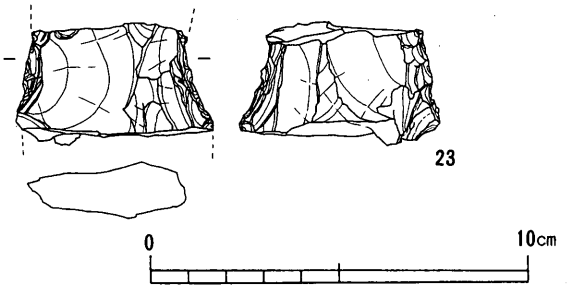


第20図　SD07出土遺物実測図①

土器（第20図　18～22）

18～21は刻目突帯を施した突帯をもつ深鉢の口縁部の破片である。口縁端部に接して突帯を貼りつけるもの（18・20）と，口縁端部から少し下がった位置に突帯を貼りつけるもの（19・21）がある。突帯上に施された刻目はいずれも浅いものである。18は肩部が屈曲するタイプの深鉢である。外面の突帯下は板状工具でナデている。21は刻目が磨滅している深鉢であるが，内面には3条の浅い沈線が残る。20は屈曲した口縁部に突帯を貼りつけたものだが，弥生時代前期まで下る可能性がある。22は弥生時代後期の甕である。表面の剥離が著しいが，内外面ともに左下がりのハケ目が残る。

石器（第21図　23）



第21図　SD07出土遺物実測図②（石製品）

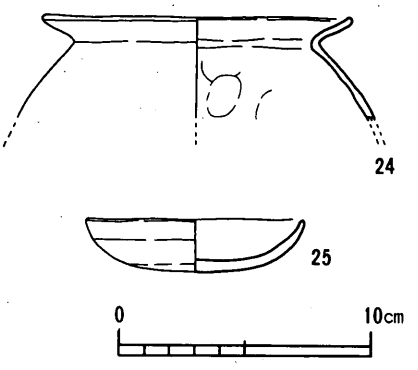
先端部と基部を欠損しているが，サヌカイト製の打製石斧である。縁辺部には粗い調整が施されている。

SD08（第18図）

A－2で検出した。幅46cm，深さ約6cmをはかる。ほぼ直角に屈曲する溝状遺構で，南西－北東方向から南東－北西方向に向きを変える。北端はSD07につながる。西端はSD06に切られており，そこから西側では検出されなかった。埋土は茶褐色粘質土の単一埋土である。弥生土器とサヌカイト片が出土している。

土器（第22図　24・25）

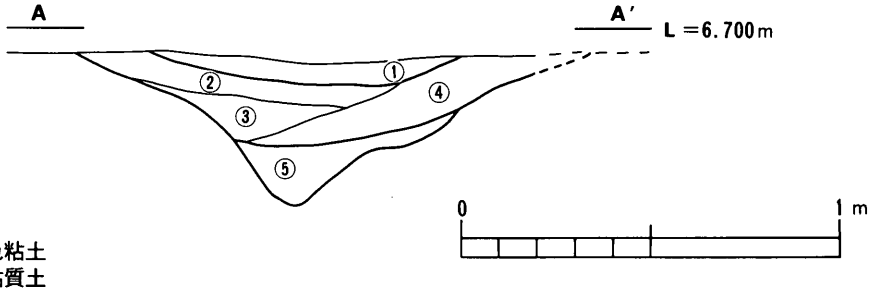
24は弥生時代後期の甕である。表面の剥離が著しいが内面には指頭圧痕が残る。25は小皿の様な形態をしているもので，ここでは鉢としてとらえる。口径8.5cm，器高2.1cmをはかる。



第22図　SD08出土遺物実測図

SD09（第23・29図）

A－2東端で検出した。幅1.2m，深さ約0.3mをはかる。ほぼ東西方向から南東－北西方向に弧を描いて流れる。北端はSD12を切りながら調査区外に延びていくが，東端は市道を隔ててB－1のSD19とつながる同一の溝状遺構である。埋土は大きく3層に分かれるが，出土遺物に大きな時期差は認められない。弥生時代後期の土器とサヌカイト片が出土している。

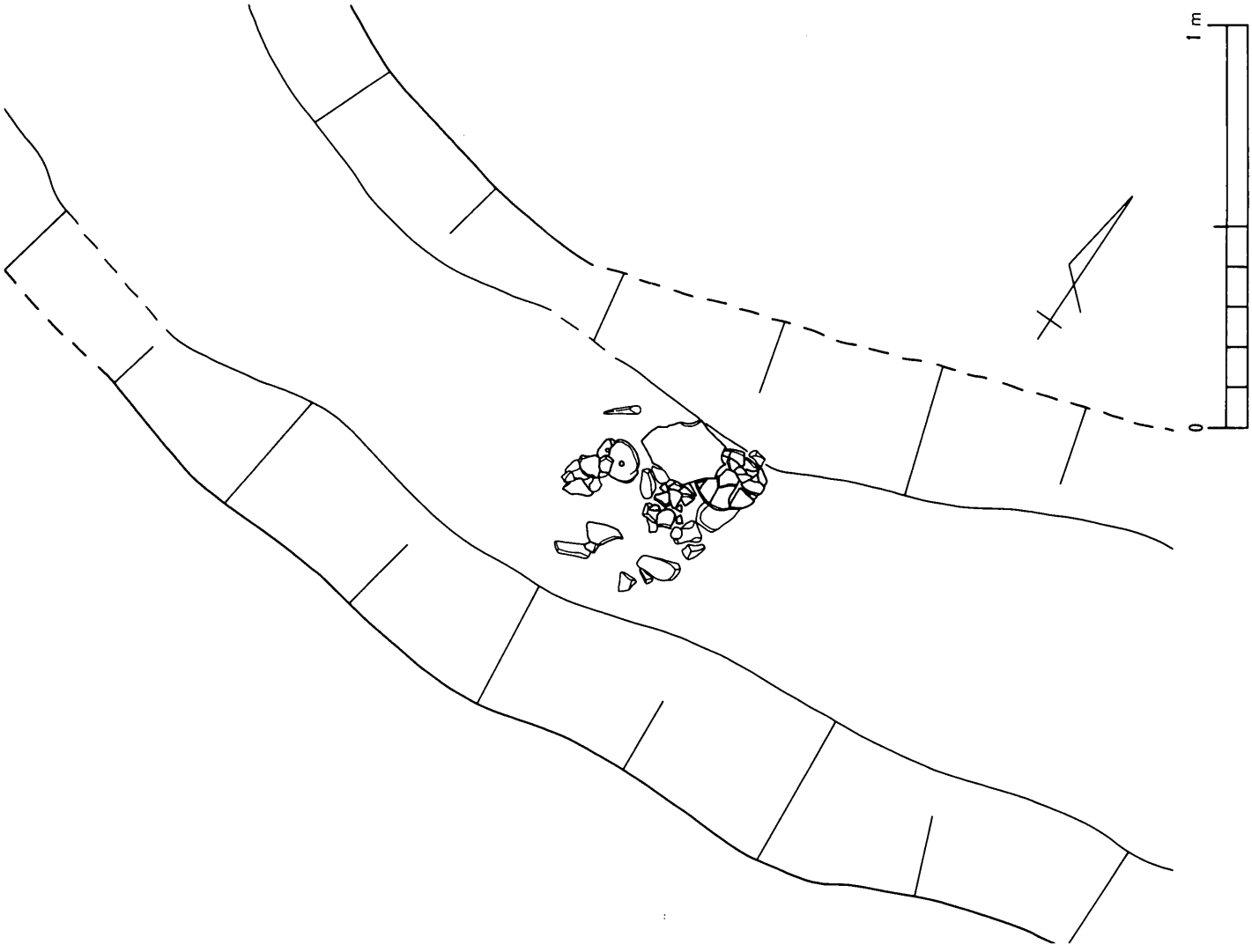


SD09
①暗茶褐色粘土
②灰褐色粘質土
③灰褐色混細砂粘質土
④淡灰褐色粘質土
⑤淡灰褐色混中～細砂粘質土

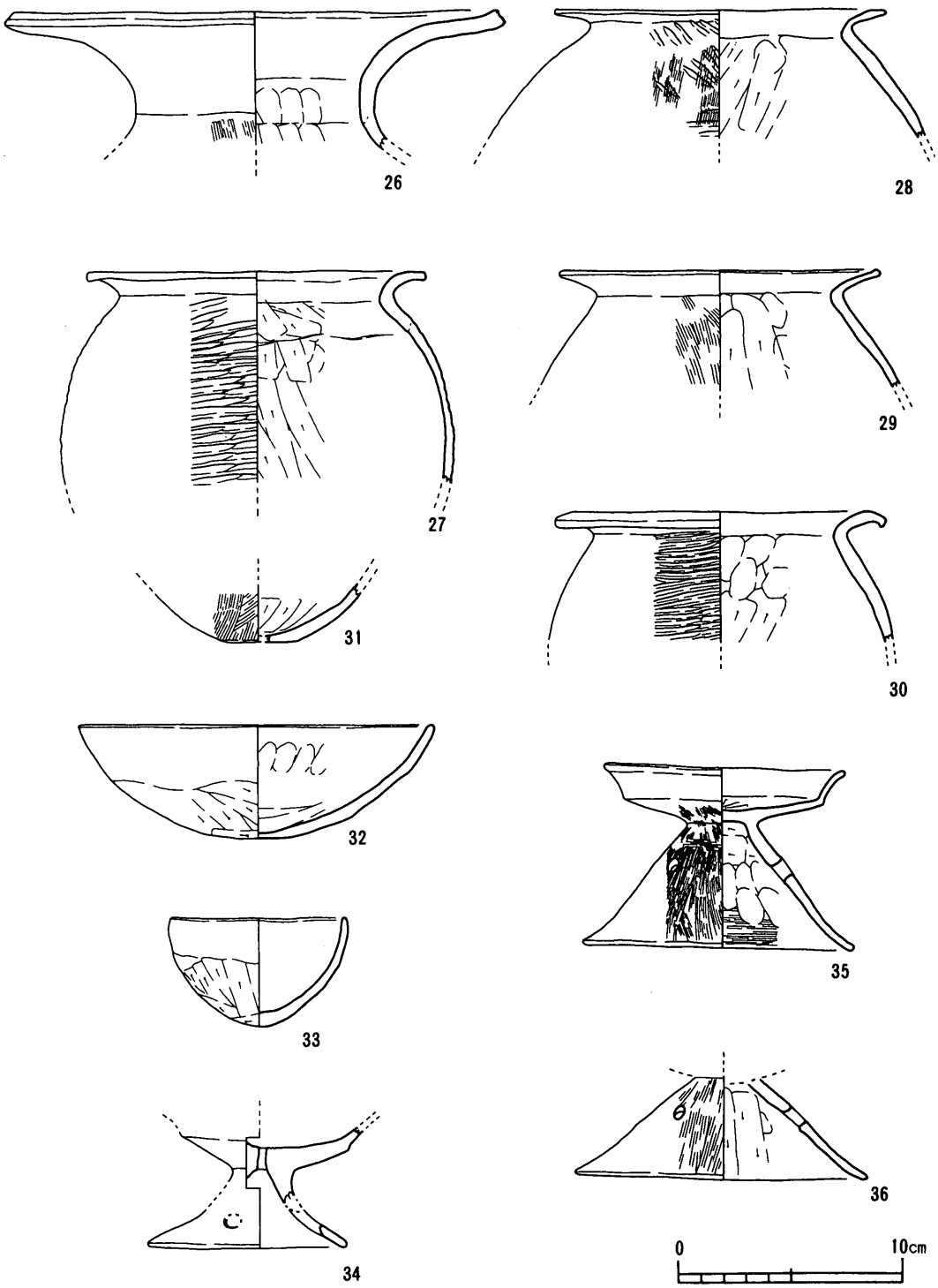
第23図　SD09断面図

土器（第25図　26～36）

26は広口壺の口縁部である。頸部から大きく外湾してひらく口縁部をもつ。口縁端部はナデによって少し凹んだ平坦面をなす。頸部内面に粘土紐の接合痕と指頭圧痕を残す。27から31は甕である。27は内面の篦削りが頸部まで及んでいる。外面は叩き目が残る。28は外面を叩いた後，刷毛で調整をしている。内面の篦削りは頸部にまで及ぶ。30は外面に叩き目，内面に篦削りが残るが，内面の篦削りは胴部上半までで頸部には及んでいない。27・28・30の３点は口縁部叩き出し手法を用いている。31は外面に刷毛目を，内面に篦削りを残す甕の底部であるが，丸みをおびた平底をしている。32・33は鉢である。32は中型，33は小型の鉢であるがいずれも外面下半を篦削りしている。34から35は小型器台である。34は精製した粘土を使用しており鮮やかな橙褐色を呈する。この胎土を使用している土器は34だけであり，他には一点も確認していない。34は屈曲して外反する杯部の底に直径３㎜の穿孔を施している。脚部の穿孔は２つが残るが，本来は３ヶ所に穿孔が施されていたらしい。35も屈曲して外反する杯部をもつ小型器台である。杯部の内面底には板状工具によるナデが施されている。脚部には３ヶ所に穿孔がある。36は小型器台の脚部である。穿孔は３ヶ所に施され，外面は刷毛目，内面には篦削りが残る。



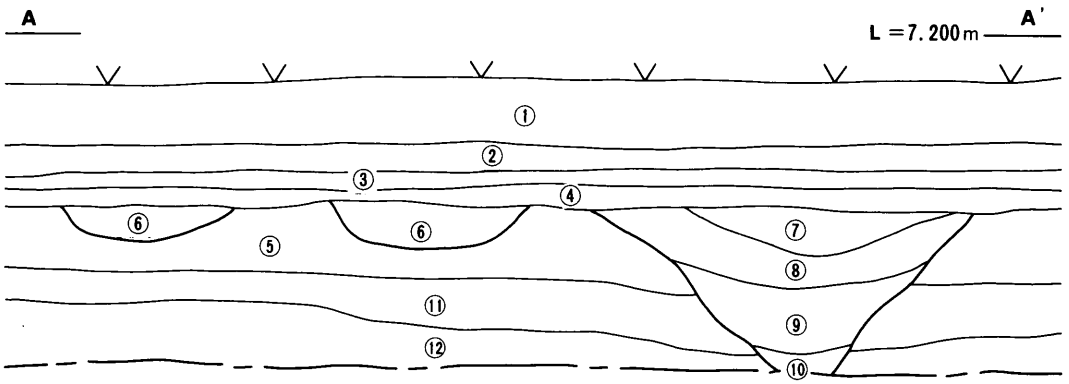
第24図　SD09遺物出土状況平面図



第25図　SD09出土遺物実測図

SD10（第26図）

A－2で検出した。幅60cm，深さ約43cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。弥生土器細片が出土している。



SD10・11・14
①暗灰色粘質土（耕作土）
②赤褐色粘質土（床土）
③黄褐色粘質土
④黄灰色混細砂粘質土
⑤茶褐色粘質土
（マンガンを含む）
⑥灰黄色粘質土
⑦暗茶褐色粘土
⑧暗灰褐色粘質土
⑨暗灰褐色混細砂粘質土
⑩淡灰色細砂
⑪濁黄色細砂（シルト質）
⑫灰色砂礫
（3～10cm大の円礫・亜角礫を多く含む）

0　1m

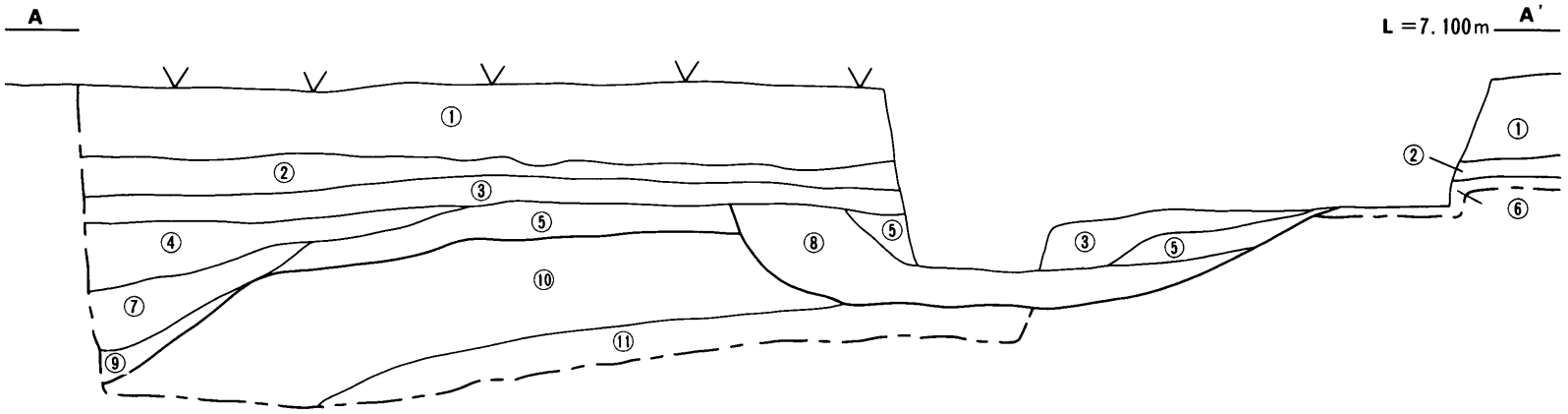
第26図　SD10・11・14断面図

SD12（第27図）

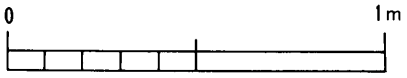
A－2の北東隅で南肩の部分を検出した。北肩は調査区外になる。西側はSD07とつながる可能性が高く，東側は市道をはさんでB－1のSD20とつながる可能性がある。サヌカイト片・石器とともに，図示することはできなかったが弥生時代前期の底部の細片がわずかに出土している。

石器（第28図　37・38）

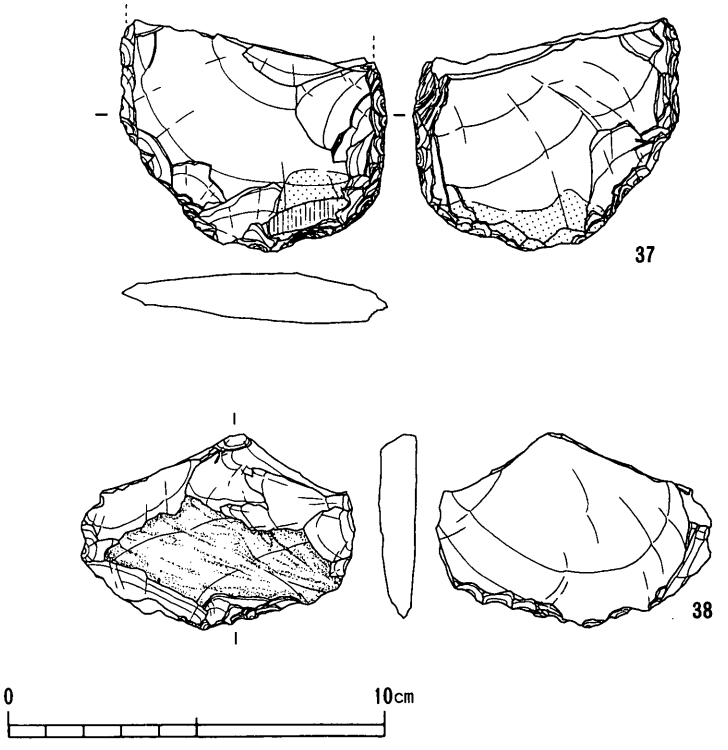
37はサヌカイト製の打製石斧である。基部を破損し先端部が遺存する。縁辺部には丁寧に調整を施し刃部としているが，使用したことを示す磨滅が部分的に認められる。38は片方の面に一段と風化の進んだ古い剥離面が残るスクレイパーである。



SD09・12
①暗灰色粘質土（耕作土）
②黄灰色粘質土
③暗茶褐色粘土
④茶褐色粘土
⑤茶褐色粘土
⑥茶褐色粘質土
（マンガンを多く含む）
⑦茶褐色粘土
⑧灰褐色細砂
⑨濁黄色粘土
（灰色細砂が筋状に入る）
⑩明黄色細砂
（灰色細砂が筋状に入る）
⑪濁灰色混礫細砂



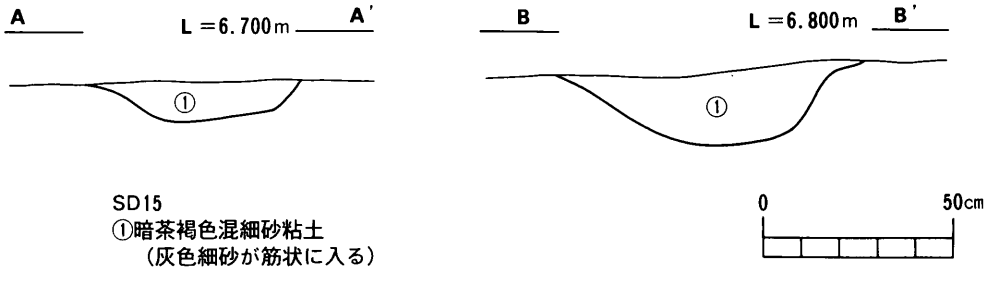
第27図　SD09・12断面図



第28図　SD12出土遺物実測図（石製品）

SD15（第29図）

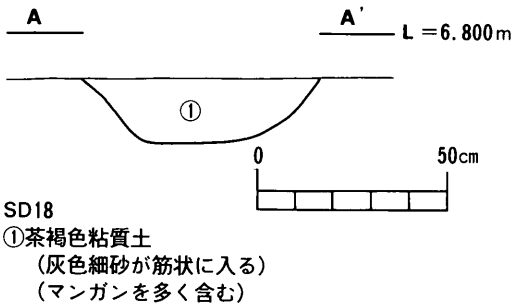
B－1中央部で検出した。幅80cm，深さ約20cmをはかる。緩やかに弧を描きながら，南東－北西方向を示す。埋土は暗茶褐色粘土の単一埋土である。弥生土器細片・サヌカイト片が出土している。



第29図　SD15断面図

SD18（第30図）

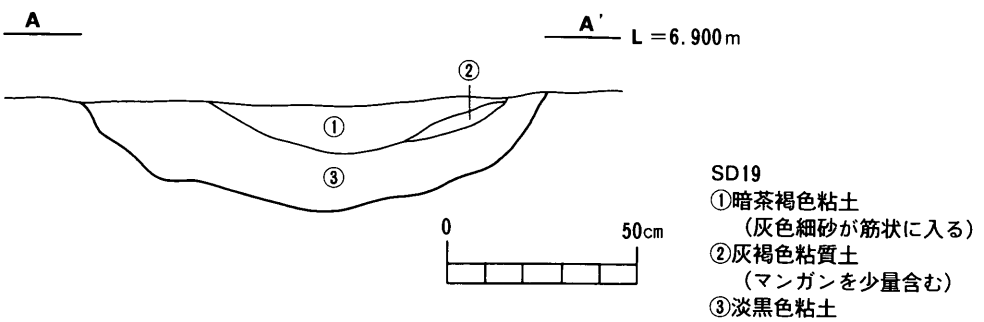
B－1で検出した。幅62cm，深さ約17cmをはかる。方向はほぼ東西を示す。遺物は出土していない。SD19と埋土は異なるが切り合い関係が認められない。SD19と同時に機能していたと考えられる。



第30図　SD18断面図

SD19（第31図）

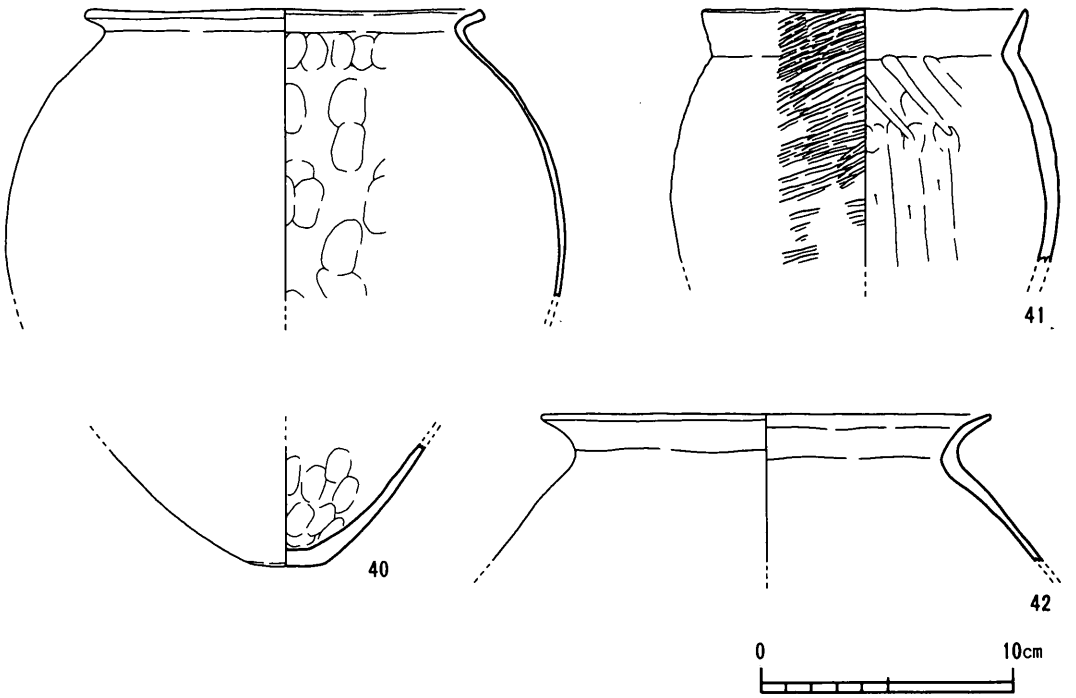
B－1で検出した。幅80cm，深さ約30cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。調査区西端でSD20を切る。埋土は上・下二層に分かれるが出土した遺物に時期差は認められない。弥生土器片・石器・サヌカイト片が出土している。



第31図　SD19断面図

土器（第32図　39～42）

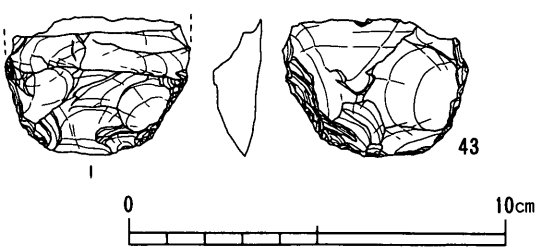
39・41・42はいずれも弥生時代後期の甕である。39は球形に近い胴部につよく屈曲する口縁部を有する甕である。口縁端部は摘み上げる。内面に指頭圧痕が残る。40は39と同一個体の底部である。内面には指頭圧痕が残る。丸みをもった底部をしている。41は口縁叩き出し手法の叩き目が口縁端部に至るまで残っている。内面の篦削りは頸部まで施されているが，胴部上半から頸部までは，内面の粘土を掻き取った工具の跡が明瞭に残る。42は口縁部がく字形に外反する甕である。



第32図　SD19出土遺物実測図①

石器（第33図　43）

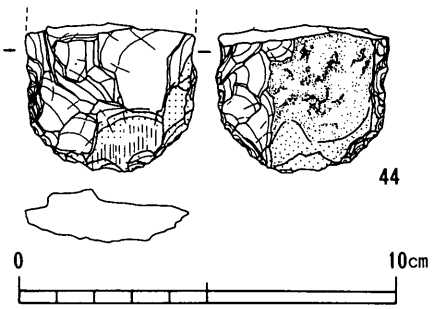
43はサヌカイト製の打製石斧である。先端部のみが遺存する。縁辺部には細かい調整が施されている。



第33図　SD19出土遺物実測図②（石製品）

SD20（第36図）

B－1南西隅で検出した。幅2.9m，深さ約0.7mをはかる。方向は南西－北東方向を示すが，先述したように屈曲してSD12とつながる可能性がある。埋土は5層からなるが，遺物はほとんど出土していない。わずかに弥生土器細片・石器・サヌカイト片が出土している。



第34図　SD20出土遺物実測図（石製品）

石器（第34図　44）

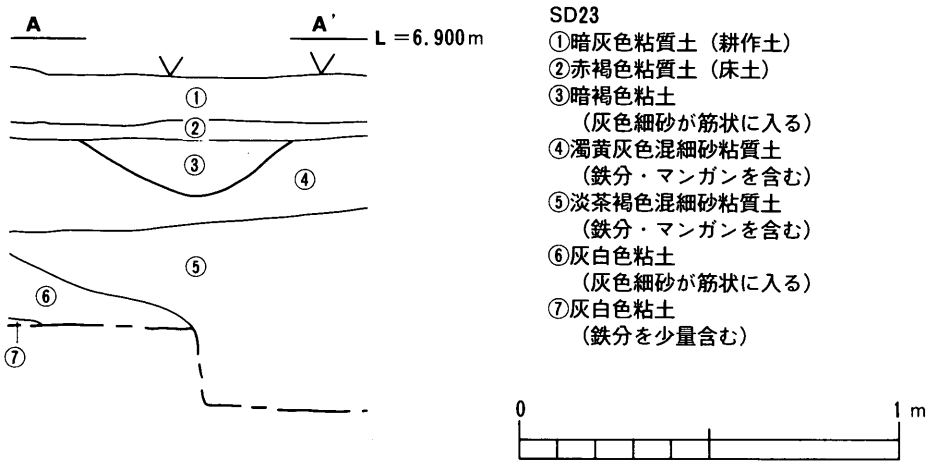
サヌカイト製の打製石斧である。先端部だけが遺存している。片方の面には自然面が残る。もう一方の面には，使用されたことを示す磨滅が認められる。縁辺部には細かい調整が施されている。

SD22

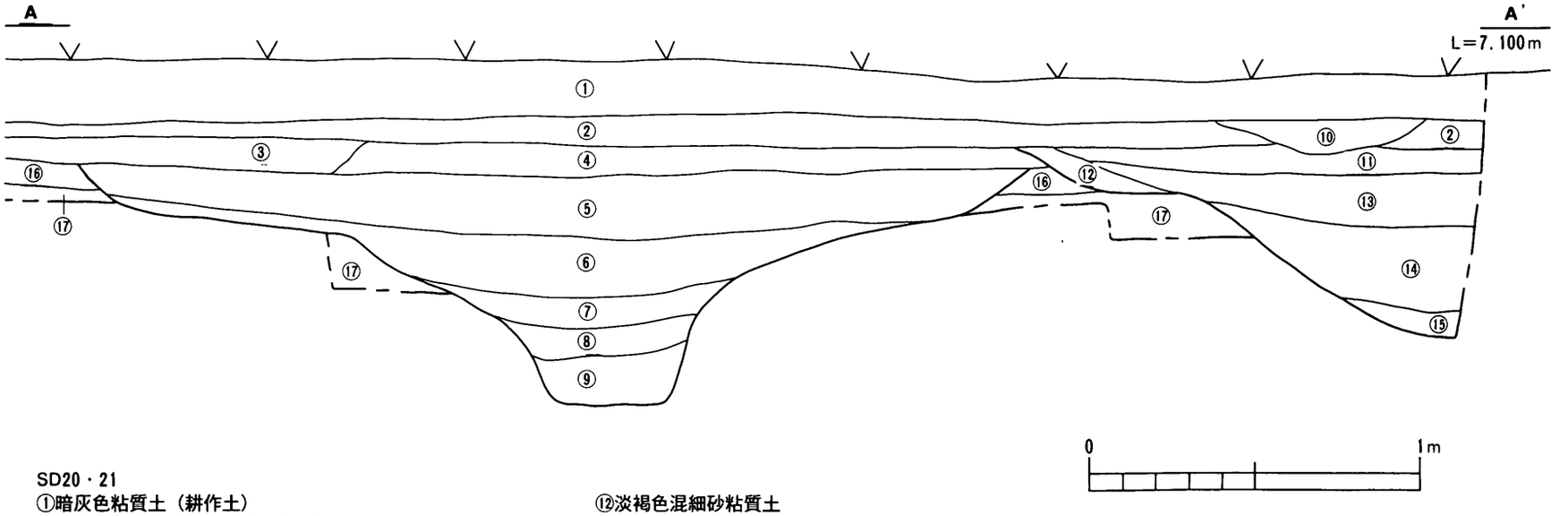
B－2で検出した。幅25cm，深さ約7cmとわずかに痕跡をとどめているにすぎない。方向は南東－北西方向を示すが，北端でほぼ直角に南西方向に屈曲する。土器細片がわずかに出土している。

SD23（第35図）

B－3で検出した。幅68cm，深さ約20cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。埋土は暗茶褐色粘土の単一埋土である。拳大の花崗岩の円礫が1点出土している。

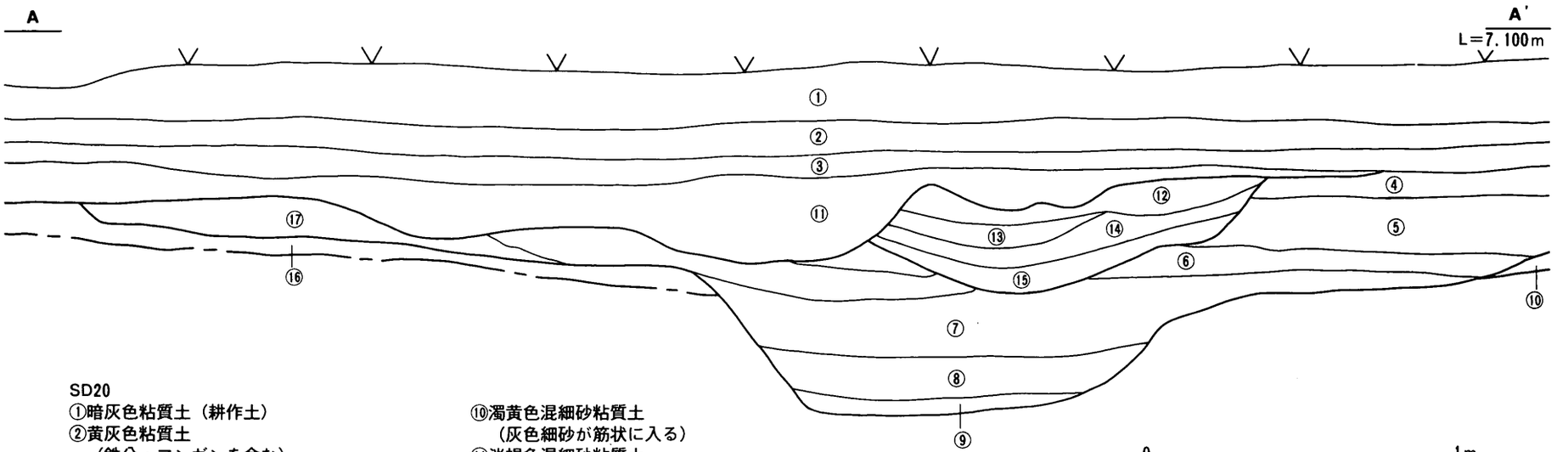


第35図　SD23断面図



SD20・21
①暗灰色粘質土（耕作土）
②黄褐色粘質土（鉄分を多く含む）
③黄褐色粘質土（第②層）と暗灰褐色混細砂粘質土が混在
④暗茶褐色粘土
⑤暗灰褐色混細砂粘質土
⑥黒褐色粘土
⑦暗灰褐色粘土
（鉄分・マンガンを多く含む）
⑧灰褐色粘土
⑨灰色砂礫
（3～5㎝大の亜角礫・円礫を多く含む）
⑩灰色砂質土
⑪黄白色混細砂粘質土
（マンガンを少量含む）
⑫淡褐色混細砂粘質土
（マンガンを少量含む）
⑬淡褐色混細砂粘質土
（マンガンを多く含む）
⑭淡灰色粘土
（鉄分を多く含む）
⑮淡灰色混礫細砂
（5～15㎝大の亜角礫・円礫を多く含む）
⑯灰褐色混細砂粘質土
（マンガンを多く含む）
⑰濁黄灰色粘土
（灰色細砂が筋状に入る）

第36図　SD20・21断面図



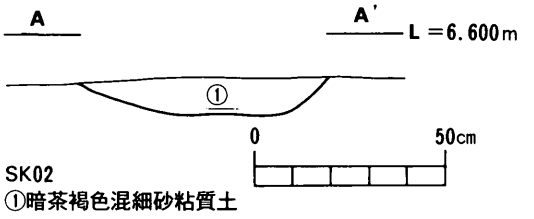
SD20
①暗灰色粘質土（耕作土）
②黄灰色粘質土
（鉄分・マンガンを含む）
③黄褐色混細砂粘質土
（鉄分・マンガンを含む）
④暗茶褐色粘質土
⑤暗灰褐色混細砂粘質土
⑥黒褐色粘土
⑦暗灰褐色粘土
（鉄分・マンガンを多く含む）
⑧灰褐色粘土
⑨灰色砂礫
（5～30㎝大の亜角礫・円礫を多く含む）
⑩濁黄色混細砂粘質土
（灰色細砂が筋状に入る）
⑪淡褐色混細砂粘質土
（鉄分・マンガンを少量含む）
⑫淡灰色混細砂粘質土
⑬淡灰褐色混細砂粘質土
（鉄分・マンガンを少量含む）
⑭淡灰褐色粘土
⑮淡灰褐色混細砂粘質土
（マンガンを少量含む）
⑯濁黄灰色粘土
（灰色細砂が筋状に入る）
⑰灰褐色混細砂粘質土
（マンガンを多く含む）

第37図　SD20断面図

(2) 土坑

SK02（第38図）

A－1で検出した。長径1.8m，短径0.7m，深さ0.1mをはかる楕円形の土坑である。埋土は暗茶褐色混細砂粘質土の単一埋土である。かなり磨滅した刻目突帯を有する土器細片が1点出土している。



第38図　SK02断面図

(3) 自然河川

SR01

A－1南西部で東肩を検出した。幅7m，深さ0.7mまでを確認している。南西方向に緩やかに下がっていくが，調査区南西のコーナー部分で急に落ち込む。SD01とつながるあたりで突帯文土器片が出土している。

(4) 柱穴

A－2のSP02，B－1のSP18，B－2のSP23から，弥生土器の細片が出土している。いずれも後世の削平のため遺存状況は悪い。

3　中世・近世

(1)　溝状遺構

SD14（第26図）

A－2で検出した。幅54cm，深さ約13cmをはかる。方向は南東－北西方向を示し，約30cm間隔でSD11と平行する。埋土もSD11と同じ灰黄色粘質土1層である。須恵器の細片が1点出土している。

SD24（第40図）

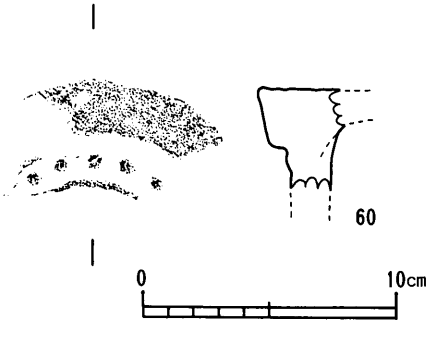
B－3で検出した。幅75cm，深さ約60cmをはかる。方向は南西－北東方向を示す。埋土は淡灰白色粘質土と灰白色粘質土の2層である。中・近世の土器が出土している。

土器（第41図　44～59）

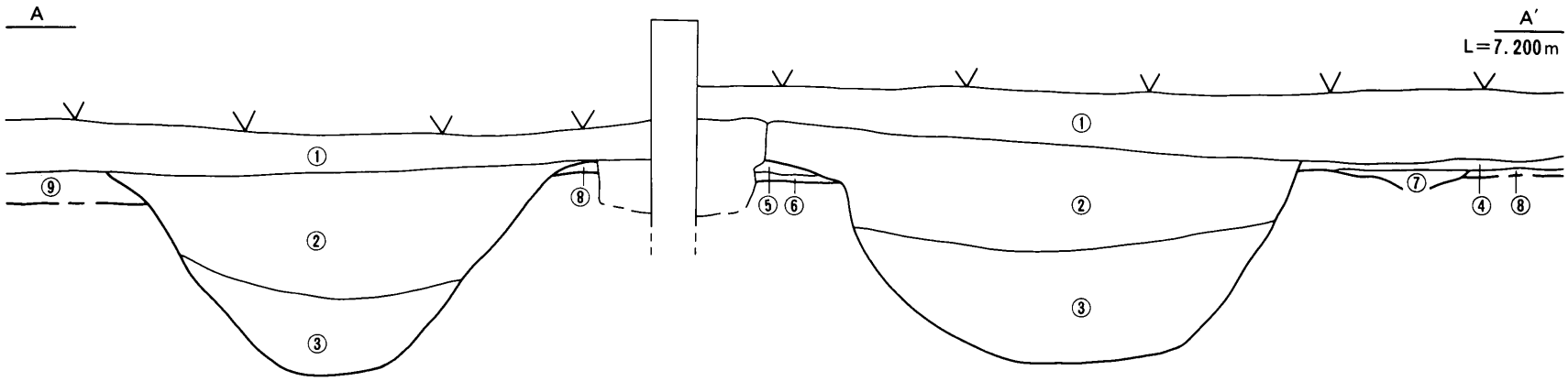
45は瓦質の羽釜の口縁部である。外面にたて刷毛が残る。46は東播系須恵器のこね鉢である。13世紀後半頃のものと思われる。47は備前あるいは堺産の土師質の擂鉢である。48は備前焼の大甕の口縁部である。折り返した口縁端部に自然釉がかかっている。49・50は肥前系の陶胎染付の椀である。どちらも貫入が著しい。51は備前系陶器の灯明具の受皿である。底部には糸切り痕が明瞭に残る。52から56は磁器椀である。52は内面の見込み部に蛇の目釉剥ぎがなされており，砂目積みが見られる。高台畳付け部は無釉である。54は肥前系の磁器椀で，外面に二重網目文を施す。56は瀬戸・美濃系の掛け分け椀である。高台畳付け部は釉がかかっていない。57は伊万里の染付皿である。58は陶器の台付皿である。内面見込み部に砂目積みが見られる。高台は削り出しており，外面に釉はかかっていない。59は青磁染付の椀である。外面は緑白色を呈する。これらの遺物はほとんどが18世紀でおさまるものであり，45・46・47の3点についてはSD24に流れ込んだものであろう。

SD26

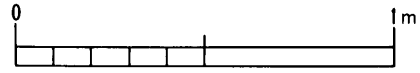
Cで検出した。調査区の北側で南肩らしき落ちを検出しているが，北肩は調査区内では検出していない。さらに深さ約12cmと浅く，不明確ではあるが溝状遺構として取り扱う。埋土は淡灰色粘質土の単一埋土である。近世の軒丸瓦瓦当（第39図　60）・磁器細片などがわずかに出土している。



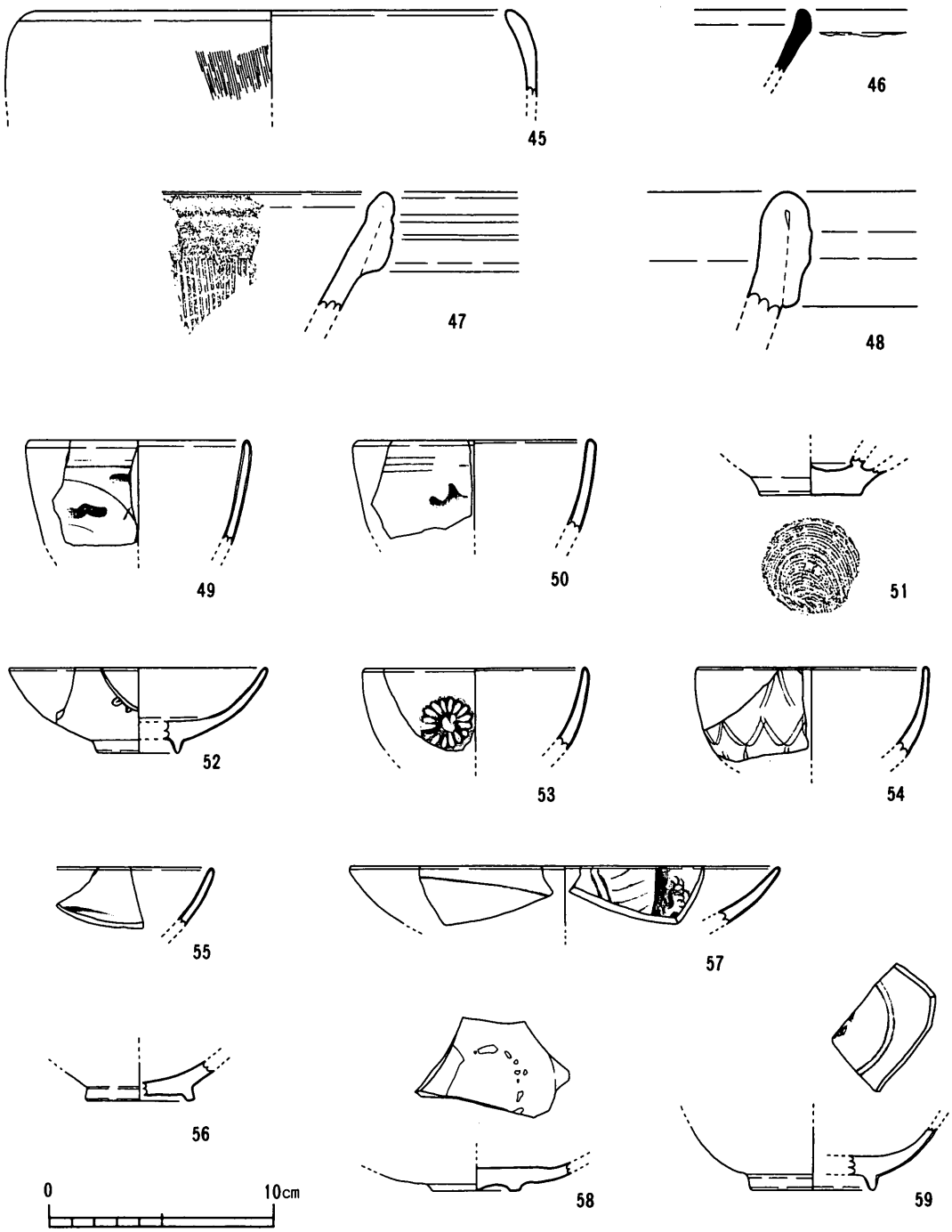
第39図　SD26出土遺物実測図



SD24・25・SK17
①暗灰色粘質土（耕作土）
②淡灰白色粘質土（鉄分を多く含む）
③灰白色粘質土（鉄分を多く含む）
④赤褐色粘質土（床土）
⑤黄白色細砂
⑥淡灰褐色粘質土
⑦暗茶褐色粘土
⑧濁黄色粘土
（灰色細砂が筋状に入る）
⑨灰白色粘質土
（鉄分を多く含む）



第40図　SD24・SD25・SK17断面図

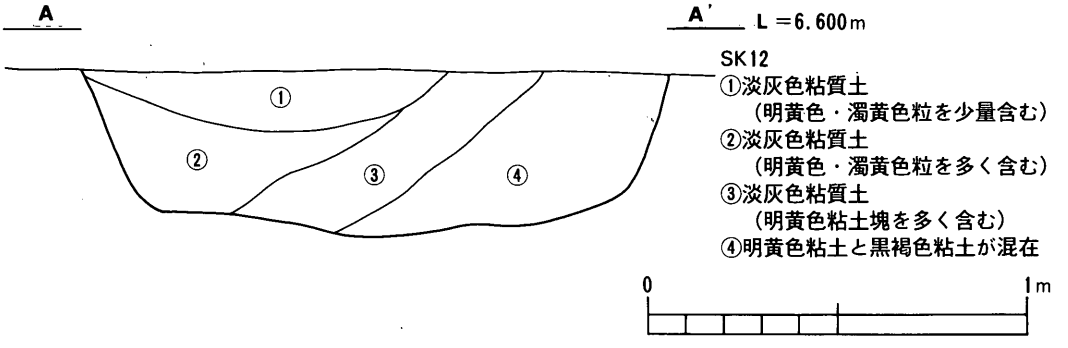


第41図　SD24出土遺物実測図

(2) 土坑

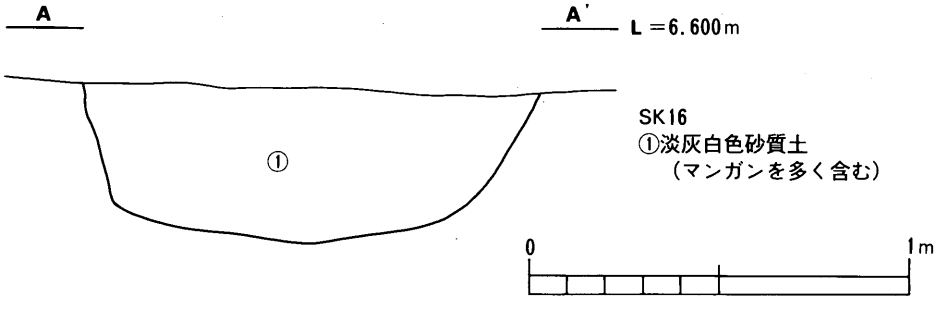
SK12（第42図）

B－1で検出した。長径1.6m，短径1.4m，深さ0.5mをはかり，ほぼ正円を呈する。埋土は4層からなる。断面は逆台形を呈する。わずかに陶器・土師質土器の細片が出土している。



第42図　SK12断面図

SK16（第43図）

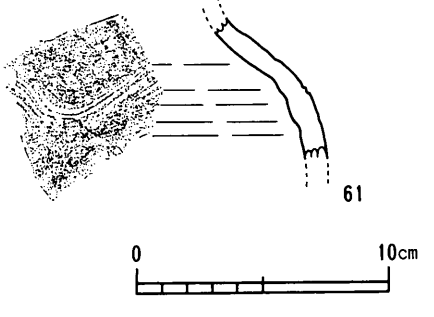


第43図　SK16断面図

B－3で検出した。長径1.3m，短径1.1m，深さ0.4mをはかる。隅丸方形を呈する。埋土は淡灰白色粘質土の単一埋土である。断面は逆台形を呈する。遺物の量は少ないが陶器・土師質土器片とともに唐津系の刷毛目椀細片が出土している。

土器（第44図　61）

図化できたのは1点だけであった。61は備前焼の甕か壷の肩部である。焼成は良く，

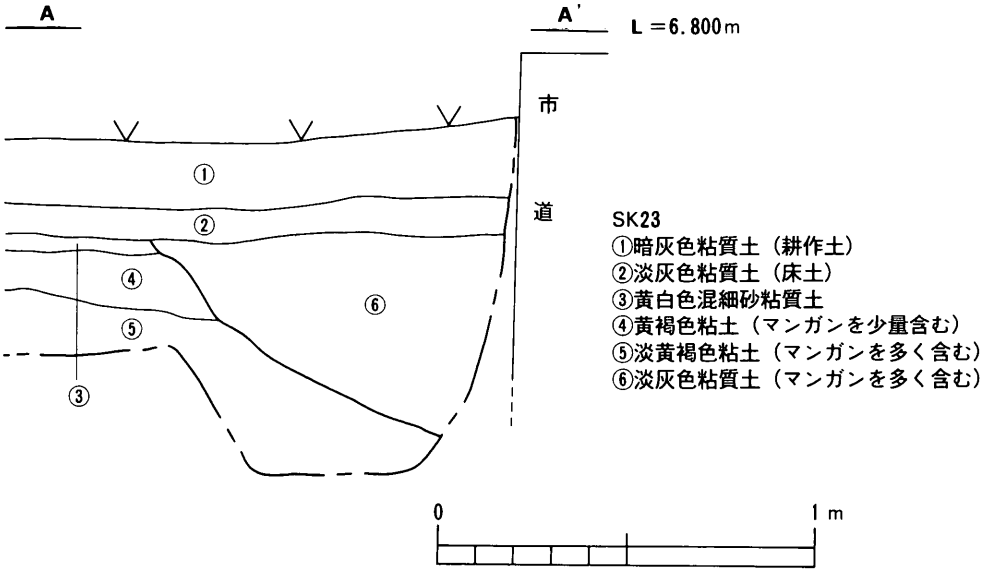


第44図　SK16出土遺物実測図

外面に櫛状工具で波状文を施す。

SK23（第45図）

C調査区の北東隅で検出した。東側は市道の下に，北側は調査区外になるために平面形・規模については確認できていない。埋土は淡灰色粘質土の単一埋土である。備前系陶器・唐津系の刷毛目椀細片がわずかに出土している。



第45図　SK23断面図

(3)　素掘り溝

SX01

B－3の北東隅付近で検出した。幅10～15cm，深さ7cm前後をはかる。約1.3mの間隔で平行する3条の素掘り溝である。方向は南西－北東方向で，SD24と平行する。中世の土師質土鍋の口縁部の破片が1点出土している。

SX02

Cの中央付近で検出した。幅20～30cm，深さ10cm前後をはかる。方向は南西－北東方向を示すものと，それに直行する方向を示すものがある。わずかに磁器細片が出土している。

(4)　柱穴

A－1のSP08から，古代末から中世の土師器小皿の破片が1点出土している。埋土は淡灰褐色混細砂粘質土の単一埋土である。SP08の周辺に存在する8個の柱穴の埋土も，SP08同様，淡灰褐色混細砂粘質土の単一埋土である。

4　時期不明の遺構

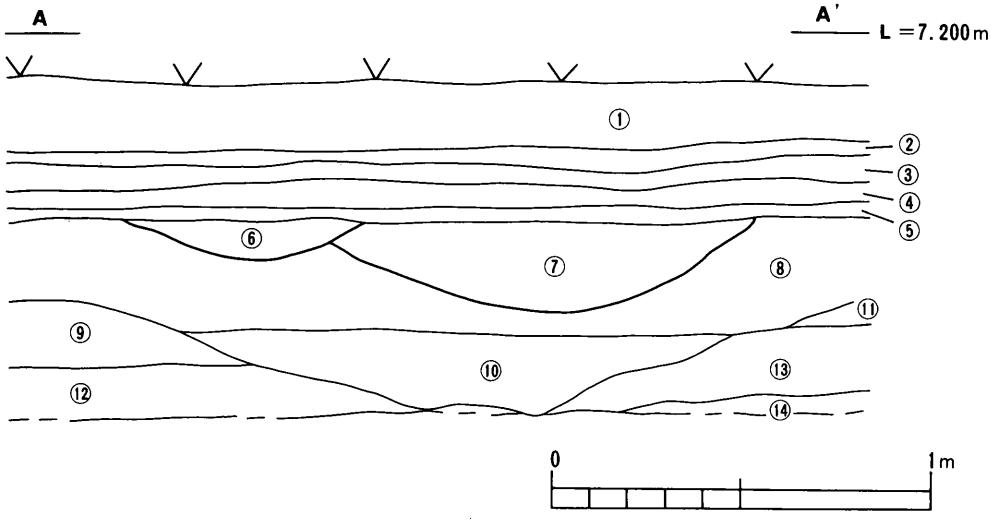
(1)　溝状遺構

SD02

A－1で検出した。幅46cm，深さ約10cmをはかる。方向は北西－南東方向を示す。断面は皿形を呈し，埋土は淡灰褐色混細砂粘質土の1層だけである。遺物は出土していない。

SD06（第46図）

A－2で検出した。幅64cm，深さ約10cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。埋土は淡灰褐色粘質土の単一埋土である。遺物は出土していない。



SD03・06
①暗灰色粘質土（耕作土）
②赤褐色粘質土（床土）
③黄褐色粘質土（鉄分多い）
④黄灰色混細砂粘質土
（マンガンを少量含む）
⑤黄白色細砂
⑥淡灰褐色粘質土
（上面にマンガンが多い）
⑦暗茶褐色粘土（SD01埋土）
⑧茶褐色粘質土
（マンガンを多く含む）
⑨濁黄色細砂
（シルト質　鉄分・マンガンを少し含む）
⑩灰色中～細砂
⑪灰黄色細砂
⑫淡灰黄色細砂
⑬灰黄色細砂（鉄分を少し含む）
⑭灰褐色混礫砂質土
（3～20cm大の亜角礫・円礫を多く含む）

第46図　SD03・06断面図

SD11（第26図）

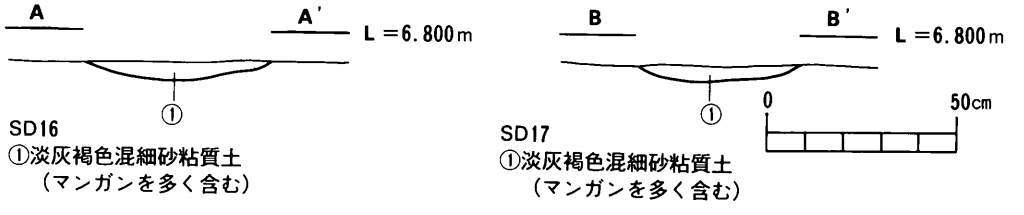
A－2で検出した。幅44cm，深さ約10cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。埋土は灰黄色粘質土の単一埋土である。

SD16（第47図）

B－1で検出した。幅50cm，深さ約8cmとわずかに痕跡をとどめるにすぎない。方向は南東－北西方向を示す。約60cmの間隔でSD17とほぼ平行する。埋土は淡灰褐色混細砂粘質土の1層だけである。

SD17（第47図）

B－1で検出した。幅43cm，深さ約8cmをはかる。方向は南東－北西方向を示す。埋土はSD16と同じ淡灰褐色混細砂粘質土である。遺物は出土していない。



第47図　SD16・17断面図

SD21（第36図）

B－1南西隅で検出した。調査区のすぐ西側に用水路が存在しているため，溝の東肩は検出したが西肩は確認していない。幅1.4m，深さ0.6mまで確認している。方向は南東－北西方向を示す。遺物は出土していない。

SD25（第40図）

B－3で検出した。幅32cm，深さ約5cmをはかる。埋土は暗茶褐色粘土の単一埋土である。わずかに痕跡をとどめているにすぎない。

(2)　土坑

SK01（第48図）

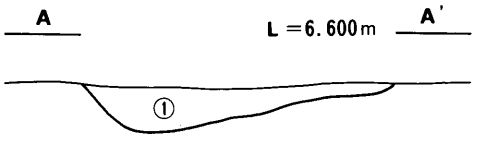
A－1で検出した。いびつな楕円形を呈する。長径1.5m，短径0.8m，深さ0.1mをはかる。埋土は暗茶褐色混細砂粘質土の単一埋土である。

SK03（第48図）

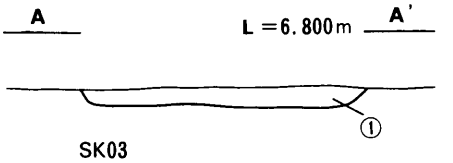
A－1で検出した。円形を呈する。長径0.8m，短径0.7m，深さ0.1mをはかる。埋土は淡灰褐色混細砂粘質土の単一埋土である。

SK04（第48図）

A－1で検出した。不整形な長方形を呈する。長径1.2m，短径0.8m，深さ0.1mをはかる。埋土は暗茶褐色混細砂粘質土の単一埋土である。



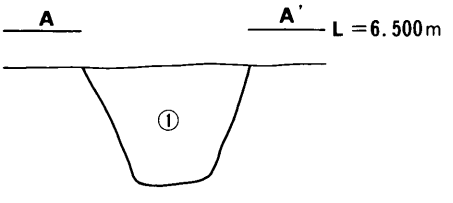
SK01
①暗茶褐色混細砂粘質土



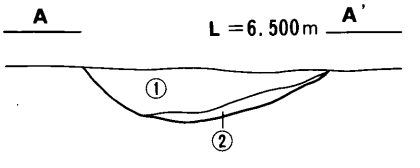
SK03
①淡灰褐色混細砂粘質土

SK04
①暗茶褐色混細砂粘質土

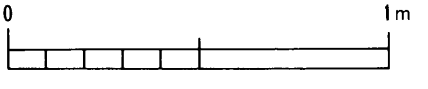
SK05
①淡灰褐色混細砂粘質土



SK06
①茶褐色粘質土
（マンガンを含む）



SK07
①茶褐色砂質土（マンガンを多く含む）
②淡茶褐色粘質土（マンガンを少量含む）



第48図　SK01・03・04・05・06・07断面図

SK05（第48図）

A－1で検出した。長径2.1m，短径1.1m，深さ0.1mをはかる。埋土は淡灰褐色混細砂粘質土の単一埋土である。

SK06（第48図）

A－2で検出した。細長い楕円形を呈する。長径1.9m，短径0.7m，深さ0.3mをはかる。埋土は茶褐色混細砂粘質土の単一埋土である

SK07（第48図）

A－2で検出した。細長い楕円形を呈する。長径2.6m，短径0.7m，深さ0.1mをはかる。埋土は茶褐色粘質土と淡茶褐色粘質土の2層から成る。

SK08（第49図）

A－2で検出した。いびつな三角形を呈する。長径3.4m，短径0.7m，深さ0.1mをはかる。埋土は茶褐色粘質土と淡茶褐色粘質土の2層から成る。

SK09（第49図）

A－2で検出した。勾玉のような形を呈する。長径1.9m，短径0.6m，深さ0.1mをはかる。埋土は茶褐色粘質土と淡茶褐色粘質土の2層から成る。

SK10（第49図）

A－2で検出した。細長い長方形を呈する。長径3.8m，短径0.9m，深さ0.1mをはかる。埋土は淡茶褐色粘質土層の単一埋土である。

SK11（第49図）

A－2で検出した。いびつな長方形を呈する。長径1.0m，短径0.5m，深さ0.1mをはかる。埋土は茶褐色粘質土の単一埋土である。

SK13

B－2で検出した。径0.5mの正円に近い平面形を呈する。埋土は淡灰褐色粘質土の単一埋土である。

SK14（第49図）

B－2北西隅で検出した。長径1.7m以上，短径1.2m以上，深さ0.9mをはかる。埋土は淡灰色粘質土だが，明黄色粘土粒の有無で2層に分かれる。

SK15（第50図）

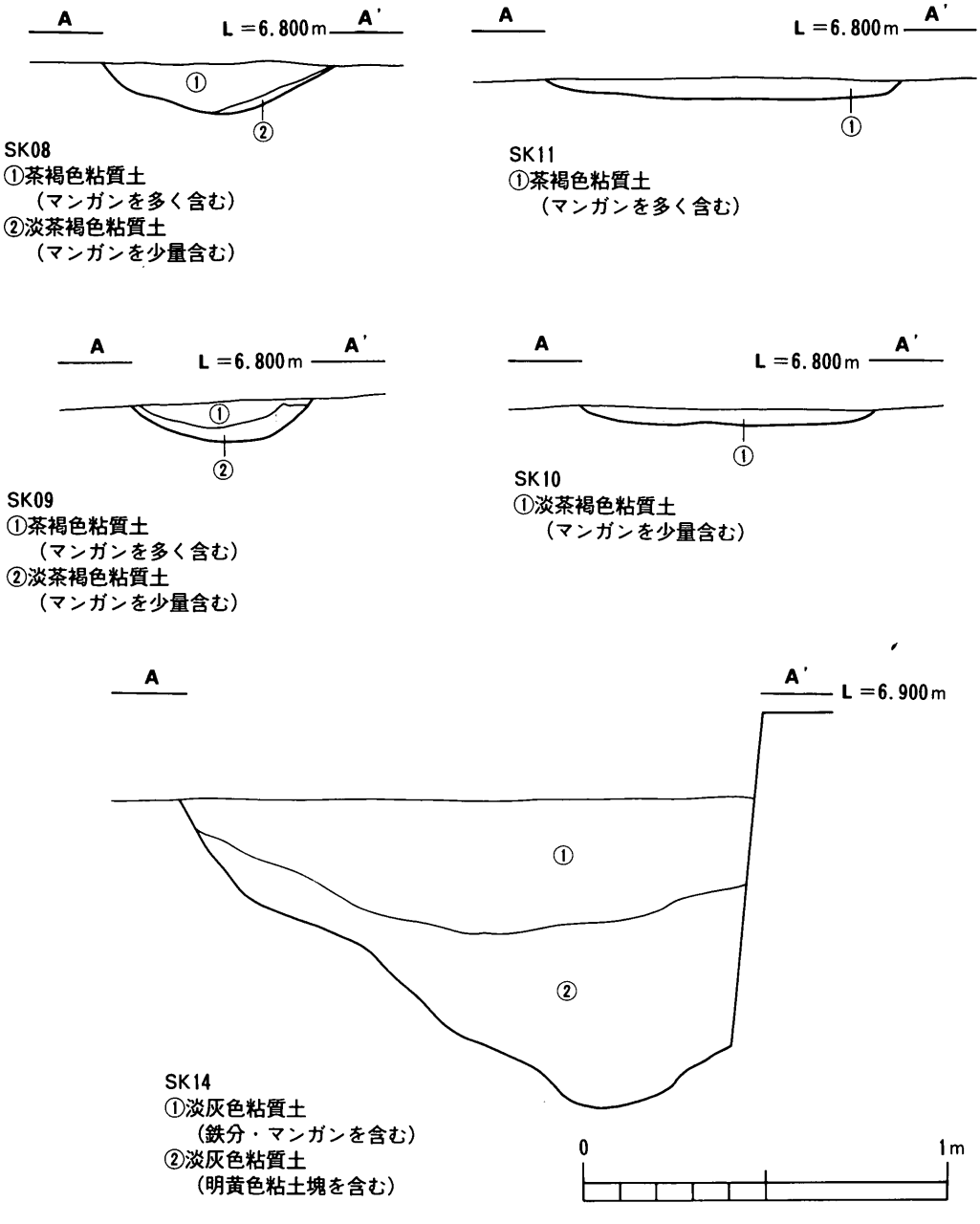
B－2で検出した。隅丸正方形を呈する。長径1.4m，短径1.2m，深さ0.4mをはかる。埋土は黄白色混細砂粘質土の単一埋土である。

SK17（第40図）

B－3東端で一部を検出した。長径1.3m以上，短径0.4m，深さ0.6m以上をはかる。埋土はすぐ北側に位置するSD24と同じ淡灰白色粘質土と灰白色粘質土の2層である。

SK18（第50図）

B－3で検出した。長径0.5m，短径0.4m，深さ0.1mをはかる。埋土は淡灰白色粘質土の単一埋土である。



第49図　SK08・09・10・11・14断面図

SK19（第50図）

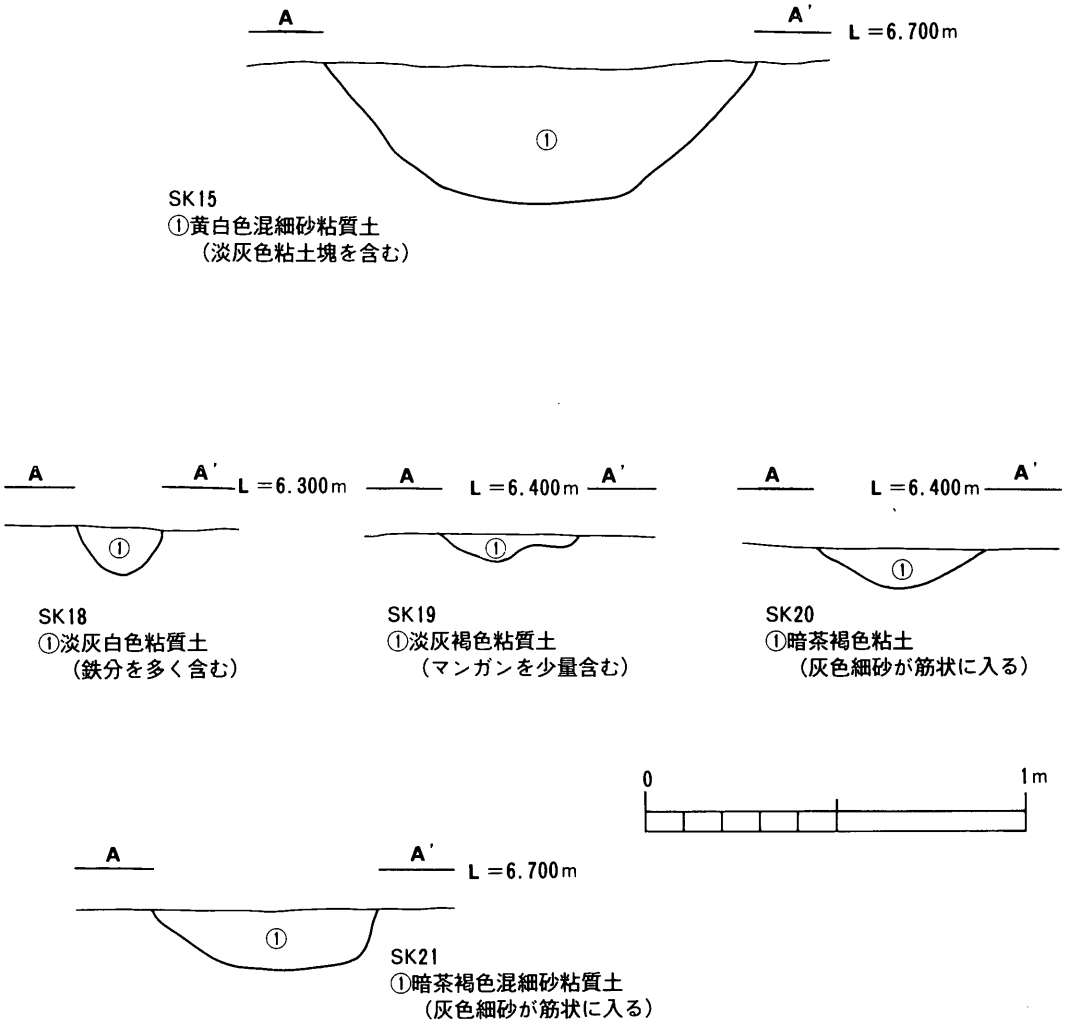
B－3で検出した。直径0.3mのほぼ正円形を呈する。深さ0.1mをはかる。埋土は淡灰褐色粘質土の単一埋土である。

SK20（第50図）

B－3で検出した。長径0.5m，短径0.3m，深さ0.1mをはかる。埋土は暗茶褐色粘土の単一埋土である。

SK21（第50図）

B－3で検出した。長径0.9m以上，短径0.7m，深さ0.2mをはかる。埋土は暗茶褐色混細砂粘質土の単一埋土である。

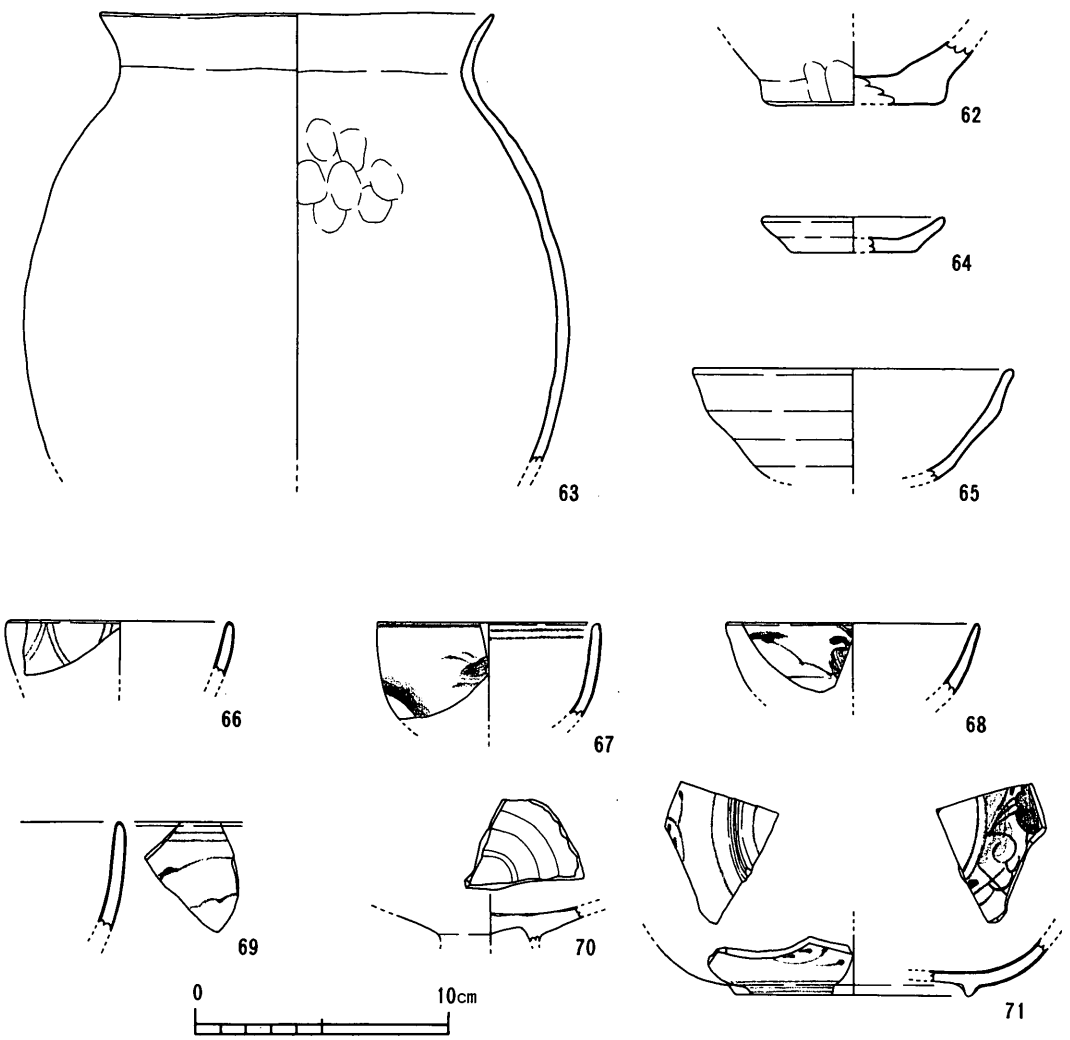


第50図　SK15・18・19・20・21断面図

5　包含層出土の遺物（第51図　62～75）

土器（62～71）

62はＡ－１で出土した，弥生時代後期の甕の底部である。内彎気味に立ち上がる。63はＢ－１で出土した弥生時代後期の壺である。内面の胴部上半に指頭圧痕が残る。64はＢ－３で出土した土師器の小皿である。底部にはかすかに篦切りの痕跡が残る。65はＢ－３で出土した黒色土器の椀である。内面に炭素を吸着させた黒色土器Ａ類であるが，内面には炭化物が付着している。66～68はＣで出土した磁器椀である。66は外面に二重網目文を施している。69は肥前系の陶胎染付椀である。Ｃで出土している。70はＢ－３で出土した皿の底部である。内面に二重

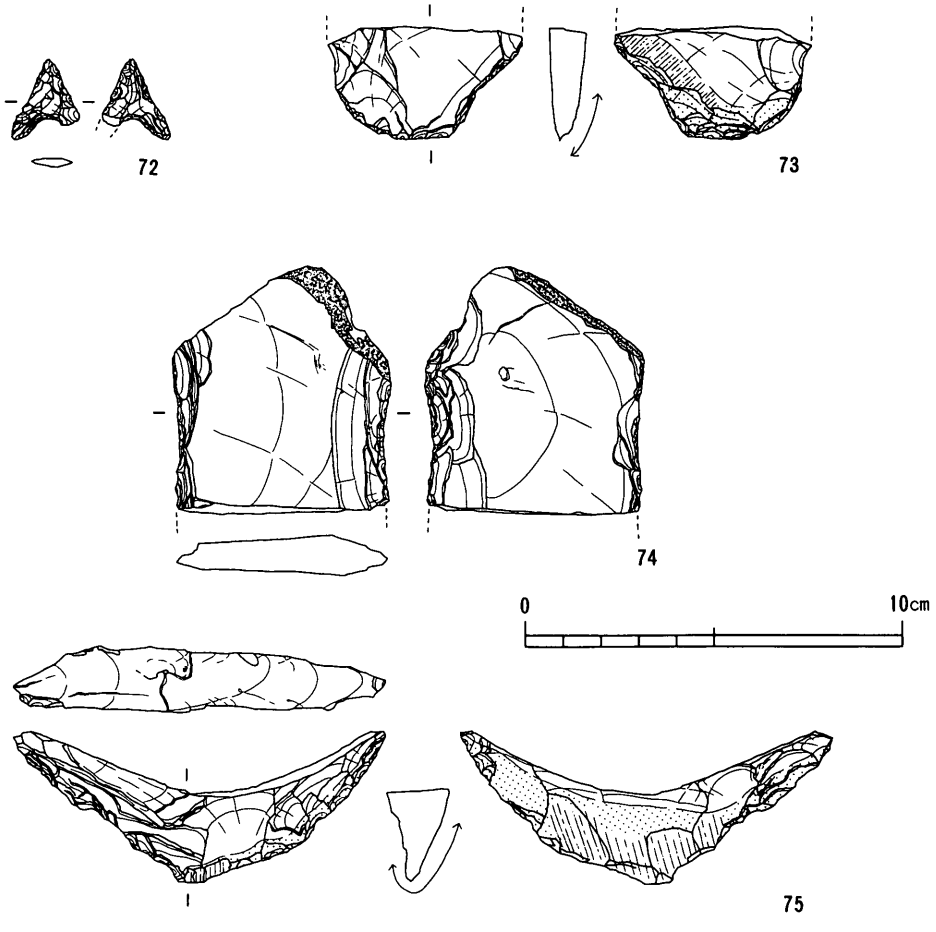


第51図　包含層出土遺物実測図①

の蛇の目釉剥ぎを施している。高台は削り出しており，外面には釉がかかっていない。71はCで出土した伊万里の皿である。66～68はいずれも18世紀代の遺物である。

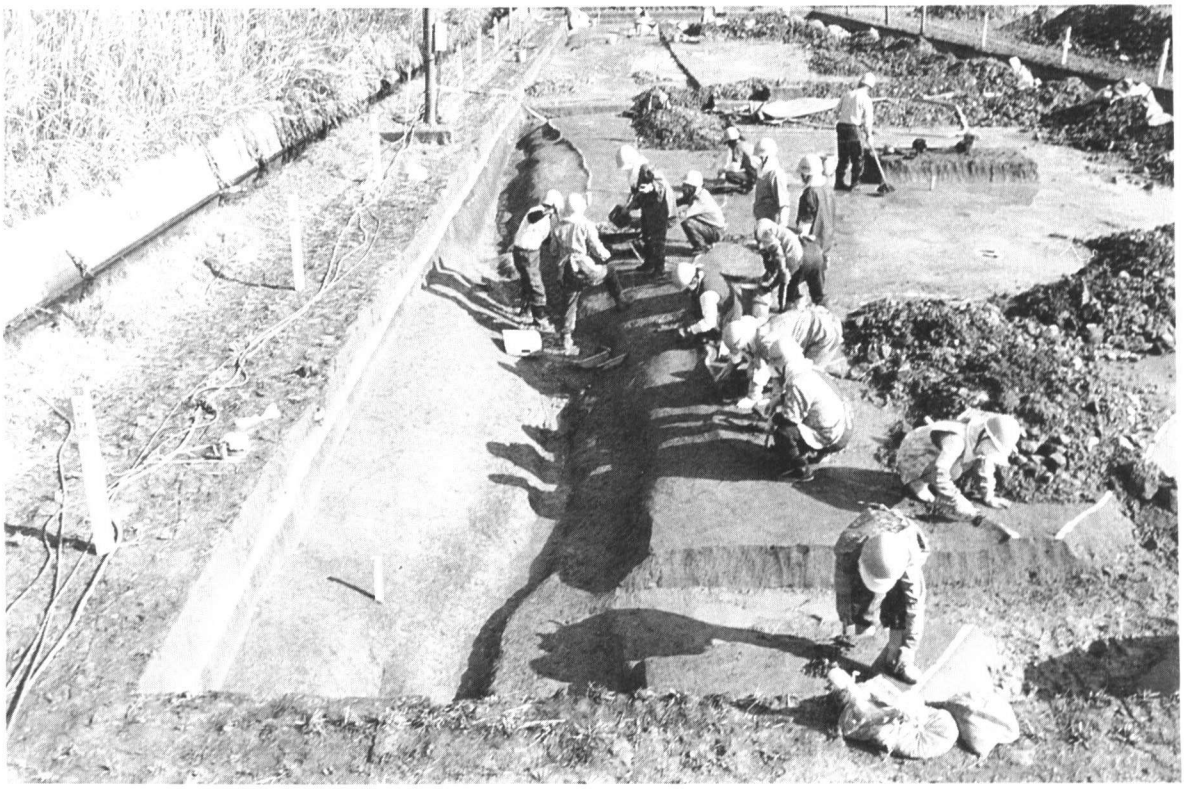
石器（第53図　72～75）

72はB－1で出土したサヌカイト製の石鏃である。凹基式の石鏃であるが，基部端を欠損している。73はA－1で出土したサヌカイト製の打製石斧である。先端のみが遺存する。使用したことを示す磨滅が認められる。74もA－1で出土したサヌカイト製の打製石斧である。先端を欠いており，基部だけが遺存する。基部の斜辺部には，一部に自然面が残っている。75はCで出土したサヌカイト製の打製石斧の先端部である。縁辺部には細かい調整が施されている。



第52図　包含層出土遺物実測図②（石製品）

一部に磨滅が認められる。現在のところ道下遺跡では旧石器は１点も確認されていないが，75は旧石器のスポールの可能性もある。



第53図　発掘調査風景

第4章　総　　括

道下遺跡の調査では，前節で述べたような成果が得られた。当遺跡は，おおよそ調査区全域にわたって後世の削平を受けているため，同一平面上で各時期の遺構を検出している部分が多い。これらの遺構から出土している遺物の時期は，縄文時代晩期から近世までのものがあるが，弥生時代，中世・近世の2時期に大別できることは先に述べた。ここでは検出した遺構を，さらに細かく時期ごとに概観することで道下遺跡のまとめにかえたい。

［Ⅰ期］　縄文時代晩期以前？

A－1・A－2にかけて，調査区を横切る2条の礫の帯が遺構検出面まで上がってきている。この礫の帯はほぼ平行しており，概ね南東－北西方向を示す。この礫は河川の堆積物と考えられ，ここに自然河川が1本存在していたことがわかる。礫の帯の間を埋める土層からは全く遺物が出土しなかった。この埋土に掘り込まれた溝状遺構SD07下層から出土している縄文晩期の突帯文土器細片は，この自然河川の下限を示すものである。このことからこの自然河川は，少なくとも縄文時代晩期以前に流下していたと考えられる。この自然河川が埋没したあとで，道下遺跡で人々が活動を始めた。

［Ⅱ期］　縄文時代晩期～弥生時代前期

SD01・SD07・SD12・SD20・SR01から縄文時代晩期の突帯文土器片と，弥生時代前期土器片が若干ではあるが出土している。これらの突帯文土器は，突帯が低く垂れ下がっており，突帯上に施される刻目も小さく浅いものとなっている。すなわち，突帯・刻目がかなり退化していることがわかる。近年では近畿地方を中心として，このような退化した突帯文土器が弥生時代前期の段階まで存続することが明らかになりつつある。突帯文土器と弥生時代前期土器の共伴例も増加している。香川県においても坂出市下川津遺跡や，坂出市大浦浜遺跡などで共伴することが調査の結果，判明している。県下でも，突帯文土器と弥生時代前期土器の共伴例は今後も増加していくものと予測している。したがって道下遺跡で出土した突帯文土器も，SD01の1点（第12図3）を除いて弥生時代前期にまで下る可能性がある。この4本の溝状遺構は，その位置関係から見て，本来は，緩やかに弧を描く1条の溝状遺構である可能性がきわめて高い。これらの溝状遺構は地面を深く掘り込んで構築している。単に用水路としての機能を想定するならば，これほど深く掘り込む必要があるとは考えがたい。上部を削平されていることを考えれば，本来は2mを超える深さを有していたと思われる。弧を描く

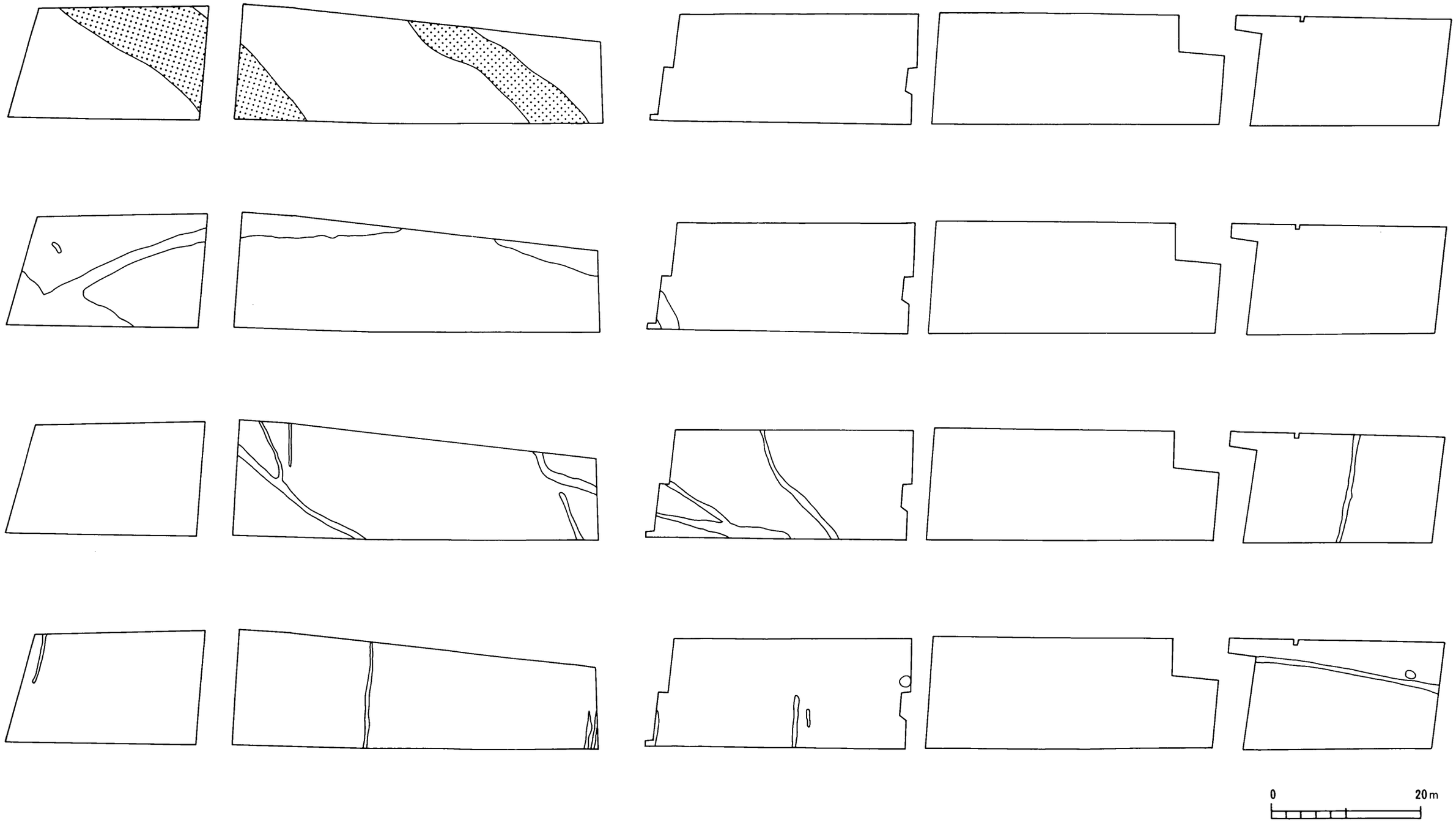
深い溝状遺構から「環濠」的な機能を想定することも，不可能ではあるまい。削平によって，この溝状遺構の内側では，建物は検出されていないため，ここでは「環濠」的機能がある可能性を指摘することにとどめる。この溝状遺構は，西端でSR01とつながっている。自然河川を取り込んだ環濠は，1989年・1990年に調査された善通寺市の龍川五条遺跡でも検出されている。当遺跡の南方約0.7kmには，弥生時代前期の環濠集落として著名な中の池遺跡が所在する。この溝状遺構が「環濠」であったとすれば，弥生時代前期の一時期に，周囲に環濠をめぐらせた２つの集落が隣接して存在するという歴史的景観が復元できよう。

［Ⅲ期］　弥生時代後期

遺跡の西半部を中心として遺構を検出した。検出された遺構はSD03・04・06・07・08・09・10・11・12・15・19・20などがある。これらの他に溝状遺構と同一の埋土をもった柱穴をわずかに検出したが，遺存状況はきわめて悪く，建物跡を示すような並びはみられない。しかし，柱穴・土坑の存在から，弥生時代後期の段階ではこの地に人々が居住していたことが考えられる。これらの溝状遺構からは若干ではあるが，弥生時代後期の遺物が出土しているが，SD09・19から出土した遺物がその大半を占める。遺物の器種は壷・甕・鉢・高杯・器台がある。第24図34・35・36は小型器台として扱ったが，高杯の可能性もある。甕は内面の篦削りが頸部まで及んでいるものが多いが，頸部まで及ばないものもみられる。外面の並行叩きの後にハケ調整を加えるものと，ハケ調整を加えないものが認められる。また底部は，明確に平底を呈するもの，わずかに平坦面を残すもの，丸底のものがある。これらの遺物の時期であるが，下川津編年のⅢ式～Ⅵ式併行期，畿内編年の庄内併行期頃のものが大半を占めるようである。なかにはそれより若干古い時期の遺物もみられ，やや時期幅があるようである。

［Ⅳ期］　中・近世

この時期の遺構は，散在的ではあるが，ほぼ調査区全域で検出している。検出した遺構はSD14・24・26・SK12・16・23・SX01・02などである。Ｂ－２の北壁付近で，溝状遺構や土坑と同一の埋土をもった柱穴をいくつか検出している。これらの柱穴は，調査区の北側に拡がると思われる。現在のところ建物跡は確認していない。遺構の検出状況から，調査区中央部は居住域として，調査区東半部は素掘り溝の存在から，水田などの生産域として土地利用されていたものと考えられる。出土した遺物の時期は中世～近世にわたるが，中世の遺物は少なく，染付を中心とした近世（18世紀代）のものが大半を占める。



第54図　道下遺跡遺構変遷図

以上のように道下遺跡の変遷をⅠ期からⅣ期まで概観した。このうち，Ⅲ期からⅣ期の間が大きく空白の期間となっている。この間を埋める資料はわずかではあるが出土している。図化することはできない細片ばかりであるが，包含層出土の古墳時代の須恵器の杯身，SP08出土の古代末から中世にかけての土師器小皿などがある。遺構はほとんど検出していないが，Ⅲ期からⅣ期の間も道下遺跡は人々の生活の場であったと思われる。

最後に条里制との関わりについて述べたい。丸亀平野に施行された条里線はN30°Wといわれており，条里地割を復元している先学の研究も多くを数える。道下遺跡で検出した溝状遺構で，N20°W～N40°Wの方向をもつものは9条を数える。このうち，弥生時代の溝状遺構2条を除いた，SD02・06・11・14・16・17・21の7条が条里関連の溝状遺構と考えられる。また，これに直行する方向をもつ溝状遺構として，SD24がある。これらは周囲に残る方格地割の方向と一致している。復元された条里地割によると，A－2とB－1の間と，B－3の東側，およびCの東側が坪界と推定されており，その間隔は，それぞれ約108mをはかる。現在この三ヵ所には市道と水路が走っている。今回の調査ではその下は発掘していないため，この部分の遺構の存在は確認していない。ただし，A－2とB－1の間の部分では，市道と水路が蛇行しているため，南壁沿いに入れたトレンチでSD21を検出した。全容は未確認であるが，かなり大規模な溝状遺構と思われる。中世・近世の遺物を出土したSD24を除くと，時期比定のできる溝状遺構はない。他の6条の溝状遺構についてであるが，坪界によって区画された方形の土地の内部を，区画する目的で作られたものと考えられよう。とりわけ近接してほぼ並行する2本の溝状遺構SD11・14・SD16・17の二組は，小道の両側に掘られた側溝と考えることもできよう。今回の調査で検出したこれらの溝状遺構は，条里の土地区画に伴う溝状遺構であることは判明したが，どの時代に掘られたのかを明確に示す資料は検出できなかった。

今回の道下遺跡の調査で得られたわずかな成果をもとに，道下遺跡の変遷や，弥生時代前期の「環濠」の可能性などを指摘したが，この是非については，今後の周辺の調査の成果に期待したい。

第55図　発掘調査に従事した人々

観　察　表

第4表　遺物観察表①

番号	挿図	図版	器種	出土遺構	成形・調整	胎土	焼成	色調	法量(cm)	備考
1	12	20	突帯文土器 甕	SD01	内…ナデ 外…ナデ	0.5～1㎜の 砂粒を含む	良	茶褐色	—	磨滅が著しい 浅く小さい刻目
2	12	20	突帯文土器 甕	SD01	—	2㎜程度の 砂粒を含む	良	淡黒褐色	—	浅く小さい刻目
3	12	20	突帯文土器 甕	SD01	内…ナデ 外…ナデ	1㎜程度の 砂粒を含む	良	内…暗茶褐色 外…淡褐色	—	浅く小さい刻目
4	12	20	突帯文土器 甕	SR01	—	0.5～1㎜の 砂粒を含む	不良	淡橙褐色	—	浅く小さい刻目
5	12	20	突帯文土器 甕	SR01	内…ナデ 外…ナデ	0.5～2㎜の 砂粒を含む	良	淡褐色	−	浅く小さい刻目 退化した突帯
6	12	20	弥生土器 底部	SR01	—	2～4㎜の砂 粒を含む	良	内…赤褐色 外…濁褐色	底径 6.5	甕の底部か？ 凹み底
11	15	21	弥生土器 長頸壺	SD03	内…指ナデ・板ナデ 外…たて刷毛・ナデ	1～5㎜の砂 粒を含む	不良	橙褐色	口径 19.4	頸部に篦状工具による刺突文
12	15	21	弥生土器 壺？	SD03	外…ナデ	0.3～7㎜の 砂粒を含む	良	内…淡褐色 外…黒色	—	焼成前の穿孔が1ヶ所ある 壺の肩部か？
13	15	21	弥生土器 底部	SD03	—	0.3～2㎜の 砂粒を含む	良	内…暗褐色 外…暗茶褐色	底径 5.8	甕の底部 「雲母土器」
14	15	21	弥生土器 底部	SD03	内…指押さえ・ナデ 外…ナデ	ほとんど砂粒 を含まない	良	内…黒褐色 外…白褐色	—	外面に黒斑 尖り気味の丸底
15	15	21	弥生土器 台付鉢	SD03	内…指ナデ 外…指押さえ・ナデ	0.3～7㎜の 砂粒を含む	良	内…淡黒色 外…白褐色	底径 4.5	
16	17		弥生土器 高杯	SD04	内…ナデ 外…指ナデ	ほとんど砂粒 を含まない	良	内…白褐色 外…橙褐色	—	高杯脚部
17	17	22	弥生土器 底部	SD04	外…ヘラケズリ・ナデ	1～5㎜の砂 粒を含む	良	内…濁褐色 外…淡褐色	底径 5.0	外面に黒斑　「雲母土器」 甕か鉢の底部

第5表　遺物観察表②

番号	挿図	図版	器種	出土遺構	成形・調整	胎土	焼成	色調	法量(cm)	備考
18	20	22	突帯文土器 甕	SD07	内…ナデ 外…ナデ	0.3～2mmの 砂粒を含む	良	濁褐色	—	浅く小さな刻目 外面のナデは板状工具か？
19	20	22	突帯文土器 甕	SD07	外…ナデ	0.3～2mmの 砂粒を含む	不良	淡褐色	—	突帯の磨滅が著しい
20	20	22	突帯文土器 甕	SD07	—	0.3～1mmの 砂粒を含む	不良	茶褐色	—	突帯の磨滅が著しい
21	20	22	突帯文土器 甕	SD07	内…ナデ 外…ナデ	0.3～1mmの 砂粒を含む	良	濁淡褐色	—	内面に3条の沈線
22	20		弥生土器 甕	SD07	内…ハケ・ナデ 外…ハケ・ナデ	0.1～2mmの 砂粒を含む	良	淡茶褐色	口径 14.0	「雲母土器」
24	22		弥生土器 甕	SD08	内…指押さえ・ナデ	1mm程度の 砂粒を含む	良	淡黄褐色	口径 12.3	表面の剥離が著しい
25	22	22	弥生土器 鉢	SD08	—	0.5～2mmの 砂粒を含む	良	暗茶褐色	口径 8.5 器高 2.1	表面の剥離が著しい
26	25	23	弥生土器 壺	SD09	内…ハケ・ナデ 外…指押さえ・ナデ	0.2～2mmの 砂粒を含む	良	淡褐色	口径 21.2	「雲母土器」
27	25	23	弥生土器 甕	SD09	内…指押さえ・ ヘテケズリ 外…タタキ・ナデ	0.5～6mmの 砂粒を含む	良	淡褐色	口径 15.1	「雲母土器」
28	25	23	弥生土器 甕	SD09	内…指押さえ・ ヘラケズリ 外…タタキ・ハ ケ・ナデ	0.5～6mmの 砂粒を含む	良	黄褐色	口径 14.7	外面に黒斑
29	25	23	弥生土器 甕	SD09	内…指押さえ・ ヘラケズリ 外…ハケ・ナデ	0.1～1mmの 砂粒を含む	良	内…濁淡褐色 外…濁明褐色	口径 14.0	表面の剥離が著しい 「雲母土器」
30	25	23	弥生土器 甕	SD09	内…ヘラケズリ・ナデ 外…タタキ・ナデ	0.3～3mmの 砂粒を含む	良	濁淡褐色	口径 14.8	
31	25	23	弥生土器 底部	SD09	内…指押さえ・ ヘラケズリ 外…ハケ	0.3～5mmの 砂粒を含む	良	内…黒色 外…濁褐色	底径 3.7	外面に黒斑 丸味をおびた平底

第6表　遺物観察表③

番号	挿図	図版	器種	出土遺構	成形・調整	胎土	焼成	色調	法量(cm)	備考
32	25	24	弥生土器 鉢	SD09	内…ヘラケズリ・ナデ 外…板ナデ・ナデ	0.3～2㎜の 砂粒を含む	良	濁褐色	口径15.8 器高 5.1	
33	25	24	弥生土器 鉢	SD09	内…ヘラケズリ・ナデ 外…ヘラケズリ・ナデ	0.3～4㎜の 砂粒を含む	良	黄褐色	口径 7.8 器高 4.8	
34	25	24	弥生土器 小型器台	SD09	—	全く砂粒を含 まない・緻密	良	橙褐色	底径 8.9	杯部底に直径3㎜の穿孔 脚部穿孔は2所に認められるが3ヵ所あったらしい
35	25	24	弥生土器 小型器台	SD09	内…指押さえ・ ヘラケズリ 外…ハケ・ナデ	0.2～5㎜の 砂粒を含む	良	濁黄褐色	口径10.6 底径11.7 器高 8.4	脚部の3ヵ所に穿孔
36	25	24	弥生土器 小型器台	SD09	内…ハケ 外…指押さえ・ ヘラケズリ	0.2～1㎜の 砂粒を含む	良	濁淡褐色	底径 13.1	脚部の3ヵ所に穿孔 脚部のみ
39	32	25	弥生土器 甕	SD19	内…指押さえ 外…ナデ	0.2～7㎜の 砂粒を含む	良	白褐色	口径 15.9	磨滅が著しい 底部40と同一個体
40	32	25	弥生土器 底部	SD19	内…指押さえ	0.2～7㎜の 砂粒を含む	良	白褐色	底径 3.2	小さな平坦面をもつ平底 磨滅が著しい
41	32	25	弥生土器 甕	SD19	内…ヘラケズリ・ナデ 外…タタキ・ナデ	0.3～5㎜の 砂粒を含む	良	白褐色	口径 12.8	
42	32		弥生土器 甕	SD19	—	0.2～3㎜の 砂粒を含む	良	茶褐色	口径 17.8	表面の剥離が著しい 「雲母土器」
45	41	26	土師質土器 羽釜	SD24	内…ナデ 外…ハケ・ナデ	0.3～1㎜の 砂粒を含む	良	内…暗黄褐色 外…淡黄褐色	口径 21.0	
46	41	26	須恵器 こね鉢	SD24	内…回転ナデ 外…回転ナデ	0.2～1㎜の 砂粒を含む	良	青灰色	—	東播系
47	41	26	土師質土器 擂鉢	SD24	内…回転ナデ 外…回転ナデ	0.1～1㎜の 砂粒を含む	良	茶褐色	—	備前か堺産？
48	41	26	陶器 甕	SD24	内…回転ナデ 外…回転ナデ	0.5～1㎜の 砂粒を含む	良	暗茶褐色	—	備前焼 口縁端部に自然釉が付着

第7表　遺物観察表④

番号	挿図	図版	器　種	出土遺構	成形・調整	胎　土	焼成	色　調	法量(cm)	備　考
49	41	26	陶胎染付 椀	SD24	—	精良	良	胎土…灰色 釉…青灰釉	口径 9.6	貫入
50	41	26	陶胎染付 椀	SD24	—	精良	良	胎土…暗灰色 釉…青灰釉	口径 7.8 器高 4.8	貫入
51	41	26	陶　器 受皿	SD24	内…回転ナデ 外…回転ナデ	精良	良	茶褐色	底径 4.5	底部は糸切り　備前系か？ 内面には化粧土？が残る 灯明具の受皿
52	41	27	磁　器 椀	SD24	—	精良	良	胎土…灰白色 釉…青灰釉	口径11.4 底径 3.4 器高 3.8	内面見込み部は蛇の目釉剥ぎ 高台畳付け部は無釉
53	41	26	磁　器 椀	SD24	—	精良	良	胎土…灰白色 釉…青灰釉	口径 9.7	菊花文
54	41	26	磁　器 椀	SD24	—	精良	良	胎土…灰白色 釉…青灰釉	口径 10.0	二重網目文　肥前系 呉須の発色が悪い
55	41	26	磁　器 椀	SD24	—	精良	良	胎土…白色 釉…青灰釉	底径 3.2	呉須の発色が悪い
56	41	27	陶　器 椀	SD24	—	精良	良	胎土…濁白色 釉 内…透明釉 外…茶黒色釉	高台径 4.8	瀬戸美濃系「掛け分け椀」 高台畳付け部は無釉 貫入
57	41	27	磁　器 皿	SD24	—	精良	良	胎土…灰白色 釉…青色釉	口径 19.0	伊万里
58	41	27	陶　器 皿	SD24	—	精良	良	胎土…灰色 釉…白色釉	高台径 4.0	砂目積み　削り出し高台 内面の釉は溶けきっていない 外面は無釉
59	41	27	磁　器 皿	SD24	—	精良	良	胎土…灰白色 釉 内…青色釉 外…緑色釉	高台径 5.6	青磁染付 高台畳付け部は無釉
60	30	28	軒丸瓦	SD26	—	細砂粒を含む	良	黒褐色	—	瓦当

第8表　遺物観察表⑤

番号	挿図	図版	器種	出土遺構	成形・調整	胎土	焼成	色調	法量(cm)	備考
61	44	28	陶器 壺	SK16	内…回転ナデ 外…回転ナデ	0.3～1mmの砂粒を含む	良	暗茶褐色	—	肩部に櫛描き波状文
62	51		弥生土器 底部	包含層	—	1～5mmの砂粒を含む	良	濁褐色	底径 3.5	甕の底部か？
63	51	29	弥生土器 甕	包含層	内…指押さえ・ナデ	0.3～2mmの砂粒を含む	良	内…淡黒色 外…淡橙褐色	口径 17.8	外面に黒斑
64	51	30	土師器 小皿	表土	—	0.2～1mmの砂粒を含む	良	淡橙褐色	口径 7.2 底径 4.9 器高 1.4	底部ヘラ切り
65	51	30	黒色土器 椀	包含層	内…回転ナデ 外…回転ナデ	ほとんど砂粒を含まない	良	内…黒色 外…淡白褐色	口径 12.6	内面に炭化物が付着する
66	51	30	磁器 椀	床土	—	精良	良	胎土…白灰色 釉…緑色釉	口径 8.6	肥前系 二重網目文
67	51	30	磁器 椀	床土	—	精良	良	胎土…白灰色 釉…透明釉	口径 8.9	
68	51	30	磁器 椀	床土	—	精良	良	胎土…白灰色 釉…透明釉	口径 9.8	
69	51	30	陶胎染付 椀	床土	—	精良	良	胎土…白灰色 釉…透明釉	—	呉須の発色が悪い 貫入
70	51	30	陶器 椀	攪乱土	—	精良	良	胎土…淡茶色 釉 内…緑色釉 外…無釉	—	削り出し高台　貫入 内面見込み部に蛇の目釉剥ぎ
71	51	30	磁器 皿	床土	—	精良	良	胎土…白灰色 釉…透明釉	底径 8.6	高台畳付け部は無釉 外面の呉須の発色が悪い

第9表　遺物観察表⑥（石製品）

番号	構図	図版	器　種	出土遺構	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材　質	備　　考
7	13	20	石　鏃	SD01	2.4	1.5	0.4	2.3	サヌカイト	―――
8	13	20	石　錐	SD01	4.6	2.8	0.6	7.7	サヌカイト	先端をわずかに欠損
9	13	20	スクレイパー	SD01	4.9	3.1	1.1	19.4	サヌカイト	―――
10	13	20	スクレイパー	SD01	8.0	3.5	1.1	36.6	サヌカイト	―――
23	21	25	打製石斧	SD07	3.0	5.3	1.4	33.1	サヌカイト	先端部・基部を欠く
37	28	25	打製石斧	SD12	5.4	7.1	1.3	77.0	サヌカイト	先端部のみ遺存　磨滅痕が残る
38	28	25	スクレイパー	SD12	7.3	4.9	1.0	41.7	サヌカイト	―――
43	33	25	打製石斧	SD19	3.6	4.8	1.2	20.5	サヌカイト	先端部のみ遺存
44	34	25	打製石斧	SD20	3.8	4.5	1.3	26.9	サヌカイト	先端部のみ遺存　磨滅痕が残る
72	52	31	石　鏃	攪乱土	2.1	1.8	0.3	2.4	サヌカイト	基部の一部を欠く
73	52	31	打製石斧	包含層	2.9	5.3	1.0	16.9	サヌカイト	先端部のみ遺存　磨滅痕が残る
74	52	31	打製石斧	包含層	6.9	5.9	1.1	63.7	サヌカイト	基部のみ遺存
75	52	31	打製石斧	床土	4.0	9.9	1.7	34.6	サヌカイト	先端部のみ遺存　磨滅痕が残る スポールの可能性

第10表　溝状遺構一覧表

SD	規模（m）			方向	遺物	時期	旧番号		備考
	検出長	天幅	深さ						
01	23.0	1.30	0.44	N147°W	突帯文土器 弥生土器 石器	縄文時代晩期 弥生時代前期	A1	SD01	SD07とつながる 「環濠」の可能性 SR01とつながる
02	6.6	0.46	0.10	N21°W	—	—	A1	SD03	条里関連の溝？
03	20.0	0.68	0.20	N81°W	弥生土器 石器	弥生時代後期	A2	SD01	途中SD04と分岐
04	8.5	0.38	0.12	N58°W	弥生土器	弥生時代後期	A2	SD02	SD03から分岐
05	5.8	0.32	0.10	N32°W	弥生土器	弥生時代	A2	SD03	SD07を切る
06	14.1	0.64	0.10	N31°W	—	—	A2	SD04	条里関連の溝？
07	19.2	2.40	0.56	N123°W	突帯文土器 弥生土器 石器	縄文時代晩期 弥生時代前期	A2	SD05	SD12とつながる 「環濠」の可能性
08	11.2	0.46	0.06	—	弥生土器	弥生時代後期	A2	SD06	ほぼ直角に屈曲する
09	9.7	1.22	0.30	N108°W	弥生土器	弥生時代後期	A2	SD07	SD19とつながる
10	6.7	0.60	0.43	N58°W	弥生土器	弥生時代	A2	SD08	
11	5.5	0.44	0.10	N27°W	—	—	A2	SD09	SD14とほぼ並行 条里関連の溝？
12	13.7	—	0.5以上	—	弥生土器 石器	弥生時代前期	A2	SD10	SD20とつながる 「環濠」の可能性
13	0.9	0.30	0.10	N11°W	—	—	A2	SD11	
14	5.1	0.54	0.13	N28°W	須恵器	古代末～中世	A2	SD12	SD11とほぼ並行 条里関連の溝？
15	17.8	0.80	0.20	N78°W	弥生土器	弥生時代	B1	SD01	緩やかに弧を描く
16	6.8	0.50	0.08	N31°W	—	—	B1	SD02	SD17とほぼ並行 条里関連の溝？
17	2.2	0.43	0.08	N40°W	—	—	B1	SD03	SD16とほぼ並行 条里関連の溝？
18	11.7	0.62	0.17	N94°W	—	弥生時代？	B1	SD04	SD19るとつながる
19	13.7	0.80	0.32	N109°W	弥生土器 石器	弥生時代後期	B1	SD05	SD09とつながる
20	7.3	2.90	0.70	N56°W	弥生土器 石器	弥生時代前期	B1	SD06	SD12とつながる 「環濠」の可能性
21	(4.7)	1.4以上	0.6以上	(N33°W)	—	—	B1	SD07	条里関連の溝？ 坪界の可能性？
22	6.6	0.25	0.07	N24°W	弥生土器？	弥生時代？	B2	SD01	削平が著しく痕跡のみ
23	20.0	0.68	0.22	N29°W	弥生土器？	弥生時代？	B3	SD01	—
24	8.5	0.75	0.60	N66°W	土師器・須恵器 陶磁器	中・近世	B3	SD02	条里関連の溝？
25	5.8	0.32	0.05	N73°W	—	—	B3	SD03	削平が著しく痕跡のみ
26	14.1	—	0.12	—	軒丸瓦・磁器	中・近世	C	SD01	溝状の落ち

第11表　土坑一覧表

SK	規模（m）			形状	遺物	時期	旧番号	備考
	長径	短径	深さ					
01	1.5	0.8	0.12	楕円形	—	—	A1　SK01	
02	1.8	0.7	0.10	楕円形	突帯文土器	縄文時代晩期	A1　SK02	
03	0.8	0.7	0.10	正円形	—	—	A1　SK03	
04	1.2	0.8	0.10	不整長方形	—	—	A1　SK04	
05	2.1	1.1	0.10	不定形	—	—	A1　SK05	
06	1.9	0.7	0.30	楕円形	—	—	A2　SK01	
07	2.6	0.7	0.10	不定形	—	—	A2　SK02	
08	3.4	0.7	0.10	不整三角形	—	—	A2　SK03	
09	1.9	0.6	0.10	不定形	—	—	A2　SK04	
10	3.8	0.9	0.10	細長長方形	—	—	A2　SK05	
11	1.0	0.5	0.10	不整長方形			A2　SK06	
12	1.6	1.4	0.51	正円形	土師質土器 陶器	中・近世	B1　SK01	
13	0.5	0.5	—	正円形	—	—	B2　SK01	
14	1.7以上	1.2以上	0.90	楕円形？	—	—	B2　SK02	
15	1.4	1.2	0.40	隅丸方形	—	—	B2　SK03	
16	1.3	1.1	0.41	隅丸方形	土師質土器 陶器	中・近世	B3　SK01	
17	1.3以上	0.4以上	0.60以上	隅丸方形	—	—	B3　SK02	
18	0.5	0.4	0.10	正円形	—	—	B3　SK03	
19	0.3	0.3	0.10	正円形	—	—	B3　SK04	
20	0.5	0.3	0.10	楕円形	—	—	B3　SK05	
21	0.9以上	0.7	0.20	楕円形	—	—	B3　SK06	
22	—	—	—	楕円形	—	—	C　SK01	
23	—	0.6以上	0.52以上	楕円形？	陶磁器	中近世	C　SK02	

図　　版

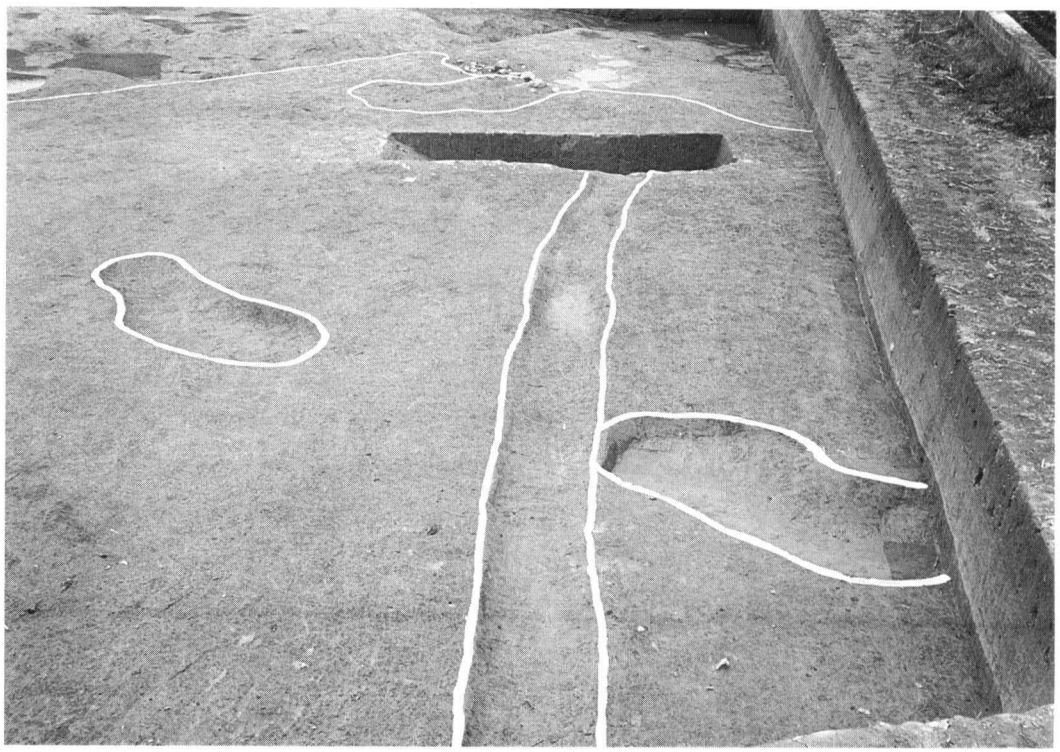
(1)　道下遺跡調査区遠景①

(2)　道下遺跡調査区遠景②

(1)　道下遺跡調査区遠景③

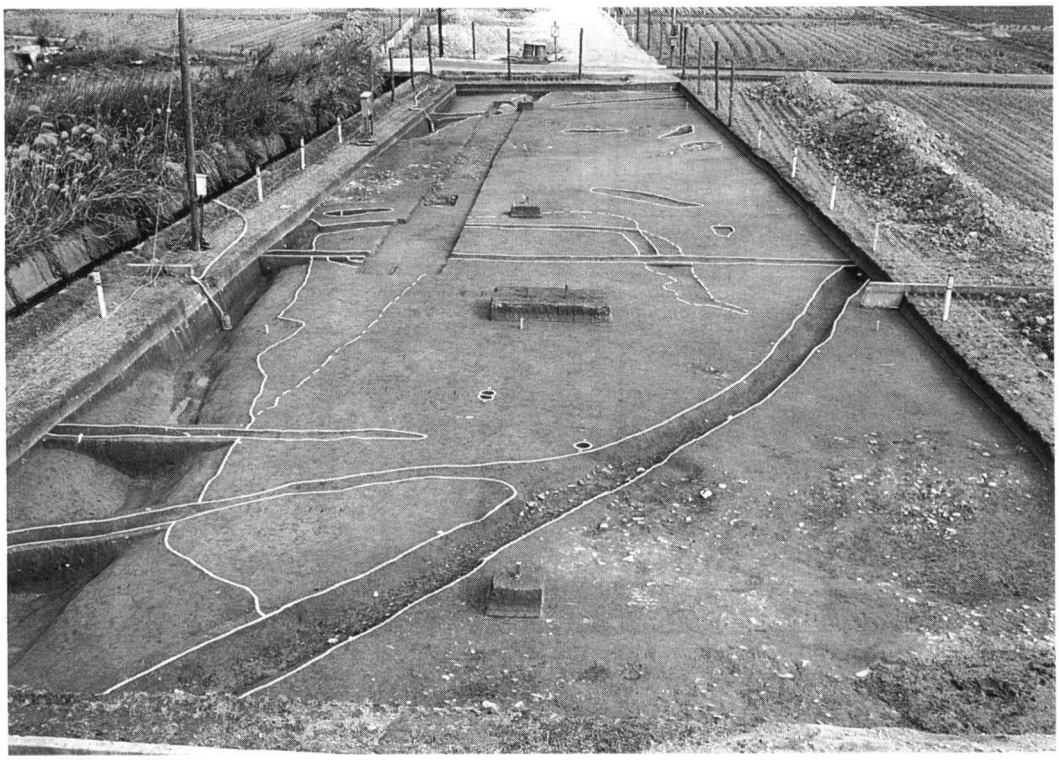
(2)　A1全景（東より）

(1) SD01全景（北東より）

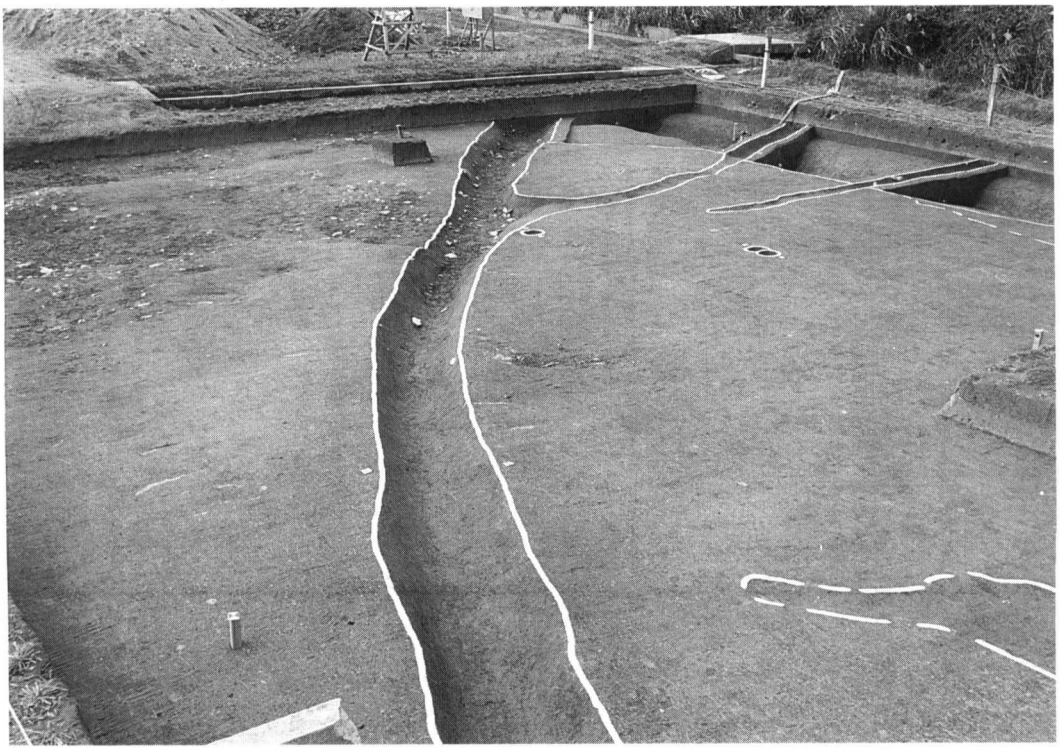


(2) SD02・SK01・02全景（北より）

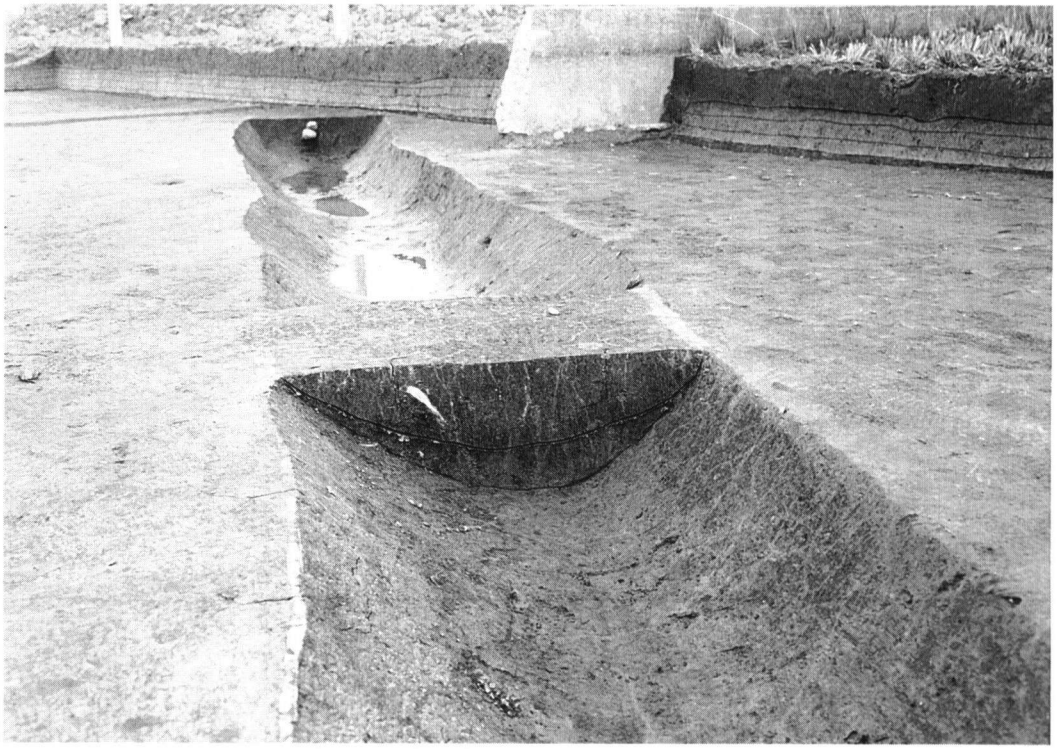
図版 4



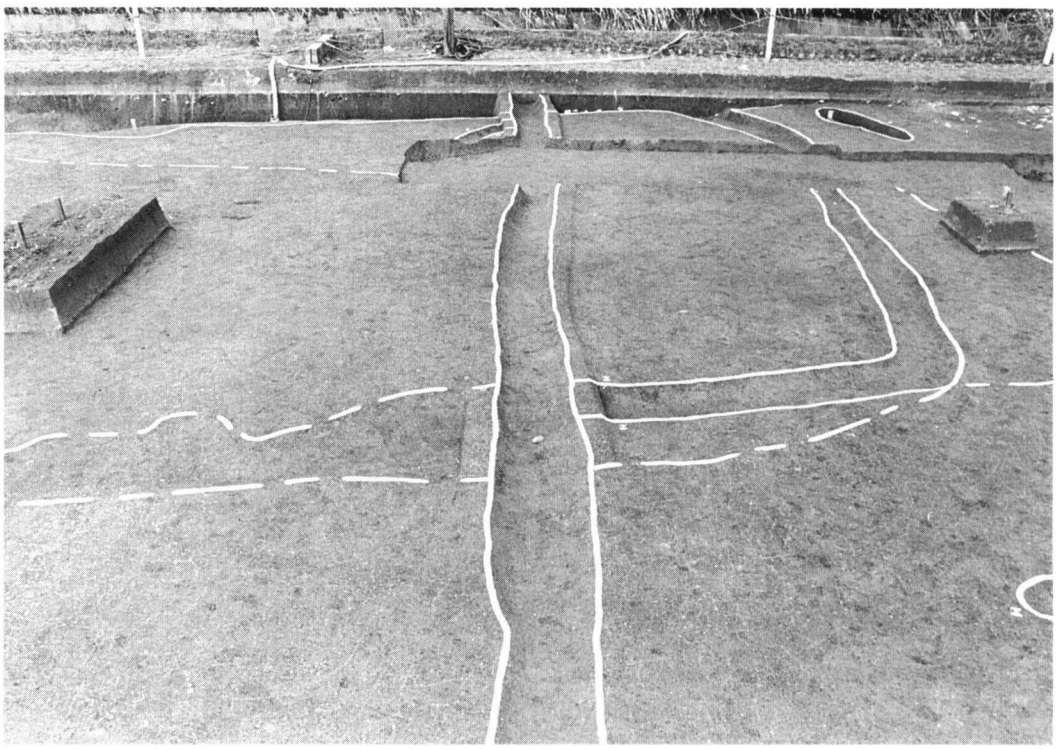
(1)　A2全景（西より）



(2)　SD03全景（南東より）

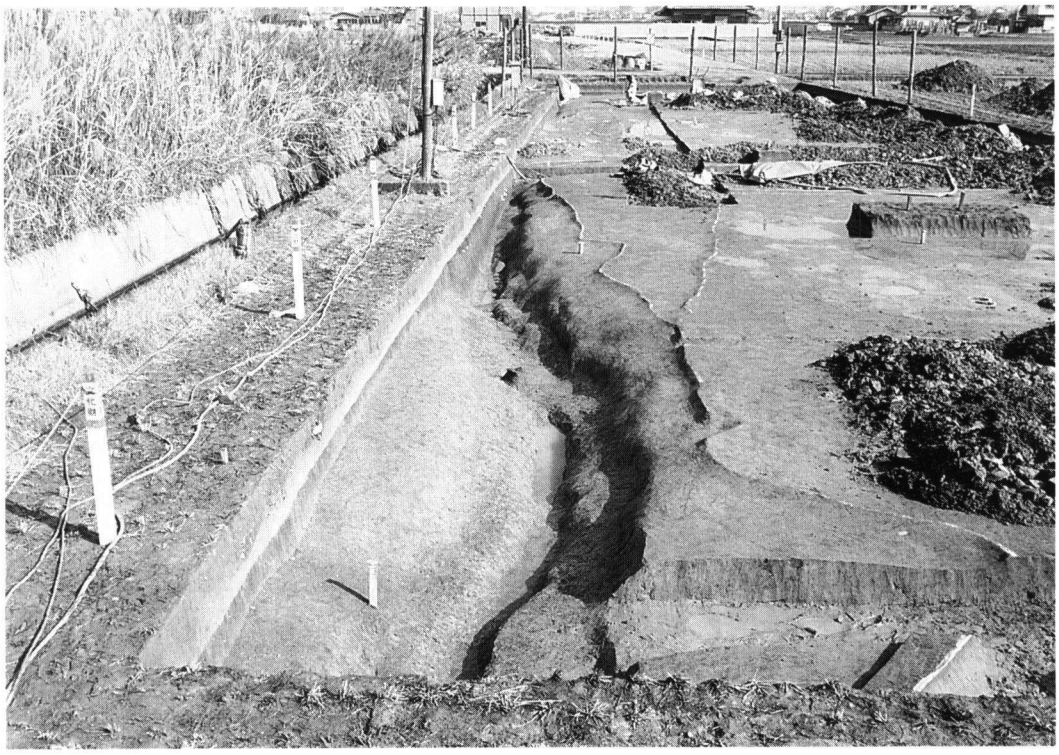


(1) SD03土層断面図（北西より）

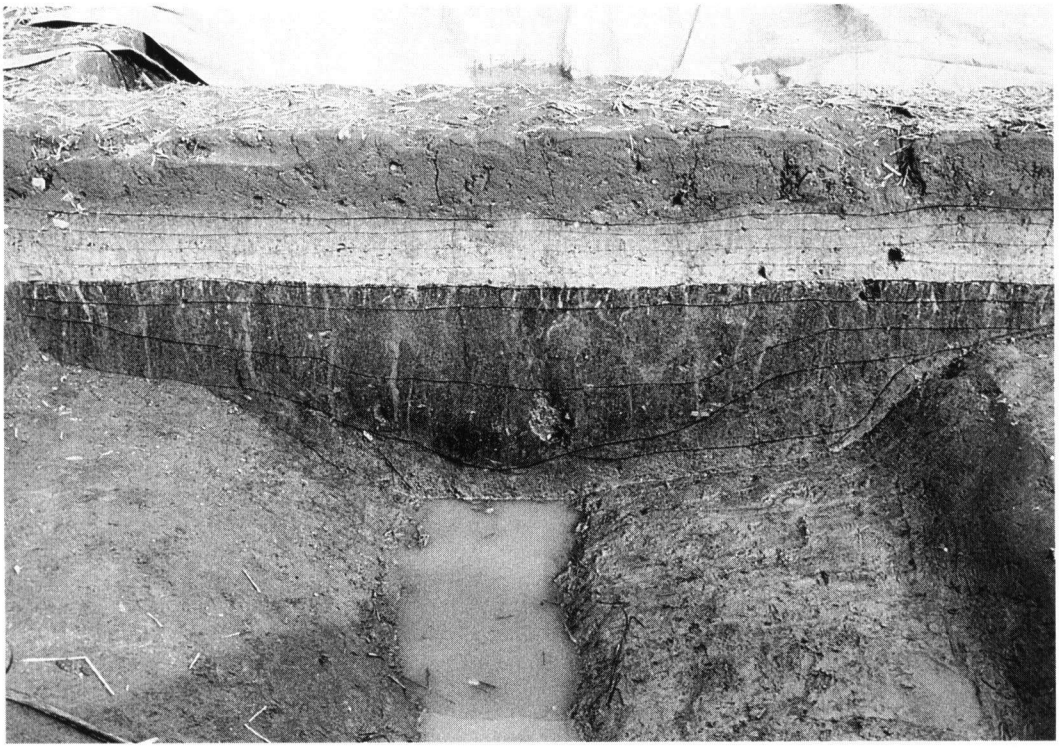


(2) SD06・08全景（南より）

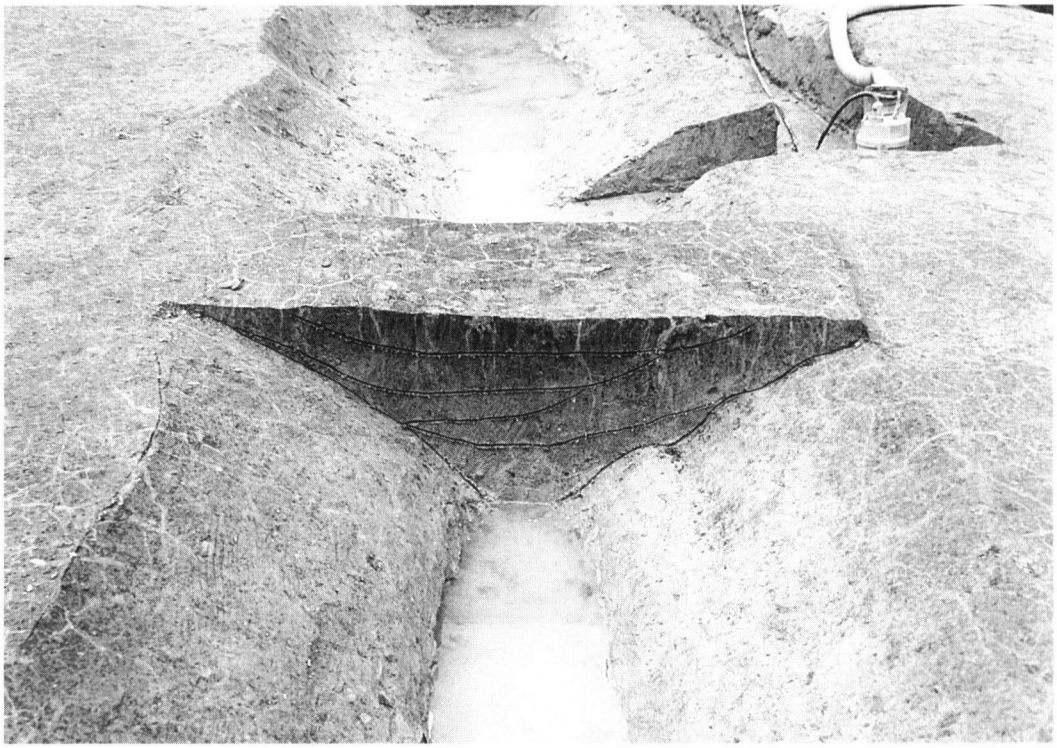
図版 6



(1)　SD07全景（西より）

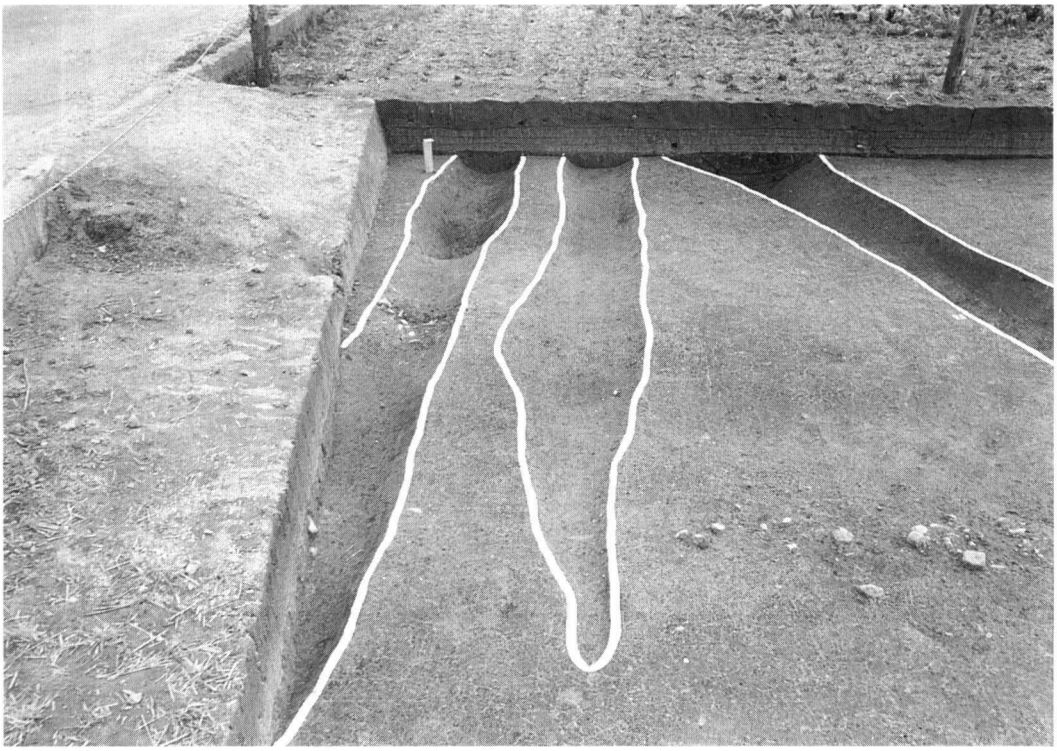


(2)　SD07土層断面（西より）

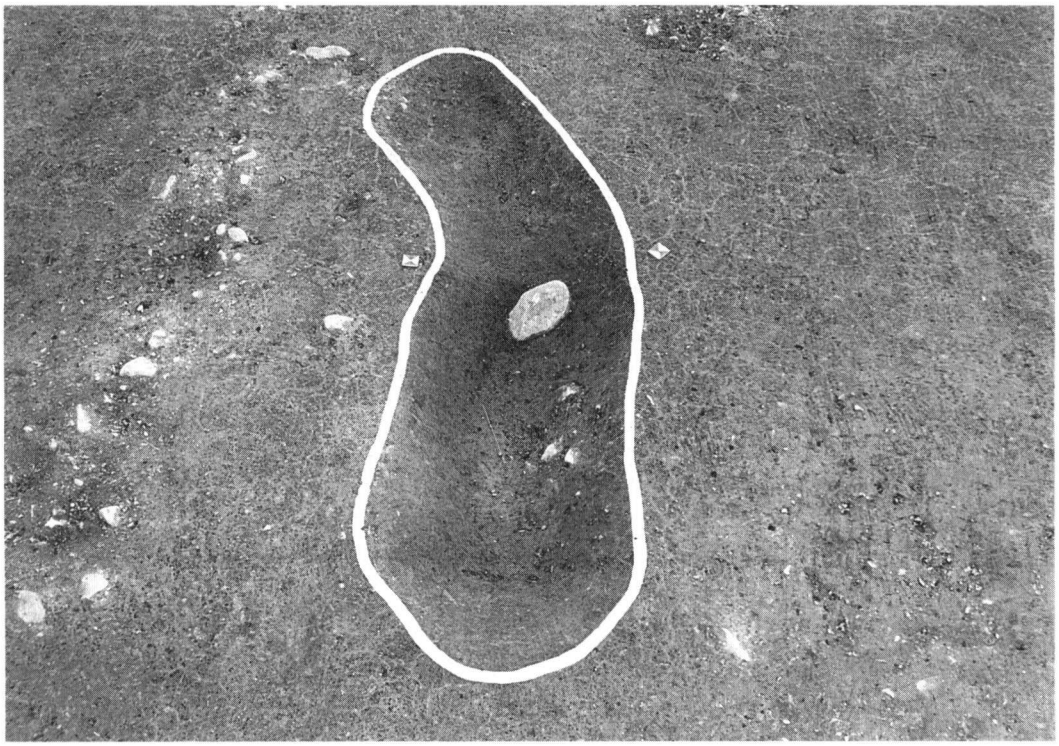


(1)　SD09土層断面（東より）

(2)　SD09遺物出土状況

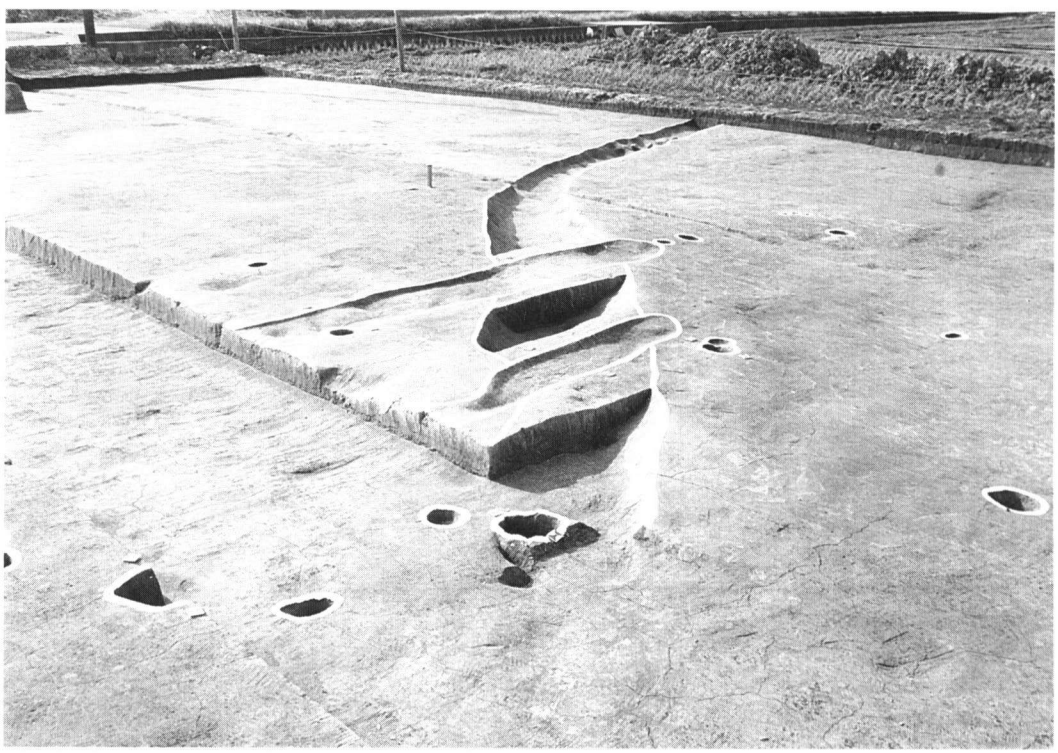


(1) SD10・11・14全景（北より）



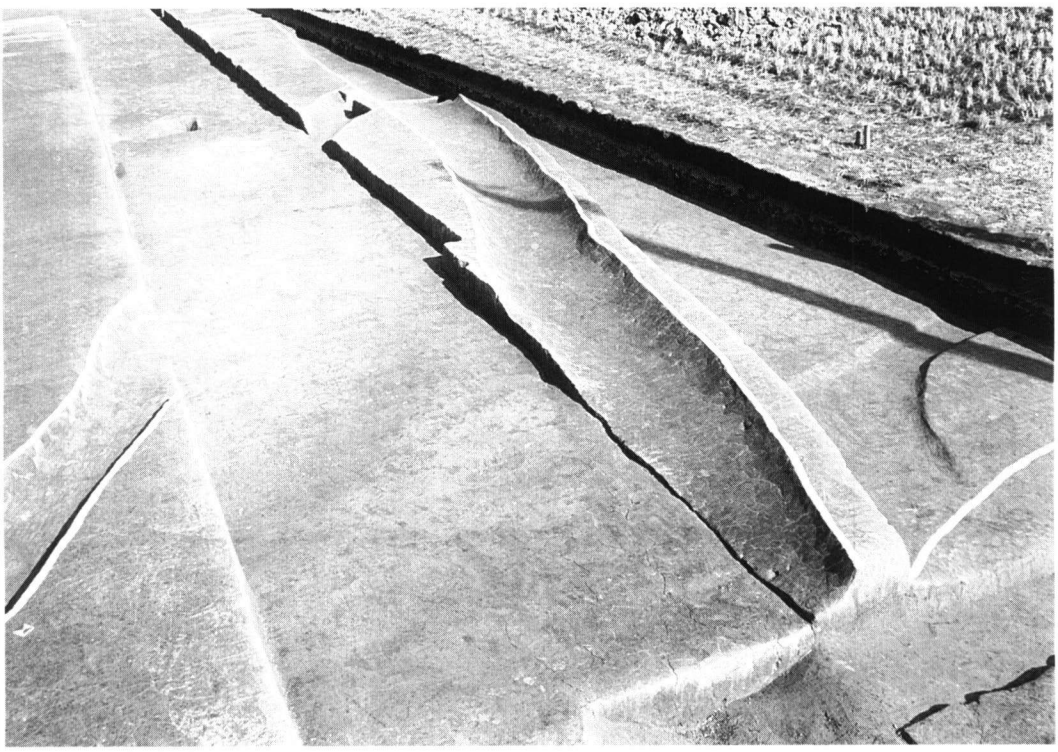
(2) SK09全景（北より）

(1) B1全景（東より）

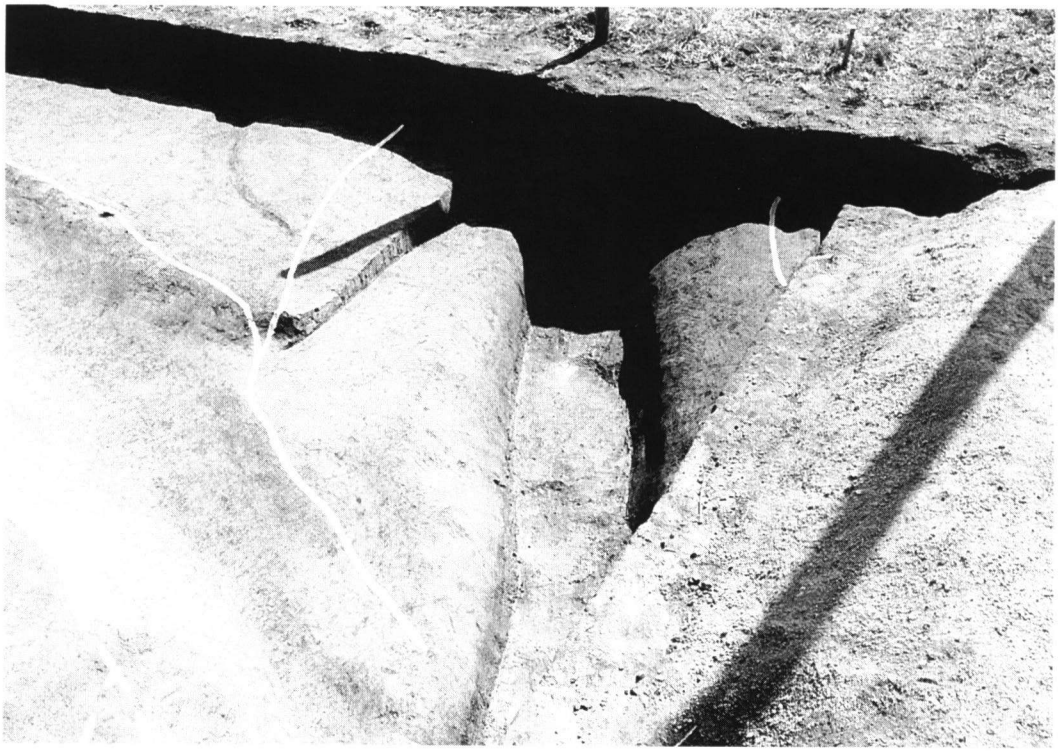


(2) SD15全景（南東より）

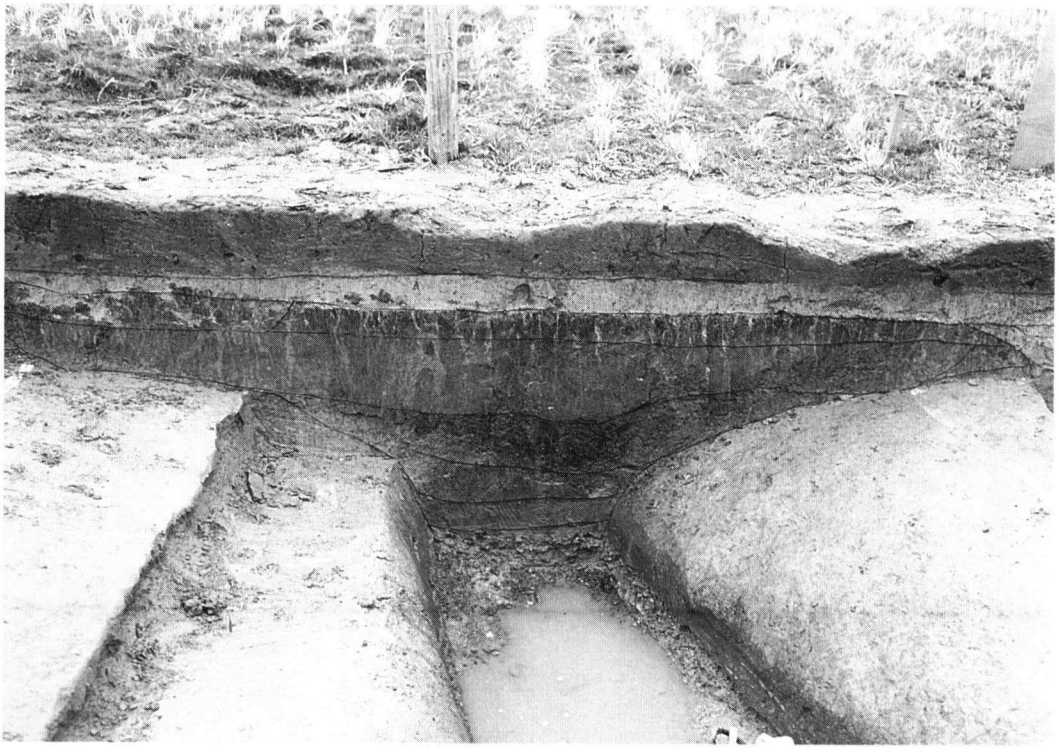
(1) SD16・17全景（南より）



(2) SD19全景（西より）



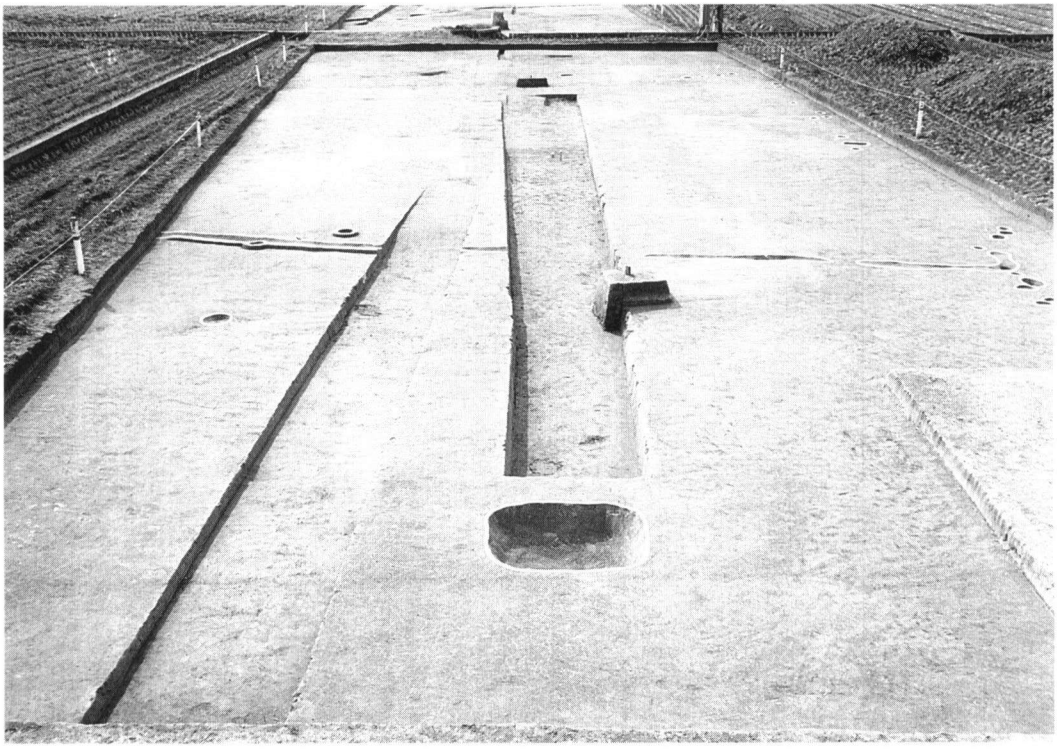
(1) SD20全景（北西より）



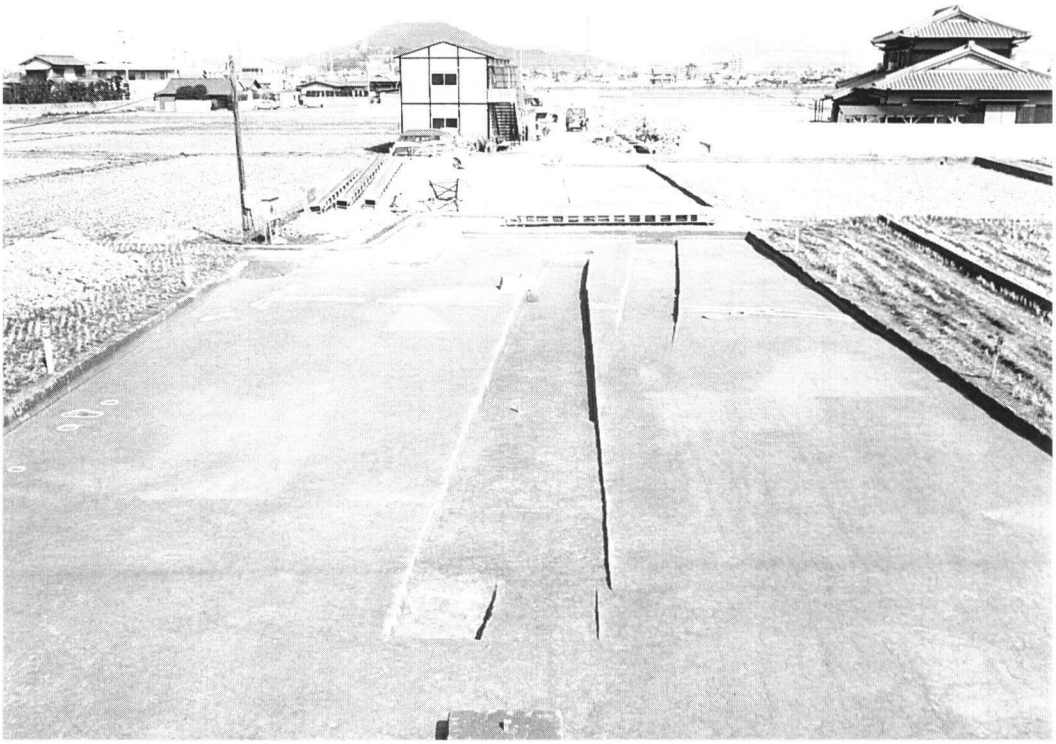
(2) SD20土層断面（北より）

図版12

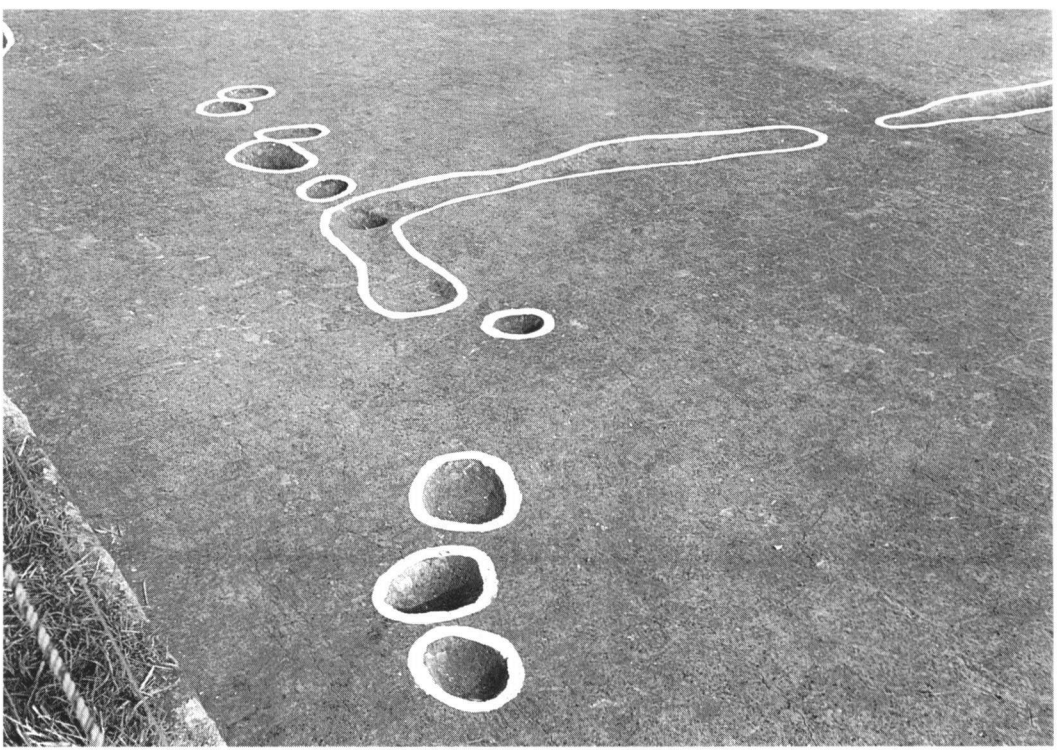
(1) SD21土層断面（北より）



(2) B2全景（東より）



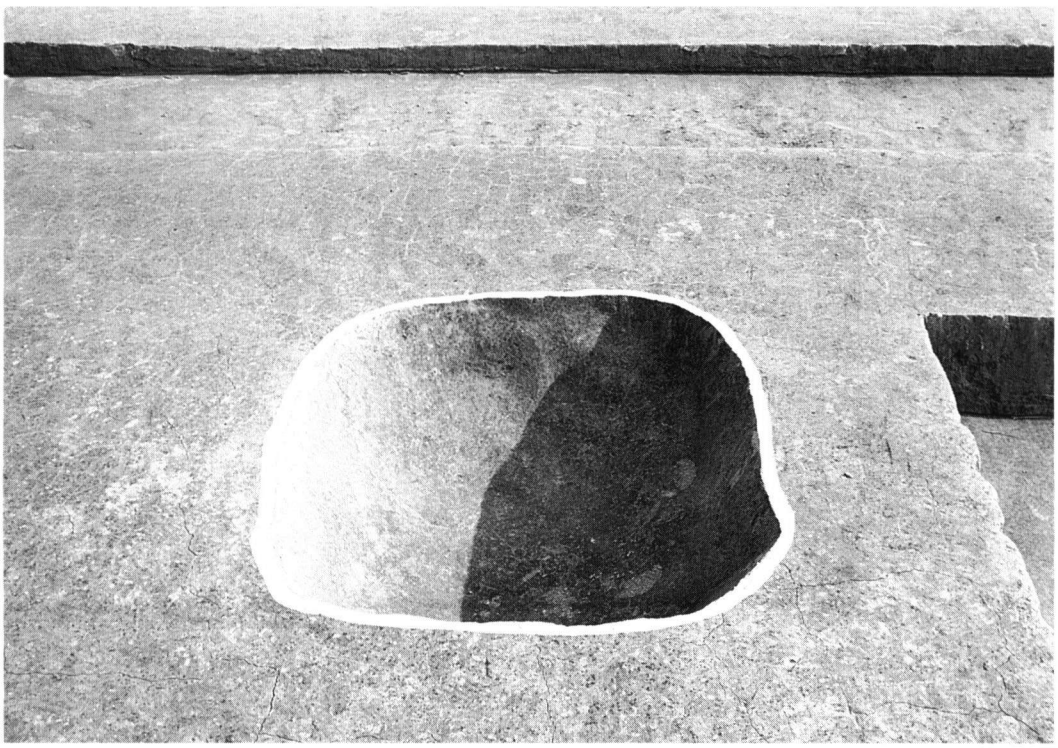
(1) B2全景（西より）



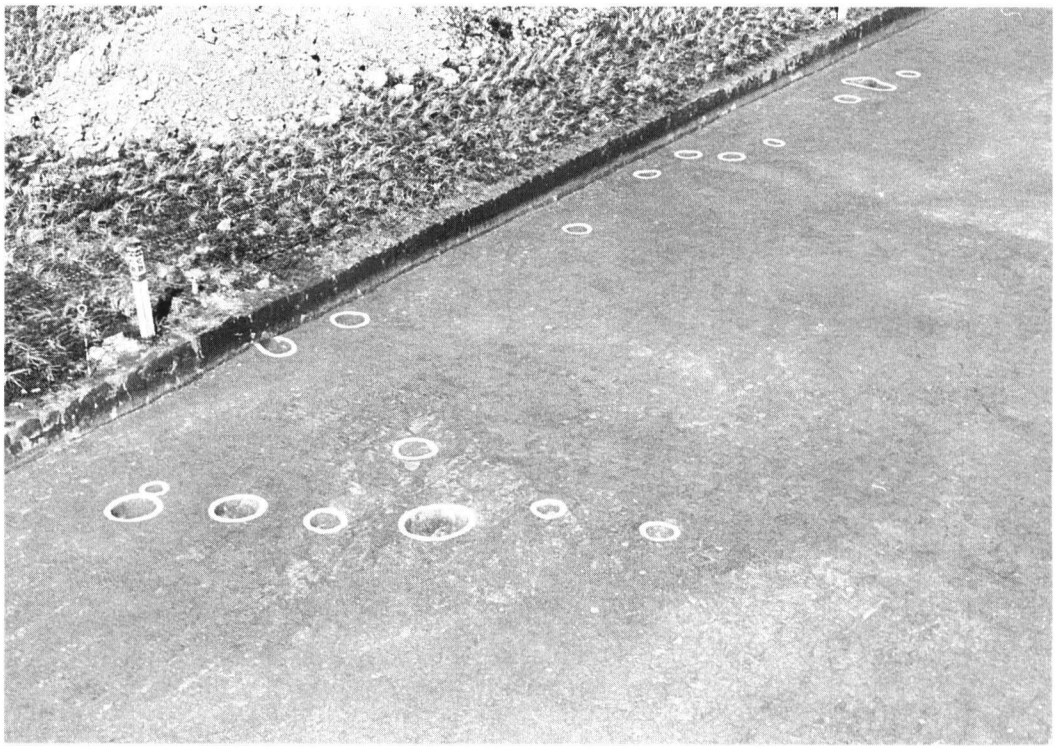
(2) SD22・ピット群（北西より）

図版14

(1) SK14全景（南より）



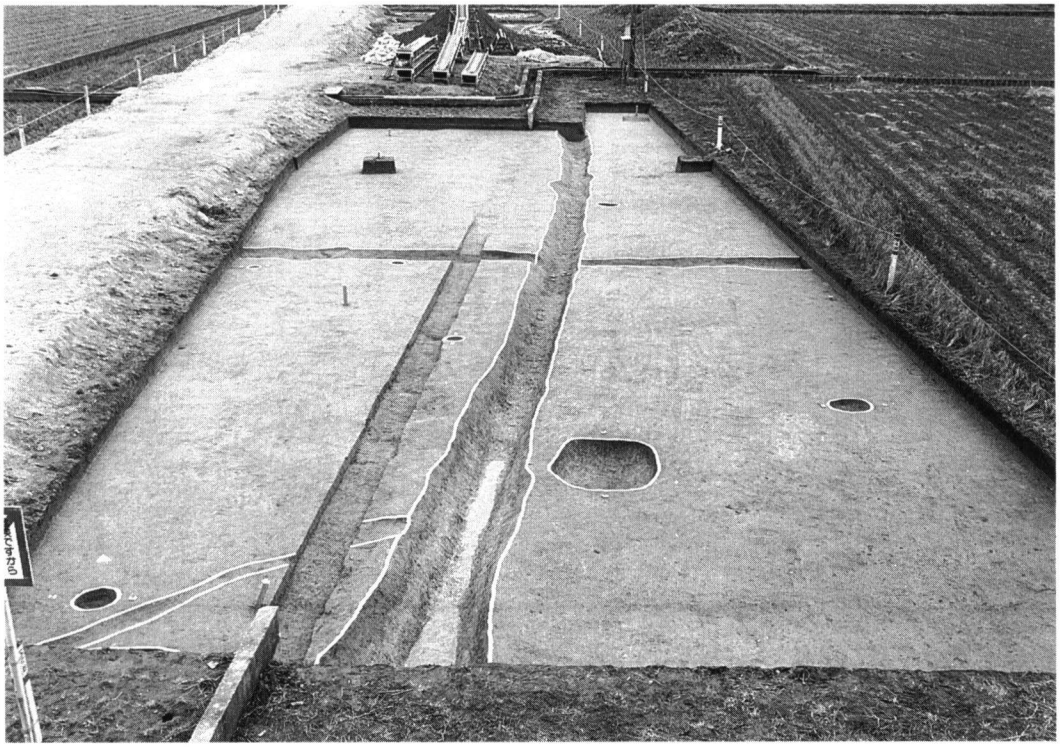
(2) SK15全景（北より）



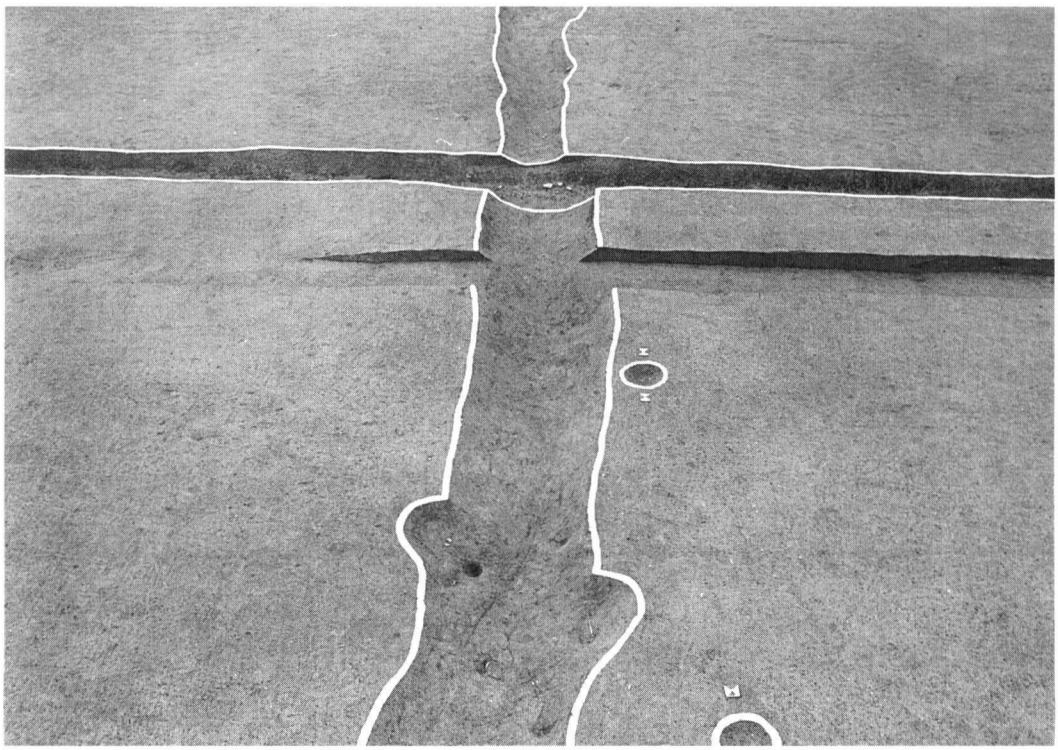
(1)ピット群（南西より）

(2) B3南半部全景（東より）

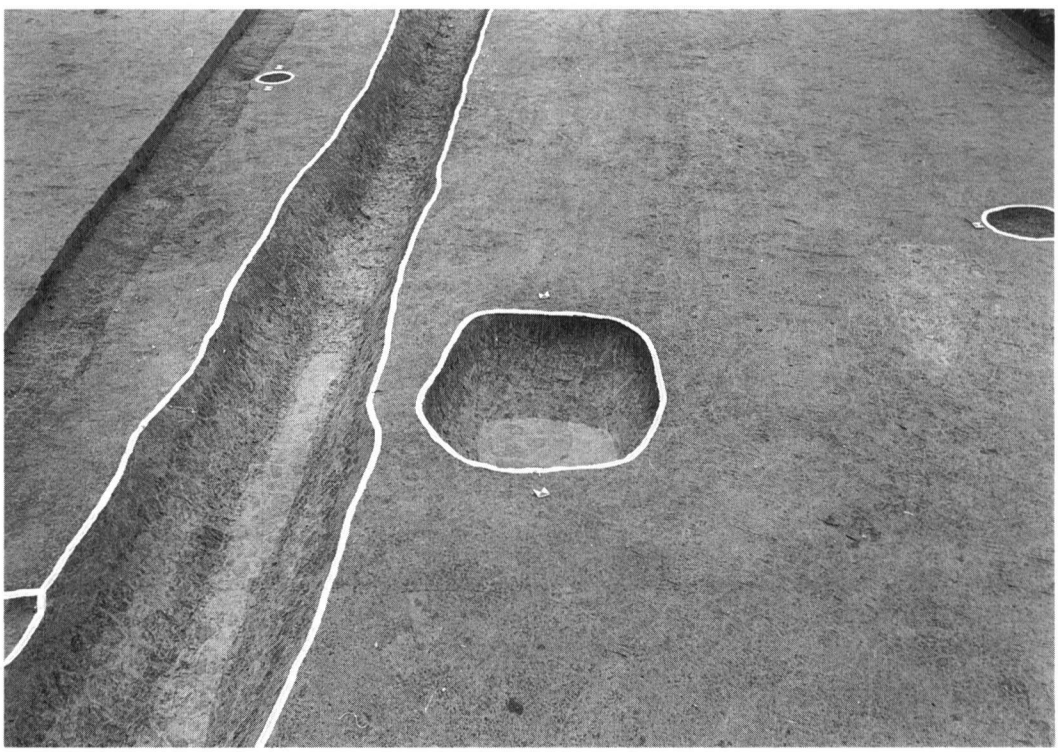
(1) B3南半部全景（北東より）



(2) B3北半部全景（東より）

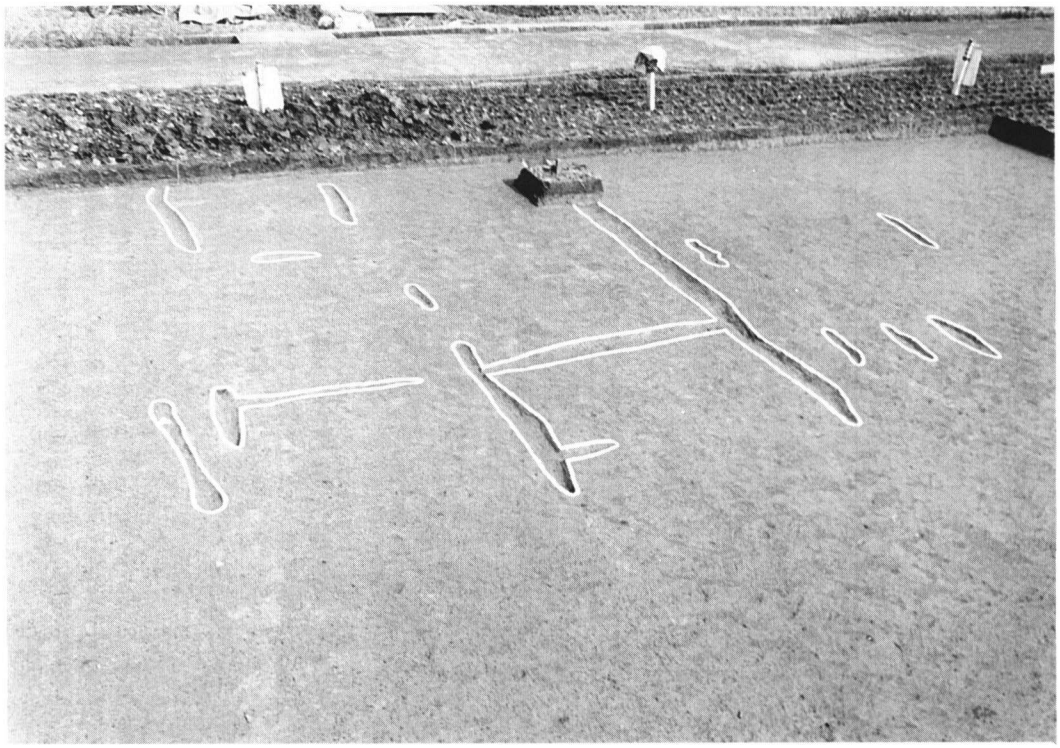


(1) SD23全景（南より）



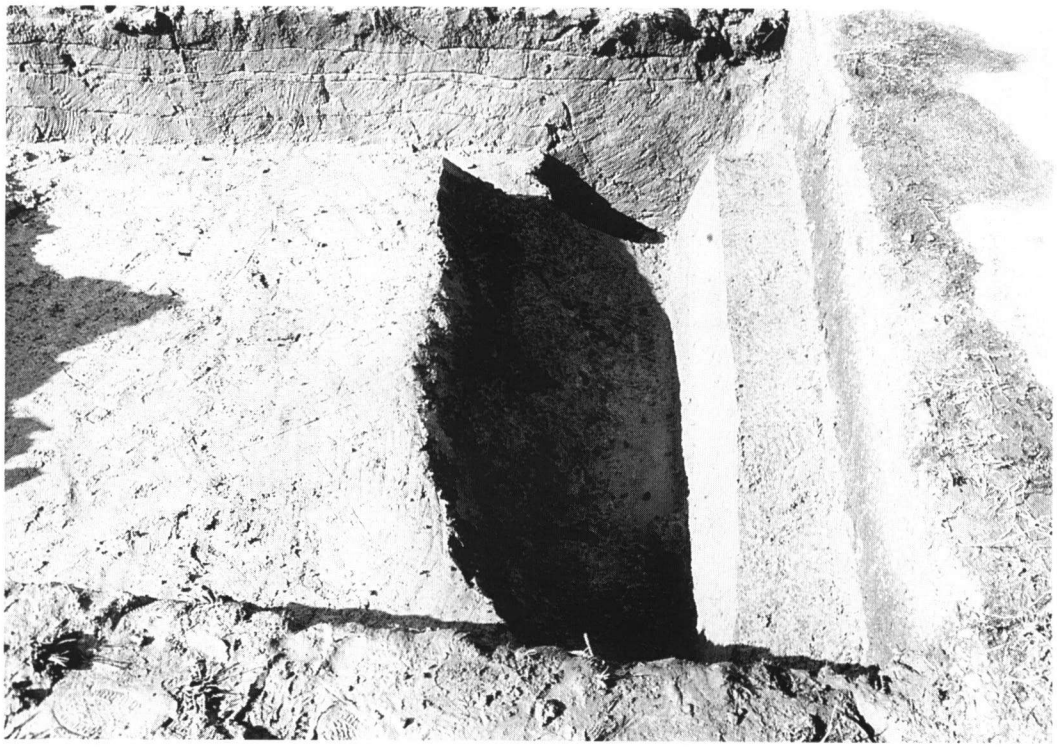
(2) SK16全景（東より）

(1)　SK21全景（北より）

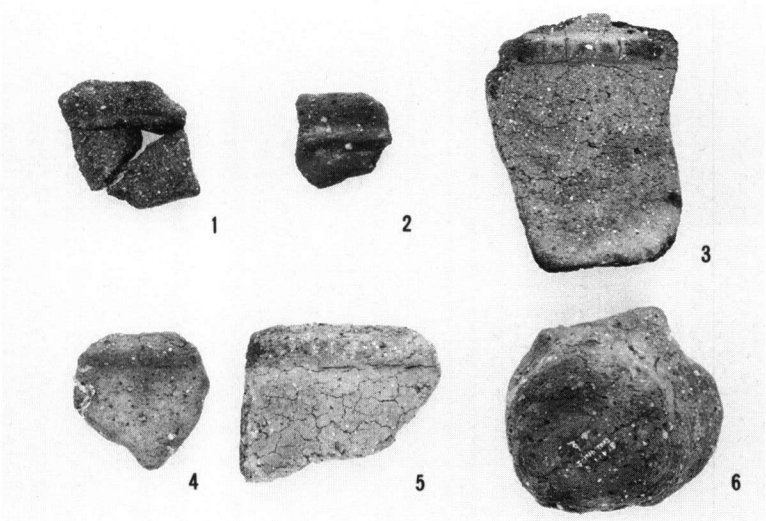


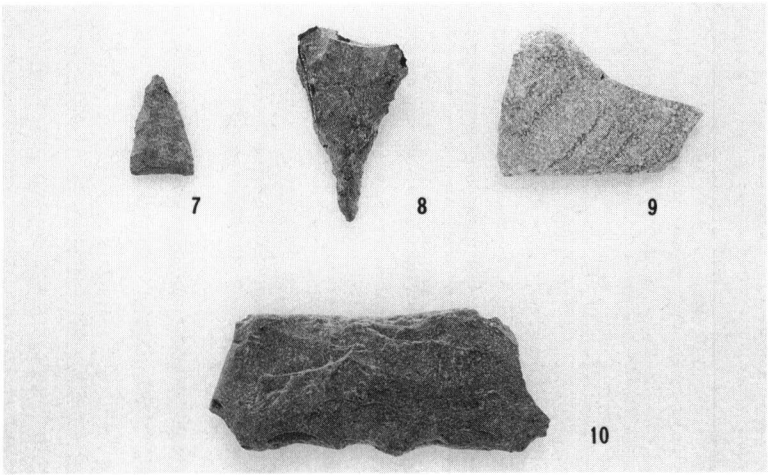
(2)C区　SX02全景（北西より）

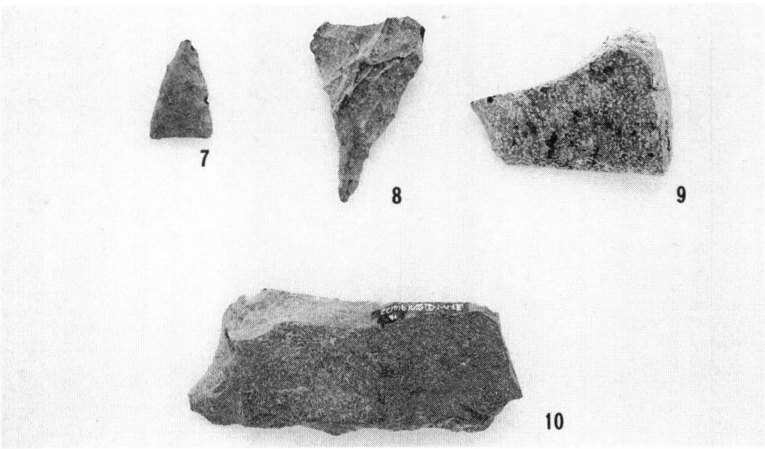
(1) SD26全景（西より）



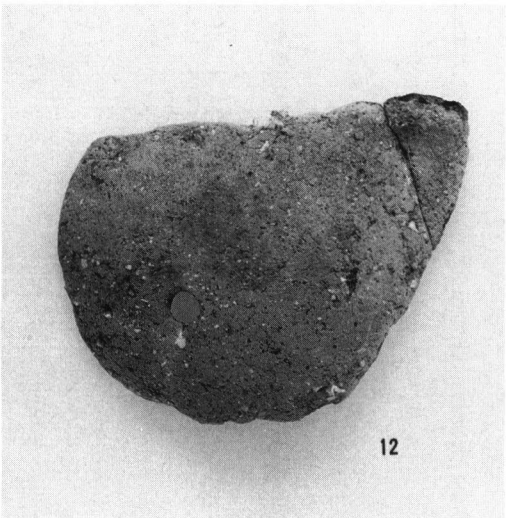
(2) SK23全景（南より）



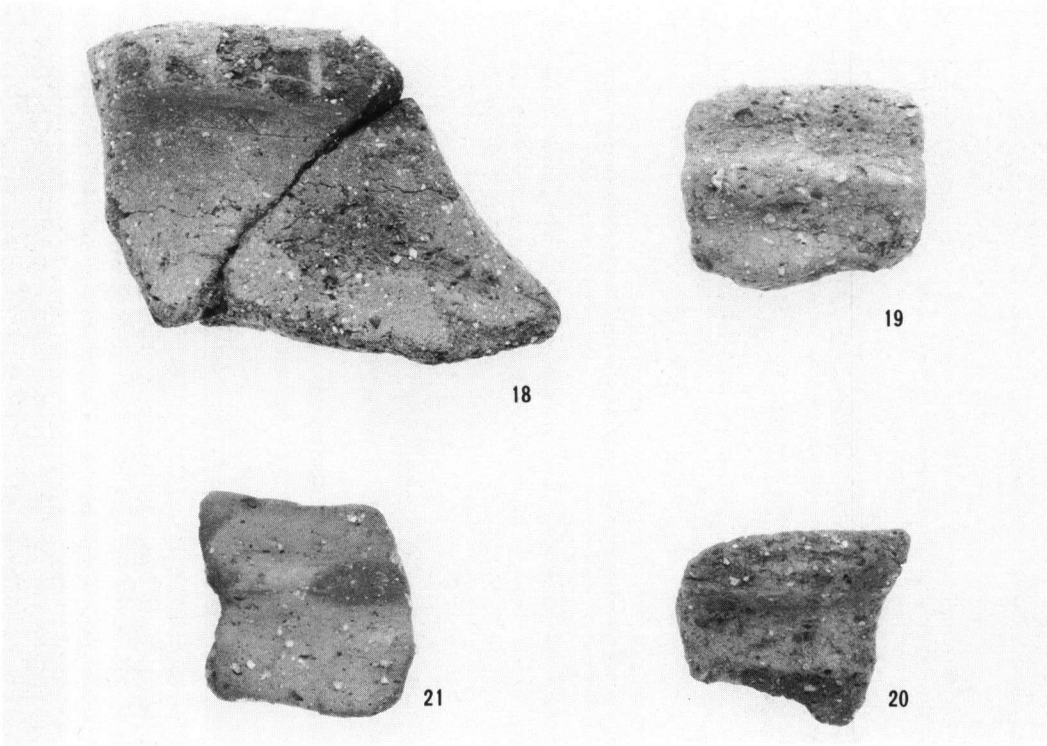




SD01・　SR01出土遺物



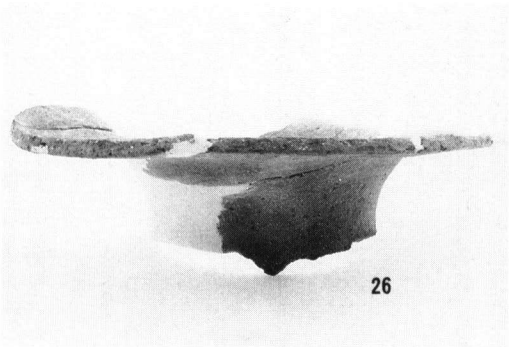
SD03出土遺物

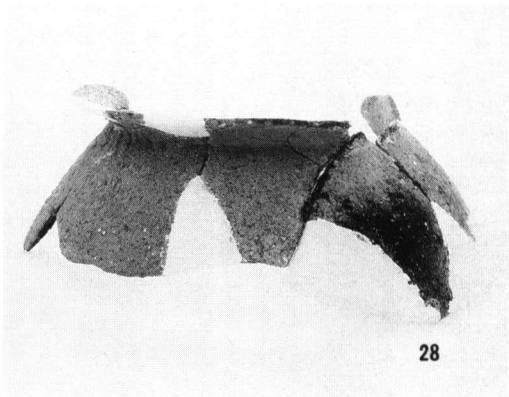


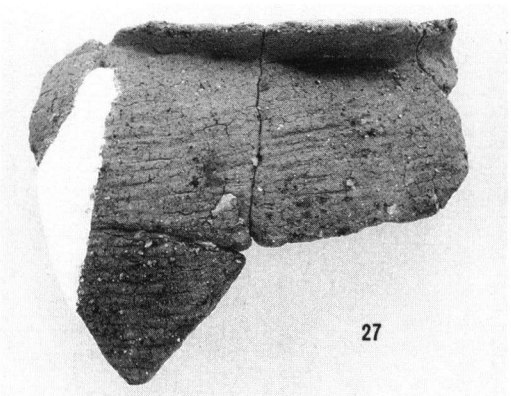
(1)　SD07出土遺物

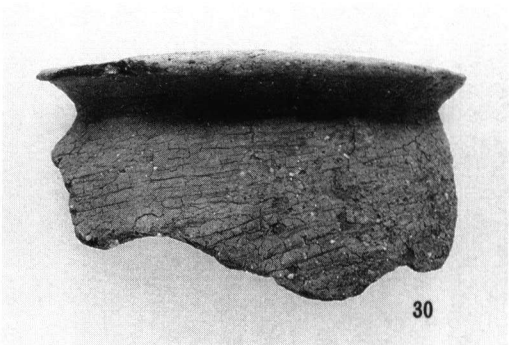
(2)　SD04出土遺物

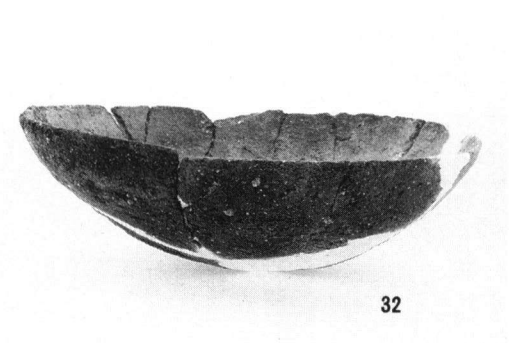
(3)　SD08出土遺物

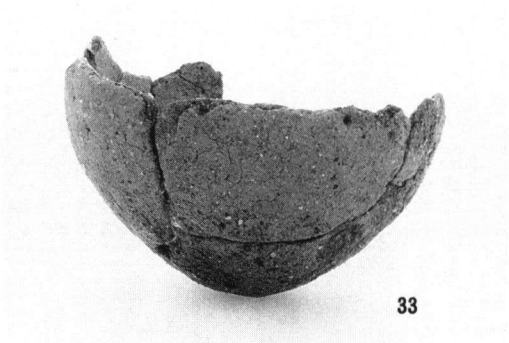




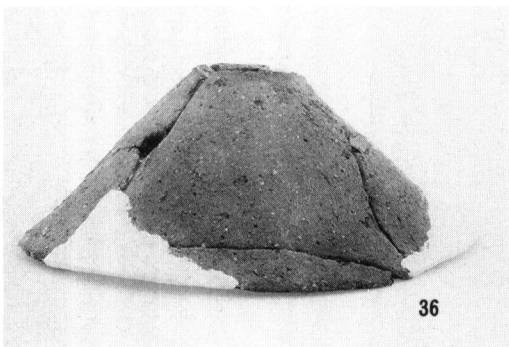


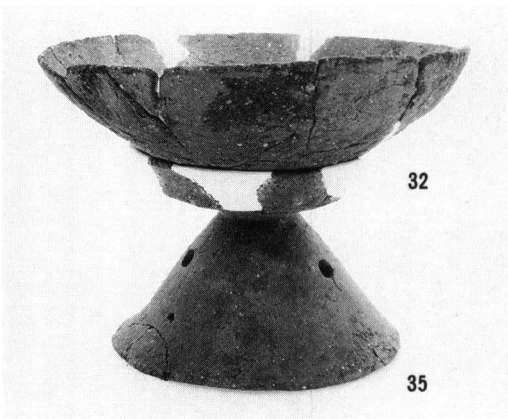


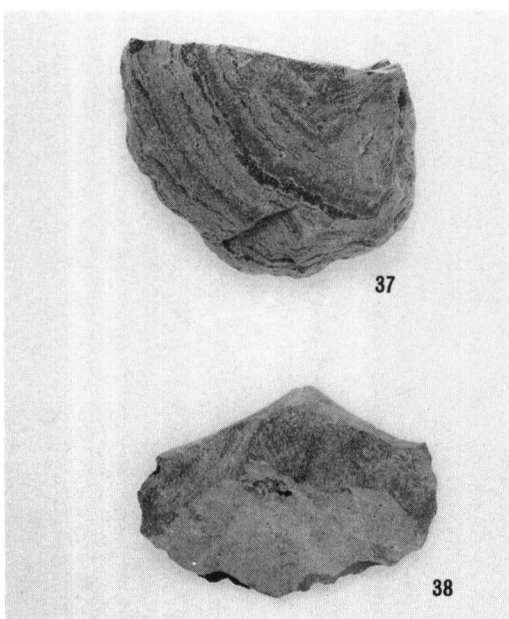


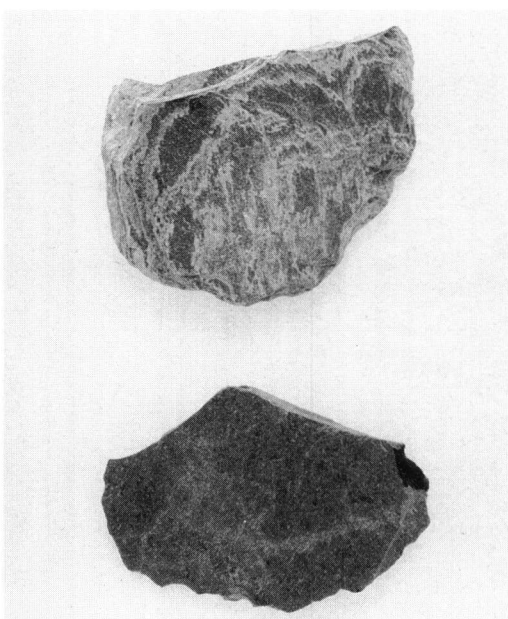


SD09出土遺物①

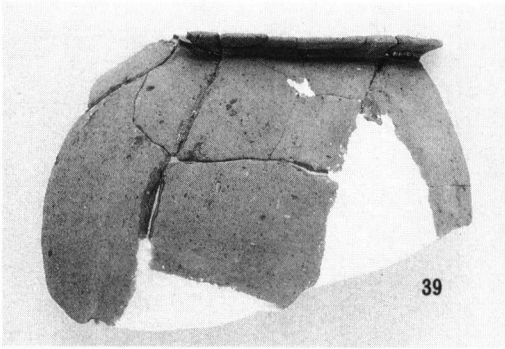


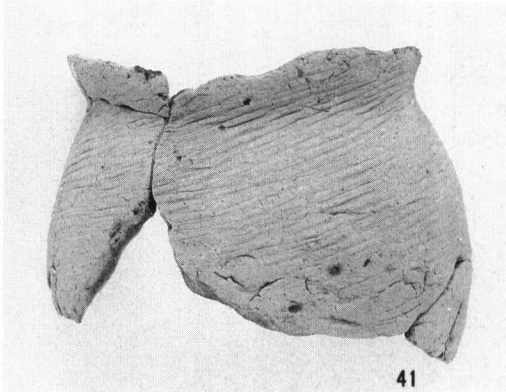


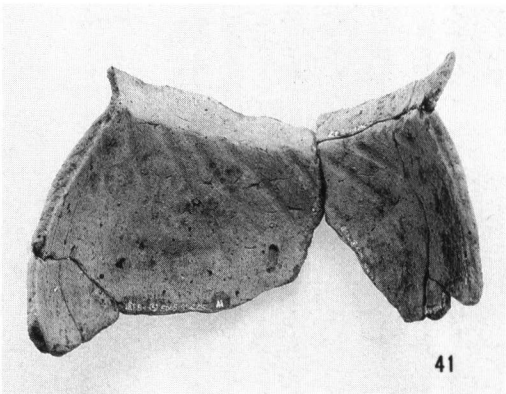




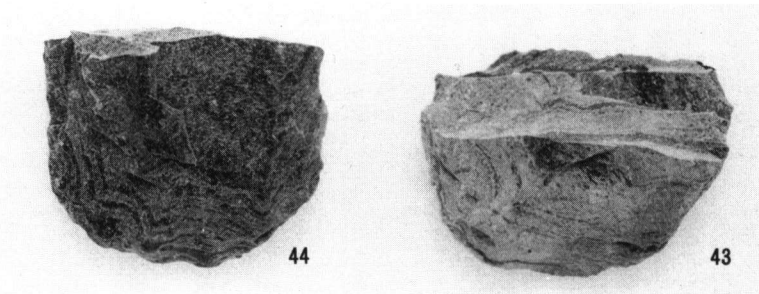
SD09出土遺物②

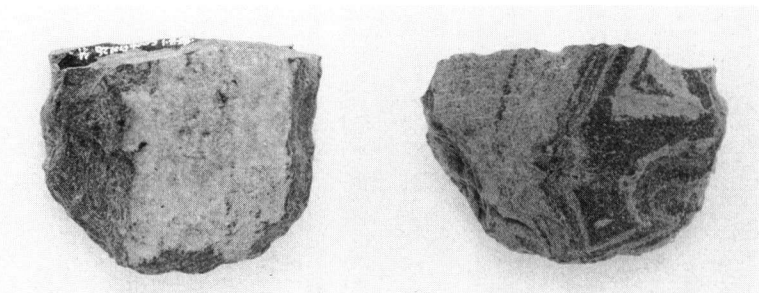




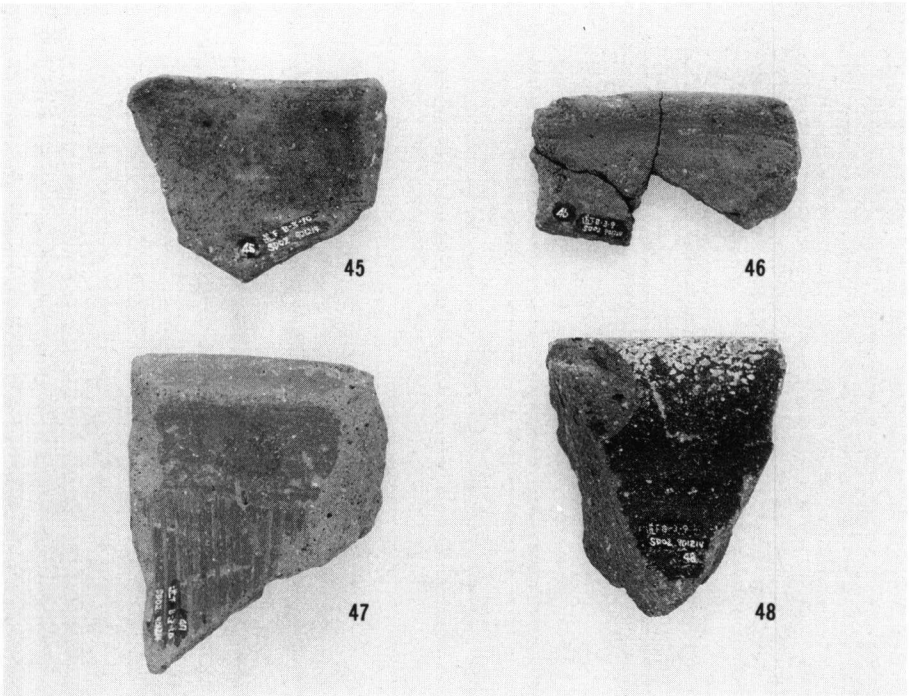


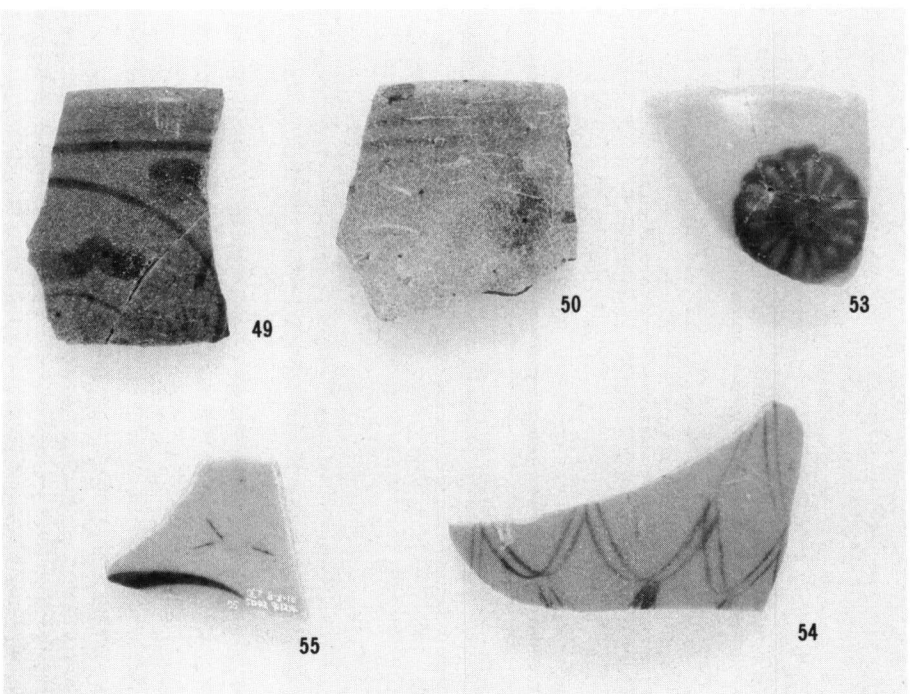
(1)　SD19出土遺物



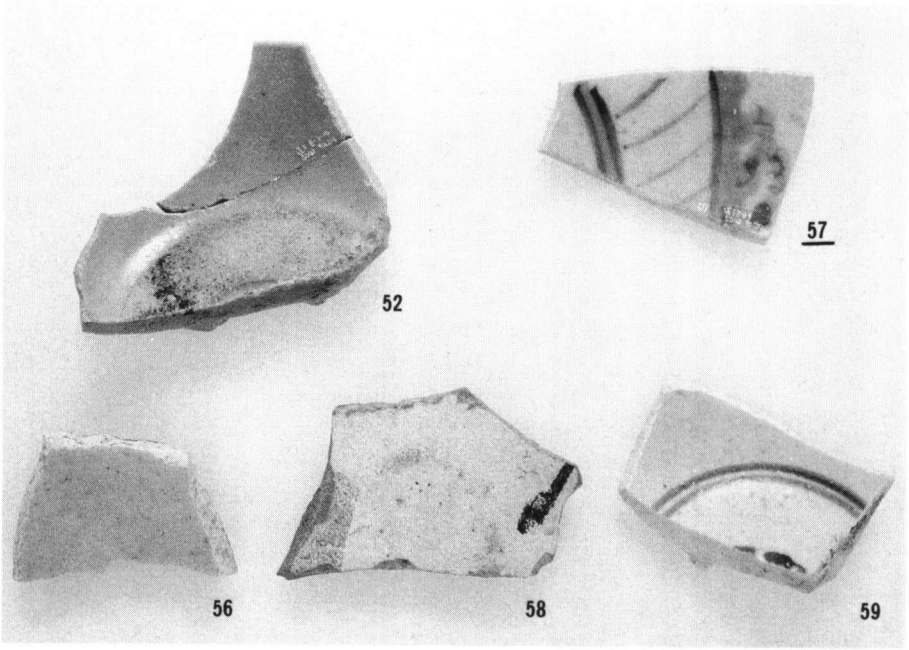


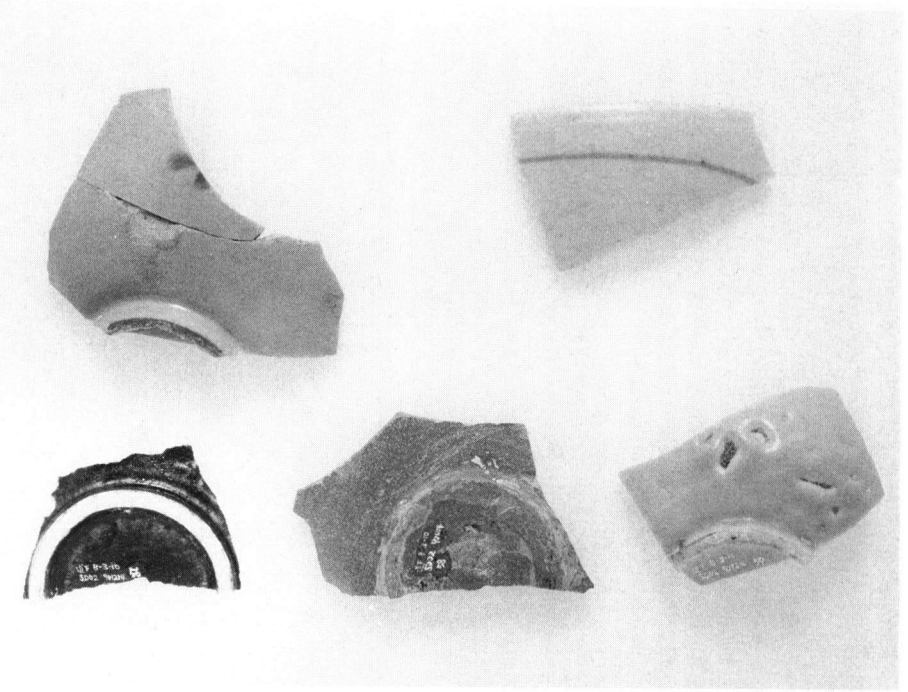
(2)　SD12出土遺物





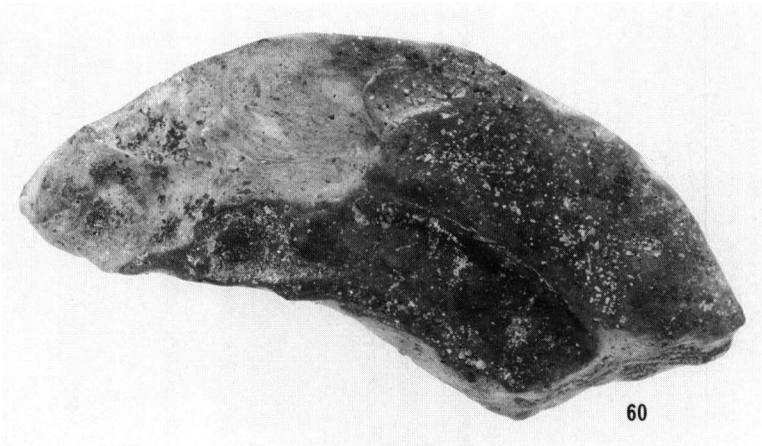
SD24出土遺物①



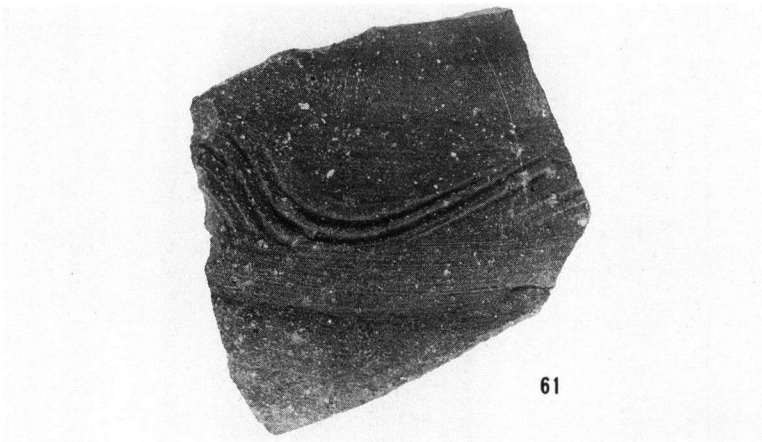


SD24出土遺物②

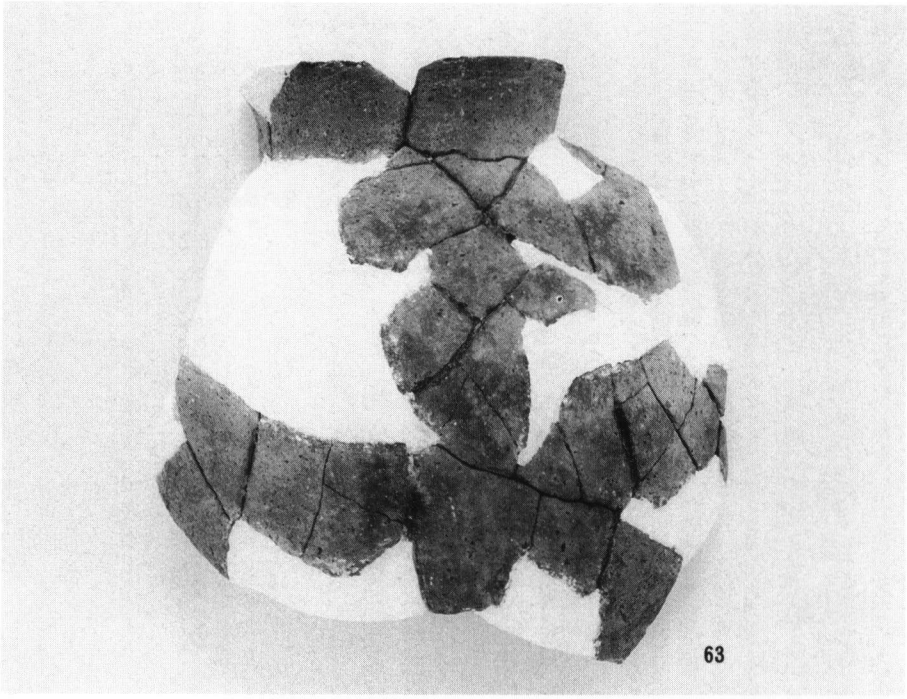
(1) SD24出土遺物③

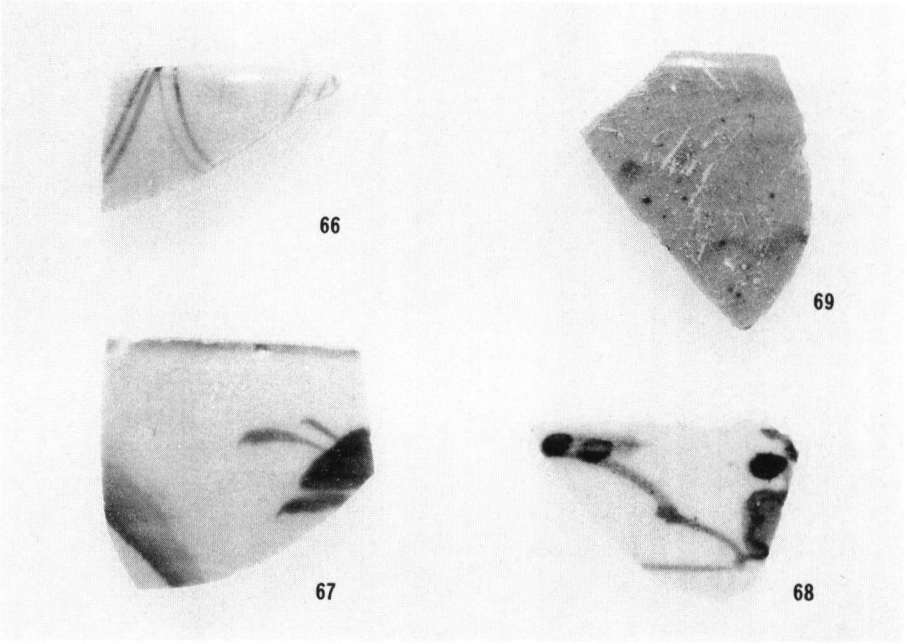


(2) SD26出土遺物

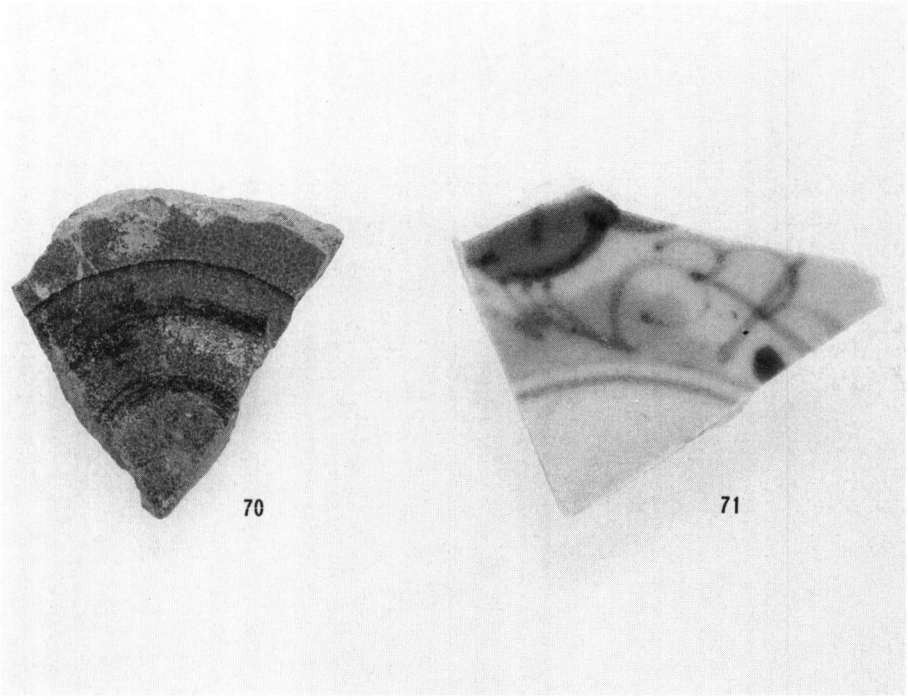


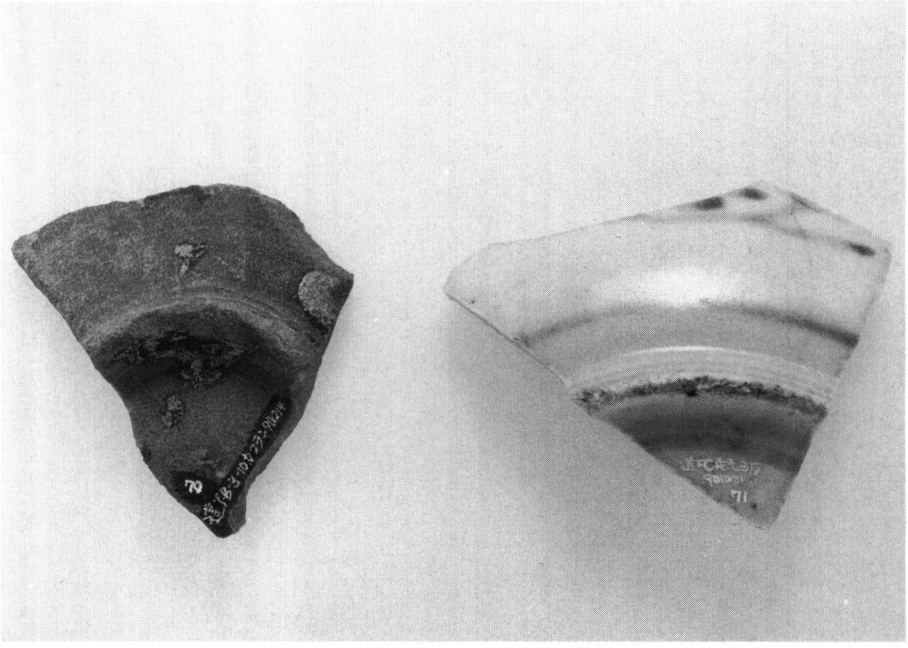
(3) SK16出土遺物



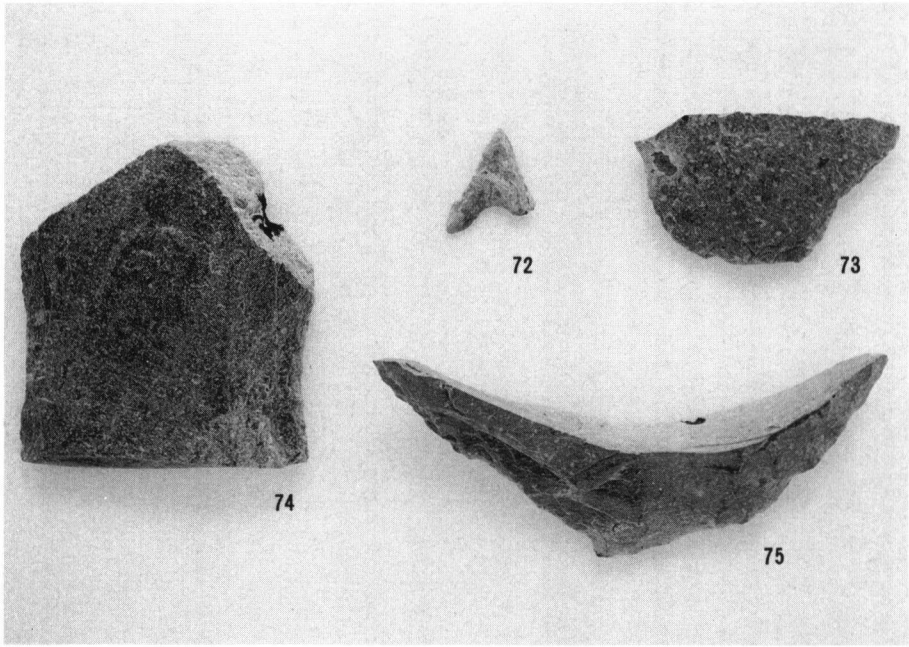


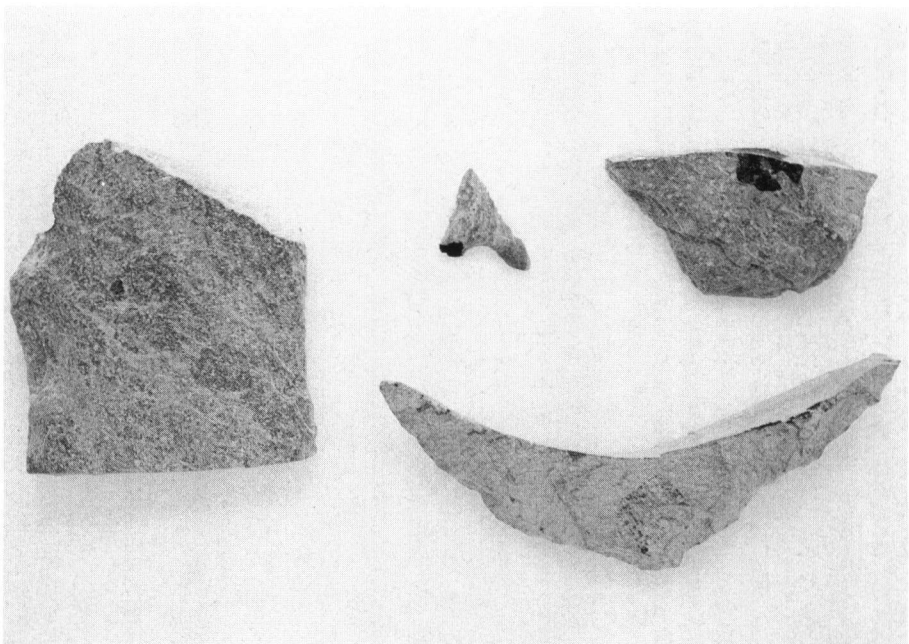
包含層出土遺物①





包含層出土遺物②





包含層出土遺物③

県道多度津丸亀線緊急地方道路整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

道　下　遺　跡

平成３年11月30日　　発行

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001－４
電話　（0877）48－2191

発行　香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

印刷　中央印刷（株）
高松市成合町742－1